



2015年度 中央大学ボランティアセンター報告書





2015年度 中央大学 ボランティアセンター報告書

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



【巻頭】 学生たちのボランティア活動



「相手の利益を最優先に考えるボランティア」

中央大学法学部法律学科2年
はまぎくのつぼみ代表 吉田 沙織

相手の利益を最優先に――。

この言葉は、団体の先輩がいつも私たちに投げかけてくださった言葉の一つであり、いつしか活動における理念となりつつあります。傍から見れば、ボランティアとして当然のことかもしれません。なぜならボランティアの語源には、「志願兵」という意味がふくまれており、自発的な行動だけではなく利他性も重んじられているからです。しかしながら、これまでの現地や東京での活動から鑑みて対象者の利益に直結させるためには、団体として、また個人として具体的にどのようなスタンスであるべきか、活動にどう意味を持たせていくか考え、挑戦した一年でありました。

私は生まれも育ちも岩手であり、山や海、たくさんの自然に囲まれた土地で高校時代までを過ごしました。東京という大都市で見聞や視野を広めたうえで、将来的にはお世話になった岩手に恩返しができればと思いながら迎えた2014年4月、この団体と出会い、ボランティアを始めるきっかけとなったのです。

その中で震災や現地について事前学習や現地での活動を行っていくうちに、岩手県出身にもかかわらず地元について知識が不十分だったことに気づかされました。それから私は、現地の情報もボランティアに必要なスキルも思い込みにとらわれることなく、知って理解すること、そしてよく考えることに重点を置くようになりました。そのようにすることで、新たな一面の発見や深く掘り下げた活動へと繋がっていくのです。これは知識に限ったことではありません。人間関係においても同様です。相手をよく知り、思いやり、受け入れ、認めること。これを一時的なものにするのではなく、継続していくことで対象者の心に灯をともすことができるのではないのでしょうか。活動からこのようなことを身をもって学ぶことができたと感じています。

ボランティア活動自体は自己満足で終わってははいけません。相手の利益を最優先に考えることが大切です。ただ相手の利益を第一に考えるならば、まずは相手を知る、共に考える姿勢が根底にあるべきだと考えます。そこからたくさんのことが得られ、活動に生かせるだけではなく、必然的に自らの糧となっていきます。これからも、支えてくださる方々への感謝の気持ちを忘れずに、東北出身者としての責務を果たしていきたいと思えます。

「ジョハリの窓」

中央大学文学部社会学科2年
はまらいんや代表 志賀 未希

私がこのボランティア活動で学んだことは自分と向き合う怖さとその必要性でした。これほど自分について考える活動はないと思います。私たちの団体では毎回の活動前にその活動の目標を考えるのですが、その際に必ずメンバーから指摘を受けます。それは団体のメンバー全員でその人の目標をサポートすることに加え、一人で目標を考えることによって陥りやすい「なんとなくこんな感じ」になる目標を避け、より深く理解するためです。

2年生の夏の活動の目標設定は、私の活動の中で一番自分と向き合った活動だと言えます。メンバーからの指摘はその目標を達成して最終的にどうなりたいのか、どうやって達成できたか判断するのか、それを達成する方法など様々なものですが、とても重要なものでした。その指摘に対して思っていることをうまく表現しようとして言葉を選んでも、それが適切でないような気がして結局言葉に詰まることが多く、何日にもわたって私の目標設定は行われませんでした。

現地で目標設定のミーティングを行ったことにより、そのミーティングが終わった後も自分一人で指摘について考えることができました。最初はうまく伝えられないことにもどかしさを感じていました。しかし考えを進めていくうちに、言葉を詰まらせたのは自分が目標を整理できていなかったからであることに気づき、整理できていたと思っていた自分の浅かった考えに直面し涙が止まりませんでした。物事を深く考えることが苦手で、途中で考えることを曖昧にしてしまう自分と真正面から向き合った瞬間でした。自分の嫌なところを直視してショックを受け、また自分が情けなく否定したいと感じて出た涙だったと今は思います。しかし自分の考える癖をわかっていると冷静に自分の考えを見直すことで、どういうところがまだ曖昧なのか考えることができるようになり、身をもって自分と向き合うことの必要性を感じました。

認識したくないと思えば思うほど、それが見えないように取り繕おうとします。そんな自分は他人からは発見されにくいものなのでしょう。自分と向き合えたからこそ、一人の人間として相手と関わるこのボランティア活動を通して、隠していた、嫌いな自分を認識できたんだと思います。ジョハリの窓での「秘密の窓」や「未知の窓」に相当する自分を認識できたことは、コミュニケーションでも自己成長においても重要な大切な一歩だったと思います。

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



「ボランティア活動を通じてわたしが学んだこと ～子どもの元気と日本の課題～」

中央大学法学部法律学科2年

面瀬学習支援代表 松本 紗季

私は宮城県気仙沼市面瀬地区で、子どもたちの長期休み期間に、主に学習指導を中心とした活動を行っています。ボランティア活動で、自分の住む地域で、子どもと関わる機会を通じて感じることは「元気な子どもたちの周りは活気に満ちている」ということです。笑顔に溢れているのです。

東北に行った際、とある男性との出会いがありました。その方は初対面である私に震災当時のお話をしてくださいました。つらいお話でしたが、最後にお孫さんの話をしてくださった時の笑顔は驚くほど生き生きとして活力に満ちていました。

困難を乗り越えさせるパワーが、子どもたちの笑顔にはあるのだということを改めて感じる一場面でした。そして今このパワーを必要としているのは、復興への長い道のりを歩む東北なのではないかと考えられたことが私にとっての学びであり、学習支援ボランティアに参加し続けたいと願う理由のひとつです。

子どもたちには大人にパワーを与えるだけではなく、彼ら自身が将来に希望を持って自分の人生や東北の復興について考えて欲しいと願っています。私たちにできることは本当に小さいことかもしれませんが、東京から来た大学生との交流や勉強を通して少しでも何かを学んでもらえるよう、私達自身も輝いた存在でありたいと思っています。

また東北は、日本全体の課題が顕著にあらわれていると言われていています。少子高齢社会、過疎化、産業の空洞化がその一例だと思います。私はそれまで自分の周りのことしか知ろうとしていませんでしたが、東北でのボランティア活動をきっかけに、ほんの少しですが日本全体の課題を考えられるようになりました。それは私にとって大きな学びです。

以上のことに限らず、ボランティア活動を通して学んだことは数えきれません。2年生になり団体の先頭に立って運営をするにあたり、仲間へ何かを依頼することの難しさを何度も感じました。変に気を遣ってしまううまく頼ることができず悩んだ日々もありましたが、人を頼るということは、その人を信頼していることの証しであり、気を遣うということは時に仲間に対し失礼にもあたるということを学びました。相手を信じ一緒に取り組むことも大事な能力であると痛感しています。そして支えられる心地よさも学びました。

ボランティア活動は私にたくさんのことを学ばせてくれました。これからも関わってくださる皆様に感謝し、仲間と共に全力で活動していきたいと思っています。

「ボランティア活動を通して学んだ人と接することの大切さ」

中央大学法学部法律学科2年

チーム女川代表 楠 貴裕

私がこれまで行ってきたボランティア活動は、女川町の物産展のお手伝いや現地の方とお話することなどの人と実際に接するものでした。その活動を通じて、私は今まで気づけなかった自分の新たな側面を見つけることができました。

チーム女川は、東京で開かれる女川町の物産展等にお手伝いとして参加させていただいています。そこで相手するお客さんは当然のことながら初対面の人です。そのような人たちに女川町についての説明を行うのですが、これがなかなかうまくしゃべることができず、最初のうちは訪れた人たちへわかりやすく伝えることができませんでした。大学生になるまでは人と話すことに苦労をするという経験はあまりありませんでした。ボランティア活動を始めるまでは、親しい顔見知りの人たちと話すだけでよかったのですが、その経験を経て初対面の人と話す機会があまりなかったのだなと気づかされました。そして、今まで顔見知りの人に対しては特に考えてしゃべるといふこともしていなかったのですが、相手にどう話せば自分の言いたいことが伝えられるのか考えるきっかけにもなりました。

また、私は団体のリーダーとして活動させていただいています。私たちは活動の振り返りなどのためにミーティングを行っているのですが、ある日そのミーティングの終わりに先輩から話があると聞かれました。その先輩が言うにはミーティング中の私のしゃべり方がメンバーに対して威圧的であったことと、私が質問するとき相手がYesかNoかでしか答えられない質問が多かったということでした。「そういう風に話しているとメンバーのみなも自分の意見が言いづらくなるし、良くないよ。」と言われてしまいました。リーダーとしてメンバーの意見をしっかりと汲み取らないといけないのに、それができていなかったことを気づかされました。

このように私は、自分の未熟な面をボランティア活動を通して発見しました。そして、それを見つかるのはいつも他人と接する中で見つけたものでした。他人と接する中で一人では見ることのできなかった自分自身を見つかることができ、それを繰り返す中で人間として成長していけるのではないのでしょうか。そのことをボランティアは教えてくれたと感じます。

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



「私にとっての財産」

中央大学法学部政治学科3年
チーム防災 佐藤 広基

私は、福島県伊達郡桑折町という小さな町の出身です。そこで、高校2年生の時に東日本大震災を経験しました。町は内陸に位置しているため、津波や原発の重大な被害は免れましたが、その日から被災した地域に対し、「自分は一体何をすべきか」と問い続けてきました。その答えを探すために、中央大学ボランティアセンター主催の「宮城県女川町スタディーツアー」に参加しました。宮城県女川町とは、大きな被害を被った地域です。このツアーに参加した理由は、何をすべきか分からない自分にとって、まずは「被災地の現状を正しく知ることが必要だ」と考えたためです。

スタディーツアーに参加して、震災前からお茶屋さんを営んでいた方からお話を伺いました。その中で印象に残った言葉がありました。それは、「震災は忘れた頃にやってくるものだよ。次は東京かもしれない。一瞬一瞬を大切に生きて。」という言葉でした。この言葉を聞いて、私がすべきことが明確になりました。そのすべき事とは、被災地への貢献ではなく、「東京の防災力」を高めることでした。現在東京に住み、過去に福島県出身で震災を経験し、宮城県女川町の方たちの思いを知った「私」だからこそできることだと考え、あえて東京での活動を選びました。

この思いのもとで、私を含めた2名で「チーム防災」というチームを立ち上げました。そして、「人財育成」を軸とした「地域の防災力向上」を目標に掲げて、大学内、自治会、高校、商業施設などで静岡県NPO法人「プラスアーツ」が開発した「避難所運営ゲーム」の開催及び開催のお手伝いをしてきました。私たちのゲームに参加してくれた学生から、「いざというとき自分も地域の力になりたい」といった声や、地域の方は「自分の自治会にもこのゲームを取り入れたい」という声を聞くことができました。

この活動を通じ、学んだことは、「防災を他人事から自分事に変化させること」が、防災力の輪を広げる第一歩だと言うことです。そして、他人を変える前にまず、「自分の変化」が必要です。私にとっての変化とは、「現状を正確に把握し、現状から自分にできることを発見すること」でした。私は、自分自身を変化させることで相手を変化させ、そして社会までも変えていけるような人間になりたいと思います。そして、このような将来目指したい人間像を発見できたのも、私自身に影響を与えて下さった皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

「学生が地域に出るといふこと」

中央大学商学部経営学科3年
チーム防災 中村 亮士

私は、ボランティアセンター所属団体の「チーム女川」の一員として、これまで宮城県女川町を訪れ、震災当時のことや復興の状況について見聞きしてきました。そこで学んだことを大学周辺地域へ飛び出して活かそう、という思いから、「チーム防災」として活動を始めました。

「チーム防災」の一つのゴールは、「地域の方を巻き込んで避難所運営ゲーム（HUG）を実施する」というものでした。それに向けて、防災訓練や勉強会などの地域の防災イベントに継続的に参加してきました。

そして自分たちが企画したHUGのイベントを無事終えましたが、反省点やご指摘をいただきました。それは無駄にはなりません、同時に、参加者や関係者の方々から、「今後も頑張ってください」と激励の声をいくつも受けました。初めはメンバー2人でスタートし、チームとして続けられるかという不安すらありました。しかし今では4人に増え、チームとしての今後の展望を気にくださる住民の方もいて、私たちの活動が少しずつ地域で受け入れられつつあると感じ、何より嬉しく思いました。

私はふと、「学生や若者が地域に出て防災を学ぶこと」にどのような意義があるのか、と考えることがありました。その意義の一つは、「災害時に助け合える関係性を作るため」だと感じています。活動している中で、「若い人がより参加してくれるといいよね」という声を伺うことがありました。確かに私が参加したイベントは、全体的に年齢層が高めでしたが、老若男女関係なく参加し顔を合わせる必要があると思います。災害時には警察や消防がすぐ来てくれるとは限らず、実際に阪神淡路大震災の時には、要救助者の内、8割が近隣住民等に救助されたそうです。住民同士で手を取り合って協力できるように、普段から顔を合わせコミュニケーションをとることが重要なのだと学びました。

そしてもう一つは、「防災について学ぶこと自体が大きな意味を持つため」だと思います。救助スキルや避難所運営の知識を知らないと、いざという時にスムーズに動けません。私が活動を通して学んだそれらは、災害時に必ず生きると信じています。

私は今後も大学周辺や私の住む地域に飛び出し、そこで築いた関係性を大切に、そしてこれからは、活動を通して学んだスキルや知識を私より若い世代にも知ってもらうため、「伝える」ことも重視しながら、いつでもどこで起こるかわからない災害に備えていきたいです。

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



Contents

【巻頭】 学生たちのボランティア活動

「相手の利益を最優先に考えるボランティア」

中央大学法学部法律学科2年 吉田 沙織 3

「ジョハリの窓」

中央大学文学部社会学科2年 志賀 未希 3

「ボランティア活動を通じてわたしが学んだこと～子どもの元気と日本の課題～」

中央大学法学部法律学科2年 松本 紗季 5

「ボランティア活動を通して学んだ人と接することの大切さ」

中央大学法学部法律学科2年 楠 貴裕 5

「私にとっての財産」

中央大学法学部政治学科3年 佐藤 広基 7

「学生が地域に出るということ」

中央大学商学部経営学科3年 中村 亮士 7

刊行によせて

学生部長 中川 恭明 14

ボランティアセンター長 中澤 秀雄 15

ボランティアコーディネーター 松本 真理子 16

ボランティアコーディネーター 開澤 裕美 17

活動編

1. 東北ボランティア

1. 新入生スタディーツアー 20

2. 夏季ボランティア

(1) 夏季集中ボランティア 27

(2) 女川町復興支援インターンプロジェクト 29

3. 災害ボランティア活動

台風18号（関東・東北豪雨）水害ボランティア 31

4. 春季ボランティア

(1) 気仙沼スタディーツアー 33

(2) 神戸スタディーツアー 35

(3) 女川町復興支援インターンプロジェクト 37

5. 学生団体の活動 46

2. 学内ボランティア

1. クリーン大作戦・春の陣 60

2. クリーン大作戦・秋の陣 61

3. クリーン作戦ミニッツ～昼休み30分間のゴミ拾い活動～ 62

3. 地域連携

1. 地域防災	
(1) チーム防災.....	63
2. 連携事業（八王子市・日野市）	
(1) 大豆プロジェクト.....	69
(2) ユギ里山活動.....	70
(3) みんなの遊・友ランド.....	71
(4) みんなといっしょの運動会.....	72
(5) まちづくり市民フェア2015.....	73
(6) 夢ふうせんバザー.....	74

4. 地域と学生のコーディネート.....	75
-----------------------	----

報告編

5. 学内活動報告

1. 被災地支援学生団体活動写真展.....	78
2. 宮城県女川町 復興支援インターン写真展.....	79
3. ボランティア写真展2015.....	81
4. 父母対象キャンパスライフ体験会.....	83
5. 中央大学教育力向上推進事業報告会～ボランティアセンターリーダー養成メソッド.....	84

6. 学外での活動報告事業

1. 大学ボランティア活動写真展@日野市役所.....	87
2. 明星大学きらきらボランティアセンター主催 「2015夏の学生ボランティア活動報告会～広がる世界、つながる仲間」.....	88
3. 「新しい東北フォーラム in 仙台」における復興支援インターン報告.....	89
4. 早稲田大学 早稲田文化芸術週間2015イベントシンポジウム 「4年後の自分と東北を想像しませんか？ ～『復興支援インターン』を通して復興を考える」.....	90
5. 中央大学杉並高等学校・ボランティア活動勉強会.....	91
6. 大学生ボランティア活動報告&防災イベント.....	92
7. 八王子市役所でのパネル写真展.....	96

学び編

7. 入門

1. ボランティア講座	
【多摩】	
(1) 公務員になりたい人のための連続・ボランティア講座.....	98
(2) ボランティア体験×学び 振り返りワークショップ.....	99
(3) 春休み、一歩踏み出したいアナタのためのボランティア講座.....	100
【後樂園】	
(1) 前期 理工学部 ボランティアオリエンテーション.....	101
(2) 後期 理工学部 ボランティアオリエンテーション.....	102
2. ボラカフェ.....	103
3. 災害救援ボランティア講座.....	105

8. スキルアップ

1. ミニシンポジウム「都市計画課とNPOの視点から阪神淡路（御蔵通）と東日本大震災（三陸リアス沿岸）～生活・生業・コミュニティ再建とファシリテーション」..... 106
2. 講座「傾聴講座」（1）..... 107
3. 講座「傾聴講座」（2）..... 108
4. 講座「被災地の子どもたちのケアについて」..... 109
5. はまらいんやミニシンポジウム 110

資料編

9. 表彰状受賞学生 112
10. ボランティアセンター 利用集計 113
11. ボランティアセンターの取組記録 114
12. 協力・連携・助成金 120
13. メディア掲載
 1. 大学関係広報誌 123
 2. 新聞記事・広報誌等 150
 3. メディア放送 157
14. 作成物掲載
 1. 刊行物 158
 2. ポスター・チラシ 162
15. ボランティアセンター組織規約
 - 中央大学ボランティアセンター及びボランティアセンター運営委員会設置要綱 168
 - 2015年度ボランティアセンター運営委員 169
 - ボランティア情報の取扱いに関する方針 170
 - 団体登録シート 172

刊行によせて



学生部長 中川 恭明

中央大学ボランティアセンター（CVC）報告書をお届けいたします。

2011年3月11日の東日本大震災発生直後より始まった活動の運営態勢が名実ともに充実し、継続することとなったのが2015年度と言えるでしょう。それは、平成27（2015）年度「中央大学教育力向上推進事業」の支援取組である「ボランティアによる地域連携と人材育成」について平成29（2017）年度まで継続して支援する旨の通知が教育力向上推進委員会より届き、そこでは着実かつ積極的な推進がいくつかの検討事項を踏まえつつも期待されていたからです。コーディネーターは1名から2名に増員され、専従のパート職員も採用されました。各学部教授会選出の委員からなるボランティア運営委員会が発足いたしました。ボランティアセンター長（中澤秀雄法学部教授）も選出され、理念も発表されました（<http://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/overview/vision/>）。また、学生に情報を提供する外部団体の登録制も整備いたしました。『CVCだより』の発行も始まりました。

このような態勢作りの中心とも言える学生の活動について、一番の喜び、心の充実、充足とも言えるのは、被災地域から入学した学生が2名いたことです。中央大学の学生が地元で活動しているのを知り、入学したとのこと。今も被災地支援学生団体は継続して活動しておりますが、年齢もさして違わない学生の姿が一つの希望となり将来の可能性を育むものとなったのかも知れません。被災地ボランティアを経験した学生の中から、多摩での地域防災に取り組む学生が生まれ、「チーム防災」が誕生し、自治会、学校など地域10ヶ所に出向き防災活動を行いました。自発的な学生による活動としての地域連携の好例でありましょう。また、イオンモール多摩平の森での活動報告会（2016年2月4日～11日）は日野市や日野市社会福祉協議会などの協力を得て、昨年より2大学増の6大学で行われました。

最後になりましたが、2015年12月5日に行われた「中央大学教育力向上推進事業報告会」ーボランティアセンターリーダー養成メソッドーについて触れておかなければなりません。参加者30数名、松本真理子氏（コーディネーター）の開会挨拶に引き続き、中澤秀雄氏の大学ボランティアセンターの意義と歩み、そして5名の学生による活動成果報告とトークセッションを通して、教育効果測定が行われた。第1期目生とも言える2013年入学の3年生のこれまでの2年半の活動、より正確には活動を通しての意識の変化を振り返っての発表でありました。変化の要因と過程を自覚することが学生の成長につながったに違いありません。そこに、ボランティアの意義が存するのではないのでしょうか。

■中川 恭明

（総合政策学部教授 専門分野／フランス言語学・社会言語学）

東京都出身。1979年上智大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士課程満期退学。
東京工芸大学工学部助教授、中央大学総合政策学部助教授などを経て、2003年より現職。
『日本語と外国語との対照研究Ⅸ 日本語とフランス語 ー音声と非言語行動』
（共著、国立国語研究所）、『語の選択』（共訳、白水社）。
2015年4月1日より学生部長に就任。

ボランティアセンター長 中澤 秀雄



中央大学ボランティアセンターが、要綱と運営委員会をもつ正式な学内組織となつてから初めての報告書をお届けいたします。本センター設立のきっかけとなつた東日本大震災から5年が経過した今年度、マスメディアは忽然と被災地報道から撤退し、社会的な関心は極端に薄れてしまいました。「もう被災地は復興したのでしょうか？」という声もよく聞きます。答えは否です。私たちが5年間お世話になってきた気仙沼の小学校の先生方は、「昨年くらいから、子どもの心の荒れがひどくなり、ベテランでも手を焼いている」と告白し、悩んでいます。被災をきっかけにした経済社会環境の変化が家庭の生活リズムや人間関係を直撃し、ドミノ倒しのよう子ども心に負荷をかけているのです。だからこそ、継続的に子どもたちと関係を築いてきた大学生に対して、地元から大きな期待が寄せられています。東北被災地ではなお、土盛り工事の連続でカーナビが意味をなさない更地をダンプカーが行き交い、悪条件の仮設住宅での暮らしが続き、生業の立て直しへの苦闘が続いています。「復興インターンシップ」で気仙沼・女川の水産加工企業にお世話になった学生たちは、こうした環境での生活・生業再建の困難さを実感すると同時に、一方では、それでも所与の条件の中でベストを尽くそうとする人間の気高さ、何かを成し遂げようとする志や理念の大事さを学びました。変わらず資金面で学生の活動を支援下さった学員会・電通育英財団・日本財団学生ボランティアセンター・住友商事には衷心より御礼申し上げます。そしてもちろん、学生を受け入れて下さっている東北の皆さまには、重ねて感謝申し上げます、この関係を更に発展させられるよう、今後ともよろしくお願い申し上げます。

東北から貴重な学びを得た学生たちは、地元多摩での防災についても高い意識を持つようになり、田野・八王子などの市役所・社会福祉協議会・自治会・防災会・学員の皆様のご協力のもと、様々な地域防災イベントにも出向くようになりました。豊田駅前のイオンモールでの写真展も2年連続で実施させて頂き、あたたかい応援の声を頂戴しております。さらに、4月からボランティアセンターに加わった経験豊富なコーディネーター、開澤裕美さんのお力で、福祉・まちづくり・農の分野での地域活動においても多様な関係を作らせていただいています。東京でお世話になっている皆様にも心より御礼申し上げます。

「中央大学社会貢献・社会連携推進会議」においてボランティア活動は、大学の第三のミッションである社会貢献の柱として位置づけられています。学生部を筆頭に学内でお世話になっている皆様には、これまでのご尽力に感謝申し上げますとともに、今後ともお力添えをお願いする次第です。

■中澤 秀雄

(法学部教授 専門分野／政治社会学・地域社会学)

東京都出身。1994年東京大学卒。2001年東京大学から博士(社会学)の学位を取得。札幌学院大学社会情報学部講師、千葉大学文学部准教授を経て2009年から現職。日本社会学会、地域社会学会等に所属。主著は新潟県原発問題を扱った『住民投票運動とローカルレジーム』(ハーベスト社)や廃棄物・原子力・環境文化等のテーマを幅広く扱った『環境の社会学』(共著、有斐閣)など。前者により第5回日本社会学会奨励賞、第32回東京市政調査会藤田賞などを受賞。2012年4月1日より学生部ボランティア担当委員に就任。



ボランティアコーディネーター 松本 真理子

ボランティアセンター3年目の報告書となりました。日頃からセンターを応援して下さる、地域やご父兄、OB OG、関係者の皆様、そして共に走ってくれる学生たちに心から感謝します。

2015年度はコーディネーターが1人から2人となったことで、過去2年の事業を振り返り、そこからより発展させていく年となりました。

初の「事業報告会」を12月に開きました。センターの中心的な学生5人の発表を通し、大学ボランティアセンターの役割・意義を内外に問う場となりました。発表学生はセンター設立年に入学し、真摯な姿勢で地域から信頼され、今日まで東北各地で活動を続け、「中央大学のボランティア活動」を地域に示してきた学年です。活動はそれだけでも十分に意義のあることですが、大学ボランティアセンターはそこに教育的な観点で関わり、学生の成長につなげるという役割があります。2年で何が出来ていたのかを見つめ、それを仕組みとして4年目以降につなげる道を考えました。また新たに「チーム防災」が生まれた年でもありました。東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県女川町でのボランティア活動を通じて、日頃の地域コミュニティによる防災の重要性に気が付いた学生が、多摩地域の自治会や小中学校とともに防災活動を始めました。彼らが活動理念として掲げていた言葉は「忘災ではなく、防災へ」。東北の経験を忘れずに次の災害に活かすための取り組みは日野市社会福祉協議会に表彰いただきました。多摩地域の大学・行政間のつながりも広がりました。2月、イオンモール多摩平の森で「大学生被災地ボランティア活動パネル展」を前年に引き続き開催し、参加大学は2つ増えて中央・明星・実践女子・東京薬科・首都大学東京・法政となりました。各大より集まった学生たちは「ボランティア」という共通項からすぐに打ち解け、また互いに刺激され学び合いが生まれていました。5年目となる東北の活動も、仮設住宅の解消等の新たな局面を迎えるなかで先輩から続く人のつながりを後輩たちが受け継ぎ、現地の方の気持ちに寄り添う活動を続けました。多摩地域では里山保全や地域の祭りなど多摩の歴史と都市課題を背景に持つフィールドを広げることができました。

さて、2016年4月14日・16日に発生した地震で、熊本・大分に大きな被害が出ました。その翌日には何人もの学生たちが「自分たちにできることをしたい」とセンターにやってきました。何ができるのかについては今すぐ見えていなくても、何かをしようとする勢いが学生たちにはありました。こうした学生の他者を思う優しさや一歩踏み出す勇気を、地域の方たちの実情に合わせながら、センターはこれからも活動を続けていきたいと思えます。

被災し被害に遭われた各地の皆様へ、一日でも早い心穏やかな日が来ますことを心よりお祈りします。

■松本 真理子

(中央大学ボランティアセンター コーディネーター)

千葉県出身。2004年明治大学卒。在学時にキャリア教育のNPO団体立ち上げに参加。コミュニティ紙の記者、地産地消イベントプロデューサーなどを経て、2011年9月より宮城県女川町で子どもたちの放課後の居場所「コラボ・スクール女川向学館」(運営:認定NPO法人カタリバ)にて広報・地域コーディネーターとして従事。2013年4月より現職に就任。

ボランティアコーディネーター 開澤 裕美



中央大学ボランティアセンターが設立して3年が経ち、活動の質と量ともに、大きく深くなっているのではないかと思います。これは一重に、日頃からお世話になっている皆さまのお陰であり、心から御礼申し上げます。

2015年度は、東日本大震災から5年目という大きな節目を迎え、東北へ通う学生たちにとっても、何らかの活動の転換期を迎える一年でした。「技術も持たない学生の私たちに何ができるのか」と、日々状況が変化していく現地を前に悩む学生と、素人の大学生だからこそできること、現地に通い続けることの大切さ、それを発信し続けることの重要性を共に学び、その思いとともに歩いていった毎日でした。

日野市・八王子市の市役所や社会福祉協議会、ボランティアセンターの皆さまをはじめ、近隣の大学とともにイオンモール多摩平の森にて2月に行ったイベントでは、他大学の学生にいい刺激を受け、意気揚々と変化していく学生を目にすることができました。一大学だけではなく、複数の大学や地域の皆さまと協働で取り組む良さを改めて実感しました。また「チーム防災」のメンバーを中心に、地域や大学内外での防災への取り組みも始まり、地域の皆さまには大変お世話になりました。

大学内では、お昼休みにボランティアについて気軽に話す場『ボラカフェ』が始まり、学生の日頃の取り組みをまとめる機会として、何かをスタートするきっかけの一つとして、新たな場となり機能し始めています。

私は2015年4月より、ボランティアコーディネーターとして日々学生や地域の皆さまと一緒に活動させていただいております。この職について、改めてボランティアって何だろう？と考える機会が多く、またボランティアだからこそ学べることの大きさや奥深さを感じています。

「大学生だからこそできることを何かしたいんです！」と、キラキラした目でボランティアセンターに相談に来る学生を前に、これからもボランティアの楽しさや魅力、広がる可能性の大きさを学生と地域の皆さまと一緒に探り、広げていきたいと思っています。一人でも多くの大人に触れ、これまでの考え方や価値観を揺るがすような出会いを生み、今後の社会を創造的に創っていける人財を育てられるセンターであるべく、尽力してまいります。皆さまには今後ともご支援のほど、何卒よろしく願いいたします。

■開澤 裕美

(中央大学ボランティアセンター コーディネーター)

京都府宇治市出身、同志社大学法学部政治学科卒業。国際ボランティア活動を企画・運営するNPO法人で関西事務局を立ち上げた後、CSR（企業の社会的責任）のコンサルタントを経て、2015年4月より現職。NPO法人NICE（日本国際ワークキャンプセンター）副代表・理事も務める。

活動編

1. 東北ボランティア

1. 新入生スタディーツアー

- 実施日：6月5日（金）～7日（日）
場所：宮城県牡鹿郡女川町
参加者：26人（新入生12人、学生スタッフ12人、職員2人）
目的：
 - ・大学に入学したばかりの新入生が、東日本大震災で被災した地域を自分の目で見ることで、被災地の現況を知り、これからボランティア活動を始めるとあって、自分自身に何が出来るのかを考え、次の一步を踏み出す機会とする。
 - ・スタディーツアーで定期的に訪れることで、現地に「忘れていない」というメッセージを届ける。
行程：1日目：多摩キャンパス発（車中泊）
2日目：石巻到着（石巻市立門脇小学校見学）＝女川町着（町立病院見学＝我歴ストック会場設営ボランティア＝女川駅・あがいんステーション見学＝フューチャーセンターにて阿部喜英氏のお話＝きぼうのかね商店街にて商店主のお話（島貫洋子氏・小野寺武則氏）＝女川町宿泊村協同組合「El Faro（エル・ファロ）」にて佐々木里子氏のお話／宿泊：「El Faro」
3日目：3階建て仮設住宅・災害公営住宅運動公園住宅の見学＝蒲鉾工場高政見学および高橋正樹氏のお話＝我歴ストックの見学＝女川発＝多摩キャンパス到着・解散
主催：中央大学ボランティアセンター
協力：中央大学ボランティアセンター学生スタッフ「チーム女川」

事前・事後の学習会

《事前》

- 第1回 「訪問地女川について基礎基本情報の確認」
〈多摩〉5月11日（月）・15日（金） 〈理工〉5月12日（火）
第2回 「地域に入るときのマナー入門・絶対にやってはいけないこと」
〈多摩〉5月18日（月）・22日（金） 〈理工〉5月19日（火）
第3回 「現地で聞きたい質問内容を精査・各人の目標発表」
〈多摩〉5月25日（月）・29日（金） 〈理工〉5月26日（火）

《事後》

- 第1回 「現地で得た情報を整理する」
〈多摩〉6月15日（月）・12日（金） 〈理工〉6月9日（火）
第2回 「今後につなげるために」
〈多摩〉6月23日（月）・19日（金） 〈理工〉6月16日（火）

〈参加学生の声〉

丸上貴史（法学部1年生）

私が女川町を訪れてみて感じたことや、訪れて初めて気づいたことについて大きく2つに分けてまとめました。まず、女川町を訪れる前に想像していたことと現状が異なっていたものについてです。私が最も予想と現実の間にギャップを感じたのは、女川駅周辺の復興の進捗状況と現地の人たちの意識についてでした。駅の正面に立ち並ぶ予定の商店街や、町の公民館と音楽ホールとを兼ねた地域交流センターといった建物は未だにほとんど着手されておらず、駅の

前には更地が広がっていました。駅周辺は女川町にとって経済的な復興の要であることから優先的に工事等が進められ、ある程度の完成は見えているのではないかと考えていた私は、駅の前に広がる更地に驚きを感じずにはいられませんでした。また女川町は具体的な今後の計画が立ち、津波の被害を受けた駅も立て直されていたことから、他の被災自治体と比べて復興が早いと思っていました。しかし、女川町の蒲鉾店高政の高橋正樹さんがお話の中で、町がかさ上げの段階に至ったことを「やっと」とおっしゃっていたことは、まだまだ復興の進まない現実を顕著に表しており、私が事前学習を通じて得ていたイメージとは正反対のものでした。

次に現地の方からお聞きしたことについてです。私がお話を伺った中で最も重要だと思ったのは、復興計画に関することでした。お話を聞いていると女川町の復興計画が具体性の高い現実的なものになっているのには、主に6つの理由があると考えました。1つ目は復興が長期的な視点で進められていることです。女川町は60代以上の人が多く、40代を中心とする若い世代が復興計画を策定することで、中長期的な視点に立つ復興が実現されています。2つ目に、町の主産業であった漁業にしばって産業復興を進め、町にあるものの中から復興の原動力になるものを探していくとする姿勢があることです。3つ目に、町づくりや女川ブランドの確立の上で、明確な目的、目標を立てていることです。女川町はただ漫然と震災前の状態に戻す「復旧」ではなく、町を再び興す「復興」を目指していて、駅前でターゲットとする年齢層や女川ブランド開発における目的を明確にしていました。4つ目に、地域内通貨を取り入れていることです。女川町は早稲田・高田馬場を中心に流通しているアトム通貨を導入し、地域内で利益を循環させる仕組みを構築しています。これによる町を元気づけています。5つ目に、以前の町の改善点を復興にうまく組み込んでいることです。たとえば、駅周辺で行われる祭りでは、震災前に水道や電線がなく不便に感じていたことから、新たに作られる駅前のプロムナード（メインストリート）にはそれらが埋め込まれる予定になっています。このように、肌身で感じていた改善点を復興に活かすことでより良い町づくりが実現されようとしています。6つ目に民間が主体となっていることです。女川町の復興計画は「民間主導行政参加型」といわれ、町の人々の声をより反映しニーズに合わせた復興を可能にしています。私はこの民間が主体となっていることについて掘り下げて調べました。その中で民間主体の復興がなぜ円滑に進んでいるのかということについてインターネット上に次の3つの理由が挙がっていました。1つは震災後に町にとどまる人だけで復興協議会を作ったこと。これにより、今後の女川をどうしたいかについて非常に密な話し合いが行えました。2つ目に協議会を若手が運営していること。先ほど述べたのと同様に、中長期的な計画が可能になりました。そして3つ目に協議会がシンクタンクとして町民の意見を集約し、一括して行政に伝達したことが挙げられました。行政に求められることや指摘される問題点を効果的に伝えることができました。私はこの3つ目の理由こそ女川の民間主体の復興がうまく進んでいる要因ではないかと思いました。

最後に、女川の復興と自分の学習やつきたい職を結び付けて考え、女川の復興に法律や弁護士がどのように関わっているのかについて調べました。法律については女川で新聞屋を営み、復興の中心を担う阿部喜英さんがお話の中で触れられたのですが、主だったものとして東日本大震災復興特別区域法という法律があります。これは宮城県東部復興事務所から指定を受けた個人事業者又は法人が、女川町内の復興産業集積区域、いわゆる復興特区内において、一定の事業のために新設又は増設した家屋などの施設や土地のような資産について条例に基づき、新たに課すべき年度以降、最大5年度分の固定資産税を免除するというものです。これによって被災地において、町の復興や生活の立て直しを図ろうとする人々を経済的な面から援助することができ、復興の促進にも一役買っています。次に弁護士と復興についてです。調べた中で分かったのは、今では女川の一つの名物ともいえる「女川カレー」のプロジェクトに弁護士の方が関わっていらっしゃるということでした。女川の商工会の方に対する経営相談会の場面に弁護士の方が参加され、女川カレーを販売していく上で、そもそも販売を受け持つ会社のような組織が必要なのかといったことから、材料や商品の仕入れに関わる契約書作成過程におけるアドバイス、女川カレーの製造・販売を担う従業員との雇用契約の細部に至るまで、法的な

1. 東北ボランティア

面から女川の復興に携わった弁護士の方が実際にいらっしゃったそうです。女川カレーは、そのユニークなポスターで話題となり、今では女川の看板製品になっています。私はこのように、復興の過程に法律や弁護士の方のサポートがあるという現状を知り、女川はもちろんのこと、他の被災地域や日本全国の地方自治体において、法律や弁護士などの法曹または法律専門職の方々がこういった形で、地域の復興や活性化、振興に携わっているのかを、今後の大学での学習を主として学んでいきたいと思います。

〈活動風景〉



高台から女川の街並みを眺める



地元の若者と一緒にイベント準備



2015年3月にできた女川駅周辺



フューチャーセンターで阿部喜英氏のお話



宿泊場所「エルファロ」の佐々木さんのお話



蒲鉾本舗「高政」でのお話

〈写真展〉

「東北のいま 女川町の今 女川の瞬間～被災地スタディーツアー2015活動報告写真展」

日時：7月1日（水）～11日（土）

場所：多摩キャンパス ヒルトップ2F ロビー

内容：スタディーツアーに参加した学生有志10人が「多くの人に被災地について知ってもらいたい」と考え、スタディーツアーで撮影した「女川の今」を写したお気に入りの写真1枚を解説し、現状を報告した。

〈展示内容〉**〈展示風景〉**

東日本大震災による大津波から4年が経過しています。

この写真は2015年6月6日の女川町の中心部を撮影したものです。

たった4年で、瓦礫の山は片付いています。

たった4年で、土地の嵩上げはこれだけ進んでいます。

たった4年で、道路の整備も始まりました。

たった4年で、駅は新しく建て直されました。

たった4年で、港の水揚げ量は震災前を上回るようになりました。

一方、女川の復興に最初期から関わっているある方は、女川の復興は決して早くない、と語りました。

現地にあるのは、この町の事実だけです。

女川町の事実は、現地以外にはありません。

「事実」を見に行きませんか？

そして女川の4年間を、あなたはどのように受けとめるでしょうか？

（栗原克弥・文学部1年）

1. 東北ボランティア



JR女川駅からみたこの景色は、女川の多くの計画決定、推進が集約されている。まず奥に広がる海というのは、防潮堤を建設しないという方針によって駅前から臨むことができるようになった。これほどまでに美しい海を開けた視界で臨めるのは、実は被災地にとって当たり前のことではないのである。そして海の方に長く伸びるプロムナードは、漁業体験施設

をはじめとする女川への集客をねらった独自性のある店舗を展開することで、女川へ立ち寄る交流人口を増大させるのが目的だ。女川町は、新しい女川に生まれ変わるためのスタートラインに立ったのである。

(田中瑠海・商学部1年)



この写真は、私たちがスタディーツアーで泊まった女川町のトレーラーハウス「EL FARO」という宿泊施設です。外見は写真のとおり非常にカラフルで、部屋も広くて、とても心地よい空間です。今では、かわいらしい外観で宿泊する私たちを歓迎してくれる「EL FARO」ですが、この施設ができるまでには、予算や制度上の問題などの多くの壁がありました。

しかし、理事長の佐々木さんをはじめとする女川町宿泊村協同組合の方々からの強い思いとご尽力により、震災から約1年9か月後の2012年12月27日にオープンしました。「EL FARO」という名前は、スペイン語で「灯台」を表し、自分達が復興への道をてらす存在になりたいという思いもこめられています。私は今回、現地に行ったからこそ学んだことがたくさんありました。みなさんも一度は被災地を訪れ、自分の目で現状を確かめてみてください！

(丸上貴史・法学部1年)



ここはプロムナードという歩行者専用道路の建設予定地です。まだ更地の状態ですが、完成すれば道沿いに商店街や公共施設が整備されるそうです。さてこのプロムナード、計画を進めているのは一体誰でしょうか？「こういう事業ってお役所の仕事なんじゃないの？」と思う方も多と思います。でもこのプロムナード、実は行政ではなく、女川町の有志の方々が中心となって手がけているんです！新女川駅から海までを一本でつなぐプロムナードには、「過去と未来をつなぐ」といっ

た意味も込められているそうです。女川の住民の方々が、自らの手で作り上げていく女川町の未来。この更地に一体どんな未来が描かれていくのかとても楽しみです！

(佐藤優大・総合政策学部1年)



この景色を見て私はまず驚きました。これが震災から四年経つ女川町の状態でした。私は女川町に訪れる前に、震災から四年も経過しているので、震災前ほどとはいかなくても、ある程度は町が出来上がっているのだろーと思っていました。しかし現状は津波対策のために、まだ、かさ上げをしている段階でした。かさ上げとは土などを積み上げて、今までよりも土地を高くすることです。写真を見ての通り、建物もあまり建っていません。これが「女川町の瞬間」でした。しかし、

今も女川町の人達は復興に向けて力を合わせて進んでいます。この写真がこれから先、どのように変化していくか、皆さんにも興味を持っていただけたらいいなと思います。

(菊川優斗・文学部1年)



これが何だか分かりますか？そう、女川名物、女川丼です。おかせいと言う会社が販売しているこの女川丼、実はその販売までの経由に一つの特徴があるのです。それは今、日本全体で推進されている方法で、名前を6次産業化といいます。6次産業化とは、狩猟や採集を行う1次産業、その加工を行う2次産業、そしてそれを販売する3次産業を、1次産業者のみで全て行おうとするもので、1と2と3を掛け合わせて6という数字が使われています。コスト削減などのメリットが

あり、年々6次化する事業数は増えていて、国による補助金や支援員の派遣などの制度も整っています。今、最もホットなワードである6次産業化、覚えておいて損はないと思います！

(峯岸晃希・文学部1年)



これは命の石碑です。東日本大震災から月日は流れ女川町の復興状況はまだまだですが、それでも少しずつ前には進んでいます。これからの町づくりを考えていくときに、何よりも、女川町のこれからの防災の仕組みを考えなくてはなりません。そこで女川町に住む中学生たちは「1000年先の命を守りたい」という思いを胸に「絆を深める」「高台への避難ルート」「記録に残す」という3つのテーマで新しい防災プランを考えました。そのプランを具現化したものがこの「命の石碑」です。女川町にある21の浜の、津波が襲ってきた高さの地点に石碑を建てることを目標に現在も進行中です。1000年に1度といわれた今回の津波が今後起こったとしても、誰も被害に遭わないように避難する際の指標にもなっています。

(奥野日香梨・法学部1年)

1. 東北ボランティア



これは私たちが設営ボランティアをした「我歴ストック」本番での1枚。前日まで土砂降りだったのにもかかわらず、こんなにも素敵な青空になりました。被災地に来てからというもの、ずっと「震災」という言葉が背中にずんと乗っていてなんだか暗い心持ちでした。海のほうへ目をやると、家も店もなく、嵩上げ途中の盛り土と、震災の遺産と、出来立ての駅しかないのです。しかし、ツアー2日目のこの晴天を仰いだときに、心も晴れた気がしました。この空を見て、色々なことがあった中でもここに住み続ける人たちの気持ちが少しわかった気がしました。この写真は女川の人たちの暖かさや自然の美しさなど、女川の全ての良さを写していると思います。

(宮本萌美・法学部2年)



女川駅の3階から発進する電車を撮影しました。この女川駅は、復興が他の被災地より早いとされる女川町に今年の3月21日にようやくオープンしました。ウミネコをイメージした駅の一階は駅、二階には女川温泉ゆぽっぽ、三階は展望フロアになっています。女川町では、この駅を中心に海を生かした新しい町づくりが進んでいます。東日本大震災から4年が経ち、3月11日を除いては震災のことが取り上げられなくなりつつあります。しかし、復興はまだまだこれからというのが現状です。女川は、美味しいもの、豊かな自然、何よりあたたかい人々で溢れています。一人でも多くの人に復興していく女川町を訪れ、見守って欲しいと願っています。

(岩元理佐子・法学部1年)

2. 夏季ボランティア

(1) 夏季集中ボランティア

中央大学が加盟する「大学間連携災害ボランティアネットワーク（事務局：東北学院大学）」が主催する平成27年度夏季集中ボランティア活動プログラムは下記の通り。

〈1. 陸前高田市プロジェクト〉

実施日：8月4日（火）～8月7日（金）

内 容：農業支援活動

場 所：岩手県陸前高田市

参加者：6人

協力団体：特定非営利活動法人パクト

〈2. 石巻市雄勝町プロジェクト〉

実施日：8月13日（木）～8月15日（土）

内 容：被災地緑化支援活動、灯籠流しイベント運営

場 所：宮城県石巻市雄勝町

参加者：2人

協力団体：一般社団法人 雄勝花物語

〈3. 亘理郡山元町プロジェクト〉

実施日：8月20日（木）～8月23日（日）

内 容：被災地農地復興支援活動、集いの場・牧場「夢ファーム」運営活動

場 所：宮城県亘理郡山元町

参加者：3人

協力団体：特定非営利活動法人 未来に向かって助け合い

〈4. 気仙沼市プロジェクト〉

実施日：8月24日（月）～8月27日（木）

内 容：海岸清掃活動、漁業支援活動

場 所：宮城県気仙沼市

参加者：5人

協力団体：一般社団法人 気仙沼復興協会

〈5. 石巻市牡鹿半島プロジェクト〉

実施日：8月30日（日）～9月1日（火）

内 容：漁業支援活動

場 所：宮城県石巻市牡鹿半島の漁港

参加者：4人

協力団体：石巻牡鹿半島大和水産加工業者、石巻牡鹿半島大和水産加工業者

1. 東北ボランティア

〈活動の様子〉



漁業支援の様子



オリエンテーション



農業支援活動



集合写真

(2) 女川町復興支援インターンプロジェクト

実施日：9月6日～12日

参加者：6名（学生4、職員2）（加えて、高崎健康福祉大学から3名が共に活動）

目的：全国の大学生が宮城県内の被災企業や事業所で職場体験を行い、被災地の産業、その地域の魅力や復興の現状・課題等を学び、その体験をもとに全国各地での情報発信等の取り組みを行うことで、次に掲げる目的の達成を目指す。

- ・被災地の産業の復興、ひいては被災地域全体の復興に寄与する
- ・東日本大震災への関心の風化を防ぎ、風評被害の抑制を図る
- ・震災復興に当たる人材を育成する

活動内容：水産加工会社への企業インターン

活動先：宮城県牡鹿郡女川町（株）ヤマホンバイフーズ

行程：1日目 東北学院大学（仙台）集合、事前研修、宿泊

2日目 仙台から女川町へ移動、顔合わせ会

3日目～6日目 水産加工会社の職場体験

7日目 女川町で活動報告会、移動、東北学院大学で振り返り、解散

主催：復興大学災害ボランティアステーション（事業部門：東北学院大学）

共催：女川町商工会

復興庁宮城復興局

大学間連携災害ボランティアネットワーク

後援：宮城県、女川町



東北学院大学での事前研修



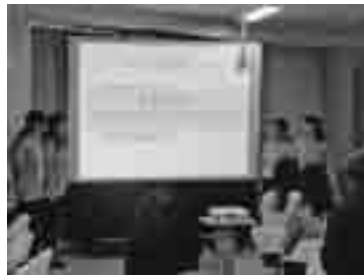
女川町での顔合わせ会（右は須田町長）



サケの包装作業



サンマの加工作業



最終日の活動報告会



ヤマホンバイフーズの社長・社員と学生

1. 東北ボランティア

〈参加学生より〉

「復興支援インターンを通して学んだこと」

山本哲郎（法学部2年）

復興支援インターンに参加するまで、私にとって東日本大震災とそれに伴う復興は、多くある議題のうちの1つというような、他人事とまでは言わないにしても、どこか、自分の身近なものとして捉えきれていない感覚がありました。東日本大震災が起きた2011年3月11日、私は中学生で、高知県に住んでいました。テレビや新聞の報道をみる度に、いつかは被害の状況を直接見てみようと思いつつも、大学に入学しあつという間に1年以上が過ぎて行きました。そんな一歩踏み出せなかった私が、ボランティアセンターのおかげで被災地へと赴く機会を頂けたのは幸いでした。

私がこのインターンに参加した目的のひとつに、東日本大震災の被害状況と復興の様子を知る中で、地元の高知県で大きな被害が予想されている南海トラフ地震の被害縮小へのヒントを得ることがありました。そのヒントを探しながらインターンの一週間を過ごし、たくさんの減災の「種」のような知識を得ることができました。例えば津波からの避難の際、海が見える場所にいた人は海面がどんどん引くのを直接見て焦り直ぐに高台へ避難ができたといいます。一方、海が見えない場所にいた人は状況が分からないことで避難が遅れるという話を聞きました。言われてみると「なるほど」と思うのですが、言われるまでは思い至らないような、とても貴重なお話をたくさん聞かせて頂くことができました。将来、このインターンで得ることができた貴重な「種」を、地元で活かす職に就きたいと思っています。

また、この復興支援インターンは、受け入れ先企業で就労体験をさせて頂くだけでは終わりません。私たちが女川で見たこと聞いたこと感じたことを、大学で発信する活動として、大学祭でヤマホンベーフーズの宮城県知事賞を受賞した商品『さんま黒酢煮』を販売しました。何とかして美味しさを知ってほしいと思い、大きな声で宣伝しました。購入してくださったお客さんからは「美味しいわね」と言っていただき、女川の魅力を伝えることができました。そして9kgの黒酢煮を完売することができました。

私はそれまでボランティアやインターンの経験がなく、すべてが初めてのことでとても心配でしたが、受け入れ先企業「ヤマホン」の社長をはじめとする従業員の方々、復興庁の方やボランティアセンターの皆様、そしてともにインターンをした仲間に、多岐にわたり助けて頂きました。この場を借りて、お礼申し上げます。ありがとうございました。

〈情報発信活動〉

白門祭への出店

日時：10月31日

内容：ヤマホンベーフーズの商品「さんま黒酢煮」を販売



3. 災害ボランティア活動

台風18号（関東・東北豪雨）水害ボランティア

台風18号等に伴う豪雨災害に対し、当センターは、協定を結んでいる「日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）」のボランティアバスを通して、学生ボランティアを送り出すこととした。告知はHP、C-Plus、学内掲示、Facebook、Twitterで行った。ボランティアバスはシルバーウィークの9月20日・21日・22日、26日・27日に運行された。シルバーウィークは栃木鹿沼方面、26・27日は常総市へ出向いた。Gakuvoからの連絡によると5日間の中大生の参加は16名となっている。

実施日：9月20日・21日・22日・26日・27日

参加者：中大生の参加者は合計16人

活動先：20日～22日 鹿沼市、26日・27日 常総市

活動内容：各地での災害ボランティアセンターを通じた作業

行程：7時 日本財団ビル（虎ノ門）にて受付

7時20分出発 借り上げバス1台

9時 災害ボランティアセンター到着 班に別れて活動

16時30分 活動終了

19時 日本財団ビルで解散



受付の様子

1. 東北ボランティア



4. 春季ボランティア

(1) 気仙沼スタディーツアー

- 実施日：2016年2月16日（火）～18日（木）
 場所：宮城県気仙沼市
 参加者：11名（学生8、教職員3）
 目的：被災地支援学生団体の代替わりのため、改めて活動メンバーとボランティアセンタースタッフで活動地域である気仙沼を周り、地域のキーマンに話を伺い、地域の実態について理解を深めた。次年度の活動の手掛かりとして今年度は「スタディーツアー」を実施した。
- 行程：1日目
- ・小野寺憲雄氏より尾崎漁港周辺を案内
 - ・面瀬中学校仮設住宅 尾形修也自治会長訪問
 - ・気仙沼・復興どうぶ 千葉淳也氏と里山の手入れ作業
 - ・気仙沼市議会議員・今川悟氏と懇談
- 2日目
- ・気仙沼漁港の見学（今川悟氏の案内）
 - ・気仙沼市立面瀬小学校 西城敏幸校長、鈴木英喜先生のお話
 - ・気仙沼あそびばーを見学、代表・鈴木美和子氏、千葉開生氏のお話
 - ・気仙沼市沿岸を見学（大谷海岸・野々下海岸の防潮堤、宮城県気仙沼向洋高校、階上地区など）
 - ・旅館海光館代表・小野寺征貴氏（中大OB）のお話
- 3日目
- ・NPO法人ピースジャム、高橋勝宏氏のお話
 - ・プレーパークせたがや理事・天野秀昭氏の講演会

〈活動風景〉



1. 東北ボランティア



(2) 神戸スタディーツアー

実施日：2016年2月21日（日）～23日（火）

場所：兵庫県神戸市

参加者：9名（学生6、教職員3）

目的：東日本大震災の被災地支援を継続して5年経つ。翌年度は仮設住宅の大幅な解消などが見込まれ、これまでとは大きく活動環境が変わると予想される。そこで、阪神淡路大震災の経験を持つ神戸を拠点とし、東日本大震災でもボランティア活動を引っ張るリーダーたちを訪ね、今後の活動の参考にする。

行程：1日目

- ・村井雅清氏（被災地NGO協働センター顧問）よりお話を聞く

2日目

- ・宇都幸子氏（阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク元事務局長）よりお話を聞く
- ・宇都氏の案内で新大池東公営住宅のお茶会に参加する
- ・宮定章氏（認定NPO法人まち・コミュニケーション代表理事）、田中保三氏（同NPO顧問）よりお話を聞く
- ・宮定氏、田中氏に長田区御蔵通周辺を案内いただく

3日目

- ・阪神淡路大震災記念人と防災未来センター見学

〈活動風景〉



1. 東北ボランティア



(3) 女川町復興支援インターンプロジェクト

実施日：2016年2月28日（日）～3月5日（土）

参加者：6名（学生4、職員2）

目的：全国の大学生が宮城県内の被災企業や事業所で職場体験を行い、被災地の産業、その地域の魅力や復興の現状・課題等を学び、その体験をもとに全国各地での情報発信等の取り組みを行うことで、次に掲げる目的の達成を目指す。

- ・被災地の産業の復興、ひいては被災地域全体の復興に寄与する
- ・東日本大震災への関心の風化を防ぎ、風評被害の抑制を図る
- ・震災復興にあたる人材を育成する

活動内容：水産加工会社への企業インターン

活動先：宮城県牡鹿郡女川町 ワイケイ水産（株）

行程：1日目 東北学院大学（仙台）集合、事前研修、宿泊

2日目 仙台から女川町へ移動、顔合わせ会

3日目～6日目 水産加工会社の職場体験

7日目 女川町で活動報告会、移動、東北学院大学で振り返り、解散

主催：復興大学災害ボランティアステーション（事業部門：東北学院大学）

共催：女川町商工会

復興庁宮城復興局

大学間連携災害ボランティアネットワーク

後援：宮城県、女川町

〈体験の様子〉



〈参加者の声〉

「インターンで学んだこと」

勝又翔也（法学部2年）

復興支援インターン参加の理由

私は宮城県出身であり、東日本大震災を経験した。山沿いに住んでいたため沿岸部にどれほど被害が出て、いかに困難な生活を余儀なくされたかメディアを通して見るだけであり、自分の目で、体で感じられる機会は一度もなかった。同じ県の被災者として、現状を肌で感じること、またこれから先の自分の人生の中で本当の意味での復興のために何ができるのか、探求する良い機会だと思い、女川における今回の復興支援インターンに参加した。

インターンを通して学習したこと

- (1) 女川町見学：初日に復興庁の方や女川町役場の方の付き添いのもと、被災地である女川の現状やこれからのビジョンについて説明をしていただいた。女川町は他の被災地と比べて原発関連の補助金もあり財政的に有利な面があり、比較的に復興が進んでいると言われている。実際街並みを見てみると、女川駅を初めとして商店街や町民の交流施設などが新しく建てられているものの、嵩上げや住居地確保のための工事現場が未だに多く存在しており、その関係者が数多く見られた。「復興までにはまだまだ時間がかかる。」と強く感じさせられた瞬間であった。その中で女川町は街を観光区域や商業区域、居住区域の段階に分けて整備することを中心に街づくりを進めていく予定であるという。またトレーラーハウスを利用して居住不可地域でも宿泊できるような工夫するなど試行錯誤しながら活性化を推し量る姿勢が見受けられた。着実に一步一步前に進んでいる様子が伺えるとともに、街に活気がないことや交流人口が少ないことなど、解決していかなければいけない問題が山積していると感じさせられる場面であった。
- (2) 水産加工体験：私たちは女川町のさんまを中心とした水産加工業を営むワイケイ水産株式会社さんにて4日間職業体験をさせて頂いた。主に工場内で作業のお手伝いをし、さんまや赤魚の解凍作業やその加工作業などを行った。初めての作業ということもあったが、非常に体力が必要な仕事であり、そこで毎日働く方々の大変さがひしひしと伝わった。またお昼休憩の時間に従業員の方々から震災のことについてのお話を聞く場面や、ワイケイ水産一押しのおさんまのすり身を使ったオリジナルレシピ作成の機会があった。お話しでは津波が到達したときに家のベランダにおり、そのまま流されてしまったが助かった経験を持つ方の体験談や、津波で流された後低体温により多くの人が命を落としたことなど、様々なことを聞くことができた。人それぞれ被害状況は違っていたものの、一つ確かに言えることは想像をはるかに超えた津波であったこと。「もう一度あの場面に戻れるならば、とにかく、とにかく逃げるとみんなに声かける」という言葉がそれを物語っており、また東日本大震災の津波の大きさを思い知らされるものであった。レシピ考案作業では三種類ほど考え試作させていただき、どれもバランスの取れた味に仕上げることが出来た。また前々から多くのレシピが作成されており、さんまを塩焼きでなく他の方法で日々食べてもらいたいという企業努力が感じられた。実際に作ったことでさんまのすり身にどれだけ汎用性があるかわかり、それをほかの人たちに伝えることはできる。このような実体験を疎かにすることなく、共感してもらえるような情報発信を心掛けていきたい。
- (3) 復興庁の方との対話：被災地見学やミーティング、報告会準備の際に復興庁の方に付き添って頂き、アドバイスや講話、対話をして頂く機会がこの期間中多くあった。どれも貴重なもので勉強になり、中でも印象に残っているのは、女川の魅力をどう情報発信するか苦心していた時に教えてくれたビジネスモデルに関することである。女川の魅力を考える上で100→0の発想が大事になってくるというもの。津波により以前は100あったものが、0になってしまった女川町。0ではあるがそれを逆手にとり観光地としての魅力を引き出すというものである。何でも揃っている都会（100）から何も無い田舎町（0）へ、心の安らぎを求め

た観光客や移住者、転職者を呼び込むことで、0になった女川町もまたその魅力を発揮できる。0になっている町は全国に山ほどあり、それらとの差別化をはからなければならない。すなわち、0に $+\alpha$ を加えるということだ。女川町には起業を志す人向けの交流施設や、震災を教訓として後世に伝承するための施設や場所が多数存在している。これらを武器として、女川町がもともと持つ、人の温かさや広大な自然を他にはない魅力として引き立てられるのではないかと考えた。

まとめ

復興支援インターンを通して女川町の現状がより鮮明になったと共に、その魅力もまたはつきりしたように思う。また、情報発信の方法を考えていく上でどのようにすれば関心のない人に興味をもってもらえるかを重点的に考えさせられる良い機会となった。多くの方々にはたくさんのアドバイスを頂くことができ、今までの自分ではありえない発想や考え方ができ始めている。被災地の現状を実感すると共に、これからどうすれば良いかを真剣に、そして有識者の意見も交えて根拠付けながら考えることができた。今回の経験を無駄にせず、これからの情報発信に繋げていくと共に、この先の人生に役立てていけるよう努力したいと思う。そして何より、女川町を好きになれたこの復興支援インターンに非常に感謝したい。

「復興支援インターンに参加して」

篠崎泉（法学部2年）

3月上旬、ボランティアセンターが呼び掛けていた「復興支援インターンプログラム」に参加した。これは、東北学院大学を事務局とする復興大学が主催し、復興庁が共催するプログラムで、全国から集まった大学生が約1週間にわたって宮城県内の被災地企業で就業体験を行い、その経験を通して学んだことをそれぞれの大学に持ち帰って情報発信するというものである。初めはやってみようかな、という軽い気持ちだったが、ボランティアセンターの職員の方や、共に女川へ向かう中大生の被災地への熱い気持ちに動かされ、段々と自分が女川町へ行くことの意義・役割を考えるようになった。震災から5年たった今、このインターンに参加して良かったと強く感じている。

ワイケイ水産での就業体験

私たち中大生がインターンシップをさせて頂いたのは、ワイケイ水産株式会社という水産加工会社だった。スーパーの魚売り場には、サンマの刺身、ブリの切り身、鰯の3枚おろしなど様々な物が並んでいる。それらは全て皮が無く、骨も綺麗に取り除かれ、パックに詰められている。このように生の魚を冷凍・捌く・詰めるなどの工程を経て消費者が食べやすいように加工するのが水産加工会社である。ワイケイ水産でのインターン活動を終えた後スーパーの魚売り場に限らず、冷凍食品やコンビニのお惣菜などを見ると、私は3つのことを考えるようになった。

1つ目は、ワイケイ水産で行った工場内作業のことである。インターン中、工場でさんまの切り身に骨が無いかをチェックする作業を体験した。3枚に下ろされたサンマが、部屋に運ばれてくるところから作業がスタートし、200枚近いサンマの切り身が入ったトレーを、私を含めた3、4人の従業員で囲み、1枚1枚骨をチェックしていくのだ。骨があれば包丁で骨を削ぐ作業をしている従業員へ渡す。しかし、サンマは大変小骨の多い魚なので、何回もチェックに引っかかり、隣の従業員へ渡すことになる。骨を削ぐ作業も大変繊細なもので骨を取ろうとして刃を深く入れると身を削りすぎてしまうことになる。絶妙な力加減が必要なのだが、それを素晴らしい正確さとスピードでこなしていく従業員の方々は職人のようだった。

ワイケイ水産は魚嫌いの人も食べやすい商品づくりをこだわりのひとつとしている。その為に小骨のチェックや魚独特の生臭さを抑える、調理を楽にするため下味をつけるなど様々な工

1. 東北ボランティア

夫がなされているのだ。実際に自分で骨のチェックをしてみると、ずっと立ち作業でなおかつ下を向くことになり、首や腰にもだるさが出てきて大変辛かった。また、骨を見つけることは繊細な作業になるので精神力も要する。なんてことない刺身のパック1つ取っただけでも大勢の人の力があるからこそ、商品として成立していることを身をもって知ると共に、ワイケイ水産の強いこだわり・魅力を感じることができた。

2つ目は、ワイケイ水産で働いている従業員についてだ。日本人の従業員は多くが60代～70代の高齢者だった。ワイケイ水産に関わらず、被災企業が直面している問題が人材確保・従業員の高齢化だ。今は重要な働き手として活躍している従業員は高齢のため、働ける時間には限りがある。女川町には中学校までしかなく高校からは仙台や石巻に通うことになる為、どのようにして若い世代を町に呼び込むかということが大きな課題となっている。「従業員さんが働きやすい職場環境づくりを」とはワイケイ水産の木村社長、社長夫人も仰っていたことである。ミーティングの際、作業を通して気になった、ベトナム実習生の為に英語やベトナム語表記の看板や説明書を用意するのはどうか・作業時に椅子を導入するのはどうかなどの意見が学生側から出ると、木村社長は学生だからといって決して軽んじたりせず、きちんと提案として受け取ってくださったことが印象に残っている。「いくら作業の機械化が進んでも、機械では賄えない従業員さんの経験・肌にしみ込んだものが大切」という言葉どおり、従業員を大切に思うからこそその対応だと感じた。

3つ目はインターン中の忘れられない出会いについてである。

インターンではたくさんの方にお世話になったがその中でも心に残っている人が、ベトナム実習生のRさんだ。ワイケイ水産には9人のベトナム人実習生が勤務しており、寮で暮らしている。「日本語はあまり上手に喋れません。」と言いつつも、丁寧な言葉づかいで作業を教えていただき、私がお願いすると簡単なベトナム語も教えて頂いた。22歳のRさんは、19歳の時から実習生として働いている。私も留学経験があり、言葉の通じない異国の地にひとりで訪れる心細さや不安は痛いほどわかる。その上、彼女が来たのは東日本大震災で被害を受けた被災地域である。来ることが不安ではなかったのか、と尋ねたところ「津波や地震は怖い。でも自分には夢がありそれを叶えるため日本に来ている。」と力強く語ってくださった。私にはそままでして叶えたい夢は果たしてあるのか、あったとしても努力ができるだろうかと衝撃を受け、彼女のような強い人間になりたいと深く考えさせられた。インターンを通し、ニュースや新聞などでは流れなくても、彼女のような人たちがワイケイ水産を支え、女川を支えているということを知り、そのような方々と交流できたことは非常に有意義であった。

情報発信活動について

復興支援インターンプログラム参加者には、大学に戻った後、実際に現地での就業体験を通して学んだ事・現地の魅力を情報発信するという重要な役割がある。私たちが一番発信したい、知ってもらいたいと考えたものは「女川の魅力」だ。約一週間という短い期間ではあったが、実際に滞在したことで私たちはたくさんの女川の魅力を実感することができた。例えば、海が綺麗・水産物を中心とした魅力的な食材・町の人々の温かさ・新しいことをチャレンジするハードルが低い、など多くの魅力を味あわせて頂いた。

特に私が強く感じたことは町の人々の温かさである。ワイケイ水産では木村社長をはじめ、奥様、職員の方すべての人が優しく私たちを迎え入れてくれた。そして作業中は、水産加工について何も知らない私たちに、従業員の方が懇切丁寧に教えて下さった。全員が明るくにぎやかで、笑いが絶えず、作業以外の話をする機会も多かった。これは、震災後に多くのボランティアを全国から迎え入れてきた女川町だからこそできるアットホーム感なのではないかと感じた。

このような女川町の素晴らしい魅力を発信するための活動として、白門祭での出店を計画している。ワイケイ水産の目玉商品であるサンマのすり身を使った「女川汁」、私たちがレシピ考案を行った「サンマのすり身入りコロッケ」など女川の魅力を「食」を通して来場者に知ってもらいたいと考えている。ぜひ多くの人に足を運んでもらいたい。学園祭以外でも、市のイ

ベントや物産展への参加など、なるべく多くの人の目に女川が触れてもらえるよう活動する予定だ。どのような方法をとれば、最も効果的に女川の魅力を伝えることができるか。課題も山積みではあるが女川町で自分たちが感じた温かさ、おいしさを伝えるため、そして何よりお世話になったワイケイ水産へ少しでも恩返しができるように尽力したい。

インターンを終えて

インターン期間中、「なぜもっと早く来なかったのだろう」と私は何度も考えた。インターン中に従業員とお話をしていた際、震災直後多くの大学生ボランティアが女川町を訪れ、瓦礫の撤去などの力仕事から、話し相手になることまで本当に沢山のものを女川町へ与えてくれたことを伺った。震災直後に自分には一体何ができるのだろうと考えてすぐさま実行に移した人がある一方で、被災地について深く考えることもなく、ただどこか遠くの地が天災に遭い、今も苦しんでいる“らしい”という認識のまま5年が過ぎてしまった人もいる。自分が後者の人間であったことが、被災地を見て、被災された方の体験を聞いて痛いほど分かった。こんな遅い時期に来たことに一体何の意味があるのだろう、ただの自己満足で終わってしまうのではないかという悩む時期もあった。しかし、被災地から帰ってきた今、自分が女川を訪れたことは決して無意味ではなく、大きな意義があったのだと感じている。その意義を証明するためにも、今後の情報発信活動に尽力していきたい。

「復興支援インターンで学んだこと」

千葉啓佑（商学部2年）

私達は今回、インターンとして女川町の被災された企業であるワイケイ水産さんで働かせていただきながら、被災地女川の現状について学んだ。私は仙台出身であるが、正直女川町については名前しか知らなかった。それは実家から距離があることも理由の1つとして挙げられるのかもしれないが、やはり1番の大きな理由は津波の被害を受けた沿岸部の被災地から目を背けていたことである。震災後も仙台で暮らしていたので、ボランティアとして被災地に行こうと思ったこともあった。だが、テレビなどのマスメディアを通じて流れてくる被災地の津波の映像や、無残に残った瓦礫の画像などを見る度に、生半可な気持ちで被災地に行くことはできないと思ってしまった。それからというもの被災地に関するニュースなども少なくなり、私自身被災地について考えることも無くなっていた。そんな時に大学のボランティアセンターが女川で行われる復興支援インターンへの参加者を募っていた。震災から5年が経とうとしている今なら復興も進んでいるだろうから、復興の現状を知ることができる良いチャンスだと考え、このインターンに参加する決心がついた。

実際に女川に滞在したのは6日間ほど、ワイケイ水産さんでお世話になったのが5日間と決して長いとは言えない期間だった。だが実際に行ってみて初めてわかるような貴重な体験をたくさんすることができた。よってそれらの体験をできる限りこのレポートを通じて伝えられるように努力していきたい。

まず始めにワイケイ水産さんで体験したことについて述べたい。そもそもワイケイ水産とは、さんまや赤魚、鮭などを主に取り扱っている水産加工会社で、従業員40名程の中小企業である。よって私達はまず水産加工作業を経験した。私が体験したのは赤魚の鱗取りや尻尾の切断作業などの下処理、さんまや赤魚の解凍作業などのかかり力を必要とする仕事も行った。中でも個人的に1番辛いと感じた作業はさんまの解凍作業だ。この作業では束になって凍っているさんまを、水が入っている水槽の中で手でほぐしてばらすのだが、さんまが凍っていて重いのと水槽の水の冷たさでかなり苦勞した。だがどの作業にも共通して言えるのが要領、つまりコツを掴むと案外スムーズに作業ができるという事だ。最初は何もわからない状態だったため、どの作業も100パーセントの力で取り組んでいた。だがその作業を繰り返して行くと、力を入れなければならない部分と力はそこまで必要ではない部分が次第にわかるようになり、辛いと

1. 東北ボランティア

思っていた作業の中にも楽しさを見つける事ができた。

このような作業の合間や昼休み、作業後には従業員の方々や社長さんと話す機会があった。従業員の方々から主に津波が来た5年前の3月11日の様子について聞くことができた。最初はいきなり震災の話聞いていいものかと迷っていたが、従業員の方々が気さくに話して下さったおかげでその迷いも消えた。やはりほとんどの皆さんがあの津波の被害を受けていた。皆さんそれぞれに大変な思いや辛い思いをなさっていて、私達に対しては笑い話のように語って下さったが、聞き手としてはどのように反応していいやら対応に困る事もあった。そのように震災当時の話を明るく話せるのもそれだけ時間が経ったからこそなのだろう。今述べたように皆さんの津波の体験談は私にとってはどれも驚くような話ばかりだったが、特に印象に残っているのは家のベランダにいたところを津波にさらわれ、そのまま海を漂流したという体験をなさった方がいらっしゃるという話だ。残念ながらその方から直接お話を聞くことはできなかった。それにしてもベランダにすがりついたまま、あの津波の濁流に流されたというのは想像を絶する怖さである。皆さんの話を通して、5年たって忘れかけていた津波の怖さや恐ろしさを再確認する事ができた。

作業が終わった後には社長さんとお話しする機会を、社長さん自ら設けて下さった。社長さんのお話しでは主に震災後どのようにして会社を再建させたのか、という話題について話合った。その内容をまとめると、ワイケイ水産では全部で3つある工場のうち津波により2つの工場が流され、残る1つの工場も1階部分が浸水するなど大打撃を受けた。しかし社長さんは経営者として前向きに考え、さんまのシーズンまでに復旧できるように素早い対応を試みた。それは銀行による負債減額の処置を待たないほどだった。復旧後も中小企業グループ補助金などの支援を受け、10数億あった負債を数億円まで減らす事ができたそうだ。このような貴重な苦労話以外にも自社製品の特徴や自社のこだわりについても学ぶ事ができたが、これらは試食、新商品のレシピ考案を通じて自分の舌で体感した。試食ではワイケイ水産のさんまを使った商品であるさんまのつみれ汁やさんまの塩焼き、糠漬けさんまを焼いたものなどをいただいた。また新商品のレシピ考案では私達が考えたさんまのすり身を使ったさんまのすり身入りコロッケ、さんまのすり身をミートボールに見立てたナポリタンなどの料理を実際につくって食べた。それらの体験からわかったのが、全く魚臭さをさんまから感じなかったという事だ。社長さんがおっしゃっていたワイケイ水産のこだわりである、魚嫌いの人にも魚を食べて欲しいというこだわりを身をもって感じる事ができた。そしてこれがワイケイ水産さんの魅力なのだと気づく事ができた。このようにワイケイ水産さんでの体験はとても実りの多い体験となった。

最後に私が感じた今の女川町について述べたいと思う。女川町に来てまず始めに思った事は、まだまだ復興は始まったばかりだなという事だ。嵩上げの工事も大部分が途中の段階であり、仮設住宅に住んでいる方もまだいらっしゃるからだ。しかし女川町について学んでいくうちに、女川は被災地の中では復興が進んでいる方ではないかと考えるようになった。女川町は巨大な防潮堤の建設をせず、平地を嵩上げするという選択をした。そのため防潮堤建設にかかる分の費用や時間を、女川駅の再建や、駅前のプロムナード型の商店街施設の建設に割くことができた。またその駅前の商店街施設だが、意外にも若者向けのバーやコーヒーショップなどがあり、若者が来ても楽しめるようになっていた。このように女川町は観光客や外から来た人に住んでもらえるような街作りを行っている。だがそこには問題も存在する。それは女川町に元から住んでいる人々は駅前の商店街を利用せず石巻のイオンまで車で行き、買い物をする事である。女川は駅が平地にあり住宅地が高台にあるため利用しづらいのだと、ワイケイ水産の従業員の方々が口をそろえておっしゃっていた。住民にとって住みやすいかどうかという事も移住者の増加に関わってくるのではないかと個人的には考えた。

私は今回のインターンでたくさんの事を感じ、そして学んだ。よってそれらを少しでも多く情報発信する事が女川町やワイケイ水産さんなど、今回お世話になった方々への恩返しになるはずである。私達学生にできる事は少ないかもしれないが、その中でも効果のある手段や方法を使ってワイケイ水産さんの魅力、そして女川町の魅力を伝えていきたい。

「東日本大震災から五年 ～今、私たちにできること～」

森若菜（文学部2年）

二回目の被災地訪問

二月二十八日から三月五日の七日間、復興大学災害ボランティアステーション主催の「復興支援インターン」に参加しました。今回、中央大学からは私を含めて四人の学生が一週間女川町に滞在し、そのうちの四日間、東日本大震災で被害を受けた水産加工会社「ワイケイ水産株式会社」で水産加工作業を体験しました。

私が被災地を訪問するのは、今回で二回目です。昨年の夏、中央大学のボランティアセンターが募集していた夏季ボランティアで宮城県石巻市牡鹿半島を訪問したのが、私自身初めての被災地訪問でした。被災地を訪れる前は、【目に見える復興】（街が綺麗な状態になること）ばかり考えていましたが、訪問してみて【目に見えない心の復興】の問題があることに気づかされました。その経験から今回の復興支援インターンで、「企業とはどんなものなのか」を知ると同時に、現地での職業体験等を通して企業側と地元の人々の目線から、少しでも本当の意味の復興に近づけられるよう、被災地の現状を知り、大学に戻ってから情報を発信していきたいと考え、参加を決意しました。

被災地の現状

一年前、弱者のための建築家として世界的に有名な坂茂さんが設計した女川駅が完成し、駅前には、海をみながら買い物ができるテナント型商業施設「シーパルピア女川」がオープンしたり、若者と企業の人々が直接意見交換できるような「フューチャーセンターcamass」ができてきたりと【町の復興】は進んでいるのだと現地に行く前は思っていました。

しかし、現地に入って、バスの中から最初に見た景色は、嵩上げ作業の現場でした。女川町は、防潮堤を作らず、海と共に生きることを決めました。そのため、被災した地域の中でも、住宅の供給量が少ないのが現状で、【生活の復興】が自分が想像していた以上に進んでいないと思ったのが第一印象でした。実際、町の方はどのように思っているのか職業体験でお世話になったワイケイ水産の従業員さん達に話を伺ったところ、「早く仮設住宅がなくなって、自立した生活を送りたい」という意見が多く挙がりました。また、買い物に行く際は、石巻地区に大型ショッピングセンターがある為、女川町の人々は、車や電車を使って石巻まで行き、足りないもの（調味料等）があった場合のみ駅前のミニスーパー（おんま〜と）を利用するということでした。これは、震災前から問題視されていたことで、このような現状が人口流出の一つの原因になっているのだと、現地に行って知ることが出来ました。

復興のトップランナー＝女川町

女川町は、一番津波の被害を受けた町でありながら、皆、口をそろえて【女川の魅力は海だ】と言っていました。女川の人々は、常に先へ先へと目を向け、【被災地＝女川】としてではなく、【新しい女川】として再興できることを望んでいました。その女川町の人々の【ないものねだりをするのではなく、あるもの探しをする】姿勢からも、復興のトップランナーと呼ばれるにふさわしい町だと現地の人々と接する中で実感しました。

水産業全体（企業）が抱える問題

木村喜昭社長から直接お話を伺った中で浮き彫りになった、水産業全体（企業）が抱える深刻な問題を三つ挙げます。

一つ目は、労働者の高齢化と人手不足の問題です。ワイケイ水産の従業員さんにお話を伺うと、「ここで働いている人は六十代後半の人ばかり。私は七十歳までは働く覚悟がある。」とおっしゃっていました。現状として、女川町には高校と大学がなく、進学を機にそのまま東京に出て、就職する人が多いというのが人手不足の原因の一つとして考えられます。

また、ワイケイ水産では実習制度を採用していて、九人のベトナム人実習生が働いていまし

1. 東北ボランティア

た。この実習制度は、建前としては国際貢献ですが、本音は、労働力の確保（日本側）、外貨の獲得（外国側）を目的として利用している企業もあり、相互間でトラブルが起きている事例が多くあるということでした。

二つ目は、若者の魚離れです。私自身、正直に言うと、魚料理より肉料理を食べることが多いです。理由は、骨を取る手間と調理の手間を考えると魚を食べる行為が自然と億劫になってしまうからです。特に、私のように考えている人に、ワイケイ水産が出している商品を知ってもらい、魚への抵抗をなくすきっかけにしてもらいたいと考えています。

三つ目は、単身世帯の増加に伴う、孤食の問題です。ワイケイ水産では商品のネット販売を行っていますが、さんま五匹を一袋にまとめて売るより、一匹ずつ小分けにして五袋を一セットにして売る方が、売り上げが伸びてきているということでした。

今回、この問題に関連して、木村社長とお話をした際に、「ワイケイ水産の主力商品であるさんまのすり身を一袋から売ることが出来れば、単身世帯の人でも買いやすくなるのではないか」という提案をさせて頂きました。しかし、一袋買うのと、十袋買うのでは、送料自体は変わらない為、一袋買った人に手数料を買わせてる状態になってしまう（商品より手数料の方が高くなる）のに抵抗があるので、他の商品とセットで販売することで送料の問題を解消しているということでした。（冷凍品は常温品に比べて扱いが難しい為、送料が高くなる）

職業体験での気づき

四日間、ワイケイ水産で水産加工作業を体験をする中で、印象に残った企業のこだわりは、大きく二つありました。

一つ目のこだわりは、一般的に機械でやっていると思われる作業を手作業で丁寧にやっているということです。私が一番最初に任された作業がまさに企業が一番こだわっている、機械で三枚おろしされたさんまを一つ一つ手作業で骨が一本も残っていないかチェックするという作業でした。実際に作業をしてみて、さんまを海から引き揚げ、商品にするまでの過程でこれほどの手間がかけられていることや、一つの工程が欠けたら商品が成り立たないという大変さをもっと多くの人に伝えていくべきだと思いました。

二つ目のこだわりは、魚嫌いな人にも食べてもらえるように工夫された商品開発です。ワイケイ水産の主力商品の一つにさんまのすり身があります。これは、【さんま＝骨があり食べにくい、生臭い】というイメージを【さんま＝食べやすい！美味しい！また食べたい！】へと変える商品です。実際に私もさんまのすり身を使ったつみれ汁を試食させて頂きましたが、今までのさんまに対するイメージが大きく変わりました。その時、もっとこのさんまの食べやすさ、美味しさを伝えることはできないかと思い、新レシピの考案をさせて頂きました。

新レシピの考案から情報発信活動へ

今回は、ワイケイ水産の主力商品である「さんまのすり身」を使った新レシピとして、さんまのすり身入りコロッケ、さんまのつみれをミートボールに見立て作ったミートソース、さんまのすり身と山芋を混ぜて丸めたものに海苔を巻いて油で揚げた磯部揚げ、さんまのつみれの出汁を用いたお茶漬の計四品を実際に作り、企業の方にも試食してもらいました。

この四品の中でも、一番好評だった新レシピは、さんまのすり身入りコロッケでした。このコロッケを作る際、魚嫌いの人でも食べやすく、また木村社長のこだわりでもある、さんま本来の味を味わってもらえるようにと、じゃがいもとさんまのすり身の量の比率を工夫しました。試食してもらった方からの感想としては、「サイズの食べやすい、子どもにもウケそう」という意見を頂きました。

しかし、現状として女川を知る機会、場がないという問題があります。そこで今回私たちは、女川を知る機会、場を作り女川の魅力を伝えるためのアクションプランを立てました。具体的に、現時点では、白門祭や八王子市、日野市等のイベントでのさんまのすり身入りコロッケの出店を考えています。同時に、女川の魅力を伝えられるようなパンフレットやさんまを使ったレシピ集を配布する予定です。また、事前活動として、SNSの活用やPR動画放映を通して、

女川町の魅力を伝えていきます。私たちが考えたアクションプランを通して、最終的には、さんまのすり身入りコロッケを食べてもらうことで、【女川】というキーワードを広め、より多くの人に女川町に足を運んでもらえるよう情報発信活動を行なっていきます。そして、その情報発信をきっかけにして周りの人が少しでもアクションを起こしてくれることを目標に頑張っていきます。

最後になりますが、お忙しい中、私たちを受け入れて下さったワイケイ水産の方ならびにお世話になった皆様には本当に感謝しています。このような貴重な経験を無駄にすることがないよう今後活動していきます。

5. 学生団体の活動

団体の紹介：はまぎくのはつぼみ

理念

私たち「はまぎくのはつぼみ」は岩手県宮古市を拠点として活動しています。「はまぎく」とは宮古市の花であり、花言葉は「逆境に立ち向かう」です。宮古市は過去に数回津波の被害を受けてきましたが、その度に立ち上がり、東日本大震災にも屈することなく、復興を遂げようとしています。団体メンバーひとりひとりが「宮古の未来のために学生の自分たちには何ができるのか」を真剣に考え、自分の意見を出してみんなで話し合い、復興のお手伝いをしています。「つぼみ」は団体メンバーや活動参加者ひとりひとりを表しています。一人の力は小さなものですが、みんなの力を合わせることで、いつの日か宮古に満開の花が沢山咲くことを願っている、という思いがこの団体名に込められています。

現在、震災から年月が経ち、復興への思いや防災の大切さも風化してきています。私たちは、現地で震災当時や現在の復興の状況、防災について学んだり、学童の子どもたちと触れ合ったりし、それを写真展や報告会などで発信することで、震災を忘れることなく将来に繋げていきたいと思っています。このような思いを忘れず、支援して下さる方々への感謝とともに、私たちは活動しています。

活動場所

岩手県宮古市

代表者

吉田沙織（法学部2年）

所属メンバー

佐藤耕太（法学部3年）、田中知樹（商学部3年）、大上拓紘（経済学部3年）、原ゆり子（法学部2年）、野口実咲（文学部2年）、岩元理佐子（法学部1年）、寺崎友莉（法学部1年）、奥野日香梨（法学部1年）、田中瑠海（商学部1年）、木下卓哉（商学部1年）、伊志嶺朝希（商学部1年）、石川海歩（経済学部1年）、佐々木星（文学部1年）、平田祐（文学部1年）、小谷彩夏（文学部1年）

活動先・協力先

宮古市役所、宮古市社会福祉協議会、鍬ヶ崎学童の家

夏の活動

8月4日～8月8日 5人

9月7日～9月11日 7人

活動内容：仮設住宅での手芸や語らい、学童保育での学習支援やワークショップ
田老地区でのフィールドワーク、市役所でのヒアリング、
物産展に向けての商品探し

支援元：中央大学学員会、日本財団学生ボランティアセンター

春の活動

2016年3月14日～3月17日 9人

活動内容：学童保育での学習支援、田老地区でのフィールドワーク、
市役所でのヒアリング、社会福祉協議会でのヒアリング、

物産展販売商品の製造元へのヒアリング

支援元：中央大学学生会、日本財団学生ボランティアセンター

都内での活動

11月23日～11月27日 16人

場所：中央大学多摩キャンパス 生協店舗1階

内容：岩手復興支援物産展の開催

2016年2月6日 16人

場所：イオンモール多摩平の森 3階イオンホール

内容：岩手復興支援物産展の開催

学習会

前期 回数：10

内容：震災と現地を知る

夏の活動に向けた準備

後期 回数：15

内容：岩手復興支援物産展に向けた取り組み

春の活動に向けた準備

「今年の活動を振り返って」

原ゆり子（法学部2年）

今年度は、我々の活動の拠点である宮古市における仮設住宅での活動の見直しが最大の課題であった。というのも、今年度は仮設住宅から災害公営住宅への転居者数がピークに達する年であったのだ。これはつまり、仮設住宅の集会場をお借りして被災者の皆さんと交流を持つといった活動を行っていた私たちにとって、仮設住宅での活動が徐々にできなくなることである。このまま集会所をお借りして災害公営住宅へ移られた被災者の皆さんをお呼びして活動を行うのか、それとも仮設住宅の集会所での活動を止め、災害公営住宅での有料の集会所をお借りして活動を行うのか。週に一度のミーティングにおいて話し合う時間も設け、メンバー内での相談を欠かさずに行ってきたが、本課題は我々学生だけで解決できる課題ではないため、来年度は現地の社会協議福祉会の職員さんともお話をさせていただき解決策を練っていきたいと考えている。

また、今年度の活動は、今までの活動の中で最も新たな試みを行った充実したものであったと言えることができよう。その一例として、日野市イオンモール多摩平の森における「東北支援物産展」が挙げられる。昨年度から引き続き行っている中央大学生協内での物産展だけではなく、今年度は初の試みとして大学外での物産展も行ったのだ。現地企業の支援をするため、そして売り上げの一部の寄付をするため、東北の商品を東京という地で販売することは勿論であるが、被災地の現状を伝え、沢山の方々に支援の手を差し伸べていただくことも本物産展を行う目的である。また、今回販売した商品をこれからも継続的にご購入していただくためにも、専用リーフレットに現地企業の連絡先などを掲示し、SNSを利用して情報発信なども行った。以上を踏まえると、今年度の物産展は、昨年度より沢山の方々を対象にし「継続的な支援」を呼びかけることができたと感じている。

今年で震災から丸5年を迎える。ただ5年という年月は被災地にとって決して長い時間ではない。だからこそ、「継続的な支援」が求められ、こういった活動をすることこそ、我々の活動理念である、「被災者の皆さんの利益を最優先する」ことに合致するのではないだろうか。

1. 東北ボランティア

「この一年間で学んだ事」

田中瑠海（商学部1年）

はまぎくのつぼみの一員として活動してきたこの一年間は、被災地支援ボランティアに対して取り組む姿勢を学ぶことができました。大学に入学してからボランティアに興味を持ったのですが、メディアで被災地の状況について報道することは減少し、私の中で被災地は震災直後の状態のままで止まっていました。しかし、実際に足を運ぶことで今まで見えなかったものが見えてきました。例えば、宮古市田老地区の防潮堤が破壊された様子はその規模から津波の恐ろしさを私達に突き付けてきましたし、住宅や学童を訪問すると高齢化が進んでいることがわかりました。市役所の方からは、復興は初期段階を終え、仮設住宅からの移転といった次の課題に直面しているとお話を伺いました。活動前に自分の中にあった先入観が崩れ、宮古市の復興をこのタイミングだからこそできる学生ボランティアで支援していきたいと思いました。

はまぎくのつぼみとしての活動は現地を訪れるだけではありません。東京都内で復興支援物産展を開催し、宮古市と少しでも興味を持った方を繋ぐ役割として活動しました。現地で感じた海の美しさやおい、美味しい海産物といった宮古市の魅力を知ってもらいたい、そのために物産展は非常に重要な活動であると私は考えています。

この一年で、ボランティアは自らが相手のために自発的に活動することであると体感しました。これからも宮古市のために、私達が現地の方のためにできることを考えていかなければなりません。学生ができることは限られているかもしれませんが、その中で工夫を凝らし、宮古市の復興を長期的な視点から支えていきたいです。

団体の紹介：はまらいんや

理念

震災をきっかけに、さまざまな日本社会の問題が露呈しました。その問題は医療、福祉、居住環境まで多岐に渡りますが、被災者の方が必要とするものはそれぞれ違います。本当に人間らしく生きるためには何が必要でしょうか。

極寒の雨漏りする家で暮らせますか？

草が生えてくる家で安心して眠れますか？

暮らしは肉体、精神ともに直接大きな影響を与えます。

周囲に話せる相手がいなかったらどうしますか？

重病の時に自分だけだったらどうしますか？

仮設住宅のような外部と孤立しがちな環境ではコミュニティの場が絶たれ、時に孤独死が発生します。コミュニティ作りとその維持が必要とされ、地域的な結びつきは自立の助けとなります。

私たちの活動や一緒に過ごした時間が少しでも住民の方の支えとなり、震災で傷を受けながらも前を向いて生活できるよう、以下を団体理念として掲げています。

その「人」「地域」「暮らし」に焦点を当てた「人間主役のボランティア」であること、そして住民の方の「今日を生ききる力になること」。「人」「地域」「暮らし」上記3点は、本当に人間らしく生きるために必要なことなのです。

活動場所

宮城県気仙沼市面瀬中学校仮設住宅

代表者

手塚文裕（法学部3年）

所属メンバー

宮崎汐里（大学院1年）、林葉奈（法学部4年）、大和田茉穂（法学部4年）、加藤誉士（商学部3年）、志賀未希（文学部2年）、塚田かえで（文学部2年）、中村香織（文学部2年）、鈴木航輔（法学部1年）、木村亘佑（法学部1年）、白須花恵（法学部1年）、滝原洸太（法学部1年）

活動先・協力先

面瀬中学校仮設住宅自治会 尾形修也会長

夏の活動

8月6日～8月13日 9人

活動内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問、夏祭りイベントの補助

冬の活動

12月23日～1月1日 7人

活動内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問、年越しイベントの補助

春の活動

2016年3月7日～13日 3人

活動内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問、追悼集会の運営補助

※支援元：公益財団法人電通育英会、中央大学学員会

1. 東北ボランティア

その他活動

団体理念の勉強会

内容：先輩方の作った団体理念は初動期の活動に基づいて作られていたため、活動を引き継いだ代にその概念や背景が伝わりきれいでなかった。そこで、文献の読み合いを行ったり卒業生から話を聞いたりして、今の団体の活動理念が作られた背景を現役のメンバーの間で共有し、自分たちの活動の客観的な意味づけを行った。

1年生のための勉強会

内容：初めて活動に参加する1年生に向けて、事前学習を行った。はじめは気仙沼の文化・産業と震災当時の様子について1年生に自ら調べてきてもらい、発表会を行った。仮設住宅で住民の方々と語りをするときに、少しでも前提知識があった方が会話しやすいと思い、実施した。また、上級生から1年生に、ボランティア活動を行う上で気を付けてほしいことを伝えた。上から目線にならないように、押しつけのボランティアにならないよう常に相手のニーズを探りながら活動することなどを伝えた。

傾聴講座

内容：お茶会や訪問活動など住民の方々と向き合ってお話しさせていただくことが多い当団体にとって、傾聴の姿勢を身に付けることは極めて重要であるとの事から、傾聴講座を能力開発センターの後庵正治先生をお招きして行った。相手の表情や仕草をよく観察してお話を伺うことや、話を聞く際の態度や相槌の打ち方など留意すべき事を教えていただいた。

現地視察

内容：現在活動を行わせていただいている面瀬仮設住宅の集約を前に、集約後の活動の参考のために現地視察を行った。戸建てタイプの公営住宅のモデルルームを見学し、気仙沼地域生産者ネットワークの小山さんにお話しを伺った。また南郷住宅の集会所も伺い、集会所内でのレクリエーション活動を見学させていただき、自治会長の伊東さんにもお話しを伺った。

はまらいんやシンポジウム

内容：団体内で、過去の“はまらいんや”での学びや理念を設定した経緯などがうまく継承されていないのではないかという問題が上がり、当団体のOBや中澤先生、ボランティアセンターのコーディネータの方々と日本ホスピス・在宅ケア研究会がいたころのはまらいんやのメンバーと黒田さん(阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク元理事長)との関わりや活動で学んだことなどのお話を聞くことができ、改めて当団体の強みや特徴を理解することができた。

「今年の活動を振り返って」

木村亘佑（法学部1年）

今年の活動は、我々が活動をさせていただいている宮城県気仙沼市の面瀬仮設住宅で24時間体制の支援活動を行っていた「日本ホスピス・在宅ケア研究会」（以下日ホス）が撤退してから行う初めての活動となりました。

日ホスの皆さんは住民の方々の暮らしや人となりなど細かいところに目を向け、その人自身の些細な変化も、関わり合いの中で積み上げたデータをもとに見逃さず、我々が活動の理念としている“人・暮らし・地域に焦点を当てた人間主役のボランティア”を行っていました。日ホスの下で活動を行わせていただいたことは当団体にとっても大きな幸せであり、メンバー1

人ひとりの成長にも大きく寄与するものであります。

このように我々にとって大きな存在を示した日ホスの撤退は、改めて我々の中での活動内容や理念、メンバー間の動きなどを見直す大きな機会となりました。

私たちは現在、仮設住宅の集会所でコミュニティ支援を目的としたお茶会や訪問活動を行い、活動後には長い時間をかけて一日の活動の振り返りや情報共有、個人の行動の見直しなどを行っています。活動の内容が住民の方々、それぞれを対象としたものであるために、上がってくる情報も密度の濃いものであったり、学生だけでは対応が難しいものも多々あります。以前であれば同仮設住宅で活動していた日ホスに報告するという情報の流れ道が出来ていたために、これからは活動の中であがってきた情報の扱い方を確立する必要があります。

また、コミュニティ支援といっても一筋縄ではいきません。仮設住宅には様々な考え方や価値観、背景をもった人々がいらっしやり、それゆえに人間関係も学生が全て把握するのは難しい部分もあります。集会所に来てお茶会に参加してくださる方だけがすべてではありませんし、仮設住宅内でのコミュニティも住民の方にとってはただの1つにすぎない、という場合もあります。学生としても住民の方々を多角的に観察し、その人に沿った対応を訪問など行いながら考えていく必要もあります。

震災から5年が過ぎようとしている今現在、私たちが活動をさせていただいている面瀬仮設住宅も来年頃には集約され、住民の方々も別々の場所へと移ってしまいます。それに従って、当団体も活動場所や活動の内容など改めて考える必要があります。日ホスの皆さんとの活動の中で学んだことや経験を生かしつつ、自分たちだから出来るようなことを地域のニーズとうまく噛み合わせていきながら、今後とも活動を続けさせていただきたいと思えます。

【この一年間で学んだ事】

鈴木航輔（法学部1年）

祖父母が住んでいるため気仙沼には幼少期から何度も訪れていました。そんな第2の故郷とも言える気仙沼のために、僕にも何かできることがあるのではないかと思います、同じく気仙沼を活動場所としている「はまらいんや」に参加することを決めました。

実際に仮設住宅を訪問させていただいた時、住民の方々は初めて会う僕に対しても先輩方と同様に温かく迎え入れてくださり安心したのをよく覚えています。これも震災後から活動を継続している先輩方が築いてきた信頼関係によるもので、これまでの活動がしっかりと意味を持つものであるということを感じました。

そして活動をしていくにつれて学んだことは、目的であったり目標であったりを明確に設定することの重要性です。僕自身気仙沼のために何かしたいという漠然とした思いを持っていただけで、「こういうことをしたい」というような具体的な目標を立てられていませんでした。そのため同じ経験をしても、明確な目標を立てている先輩と比較して学びや得られるものが少なくなっていました。また中途半端な気持ちで接してしまうことになるため、何より住民の方々に失礼にあたると思います。そして次の活動について考える時に、自分は何ができて何ができなかったのかということが曖昧になり、反省が十分にできないということにつながってしまいます。

以上のように目的や目標を明確に設定することは、ボランティア活動をする上での最重要事項だと僕は考えます。目標を具体的にすることで、活動中自分が何をすべきかということがはっきりするため、まさに“voluntary”な活動をすることができます。また、このことはボランティア活動にとどまらず何事においても大切なことだと思うので、普段の生活から目的や目標を明確にするということを意識していきたいです。

団体の紹介：面瀬学習支援

理念

～「第3の場」を開き、大学生だからこそできることをする～

①学校とも家庭とも違う、子どもたちのための場を開く

②子どもたちの将来の選択肢の幅を広げ、気仙沼・面瀬の未来の担い手を育む

私たちが対象としているのは、面瀬小学校に通う児童たちです。私たちは2012年から子どもたちがリラックスして勉強したり遊んだりできる場を開いてきました。震災から4年を経た今の気仙沼では、日本の抱える問題がより露呈しています。そこで、まずは自分たちが変えていけるところから少しずつ変えていこうと考えました。それは、今までの活動で築いてきた学校や子ども、保護者、地域との信頼関係がある面瀬に継続的に関わり、その地域で私たち外の地域から来た大学生にしかできないことをやることです。それが大学のない気仙沼で、子どもたちに、学校の先生でも家庭の中の親でもない大学生と関わる場をこれからも開き続ける意味です。

よそから来た大学生にしかできないこととは、自分たちが東京で経験してきたことを話すことにより子どもたちの見聞を広め、将来の選択の幅を広げ、最終的に様々な場面・分野で活躍し、地域の誇りとなるような人を育てる一助となることです。

それに加え、地域学習の場を作り地域の魅力を知る機会を設け、最終的に地域に貢献するような人を育てる一助となることも目指します。

地元での生活と仙台・東京といった都市部での生活など、様々な選択肢を知った子どもたちが、将来地元や気仙沼を思いながら都市部で活躍する大人になり、その結果気仙沼の復興・発展につながることを目指します。

活動場所

宮城県気仙沼市面瀬地区

代表者

松本紗季（法学部2年）

所属メンバー

市川洋司（文学部5年）、宮崎汐里（大学院1年）、高島正暉（総合政策学部4年）、蘆田奈緒（文学部4年）、呉一駿（文学部3年）、大塚麻里（文学部3年）、小林香菜子（文学部3年）、安達麦穂（文学部3年）、田中結衣（文学部2年）、阿久津悠司（文学部2年）、森美紗子（法学部2年）、齋藤啓市（経済学部2年）、大辻みずき（文学部2年）、金野ひかり（経済学部1年）、大谷夏子（文学部1年）、宮地啓一郎（商学部1年）、山本純司（商学部1年）、栗原夏海（経済学部1年）、高本翔太（経済学部1年）、村越博行（経済学部1年）、荒瀬可純（文学部1年）、平井翔子（文学部1年）

活動先・協力先

気仙沼市面瀬小学校 西條敏幸校長、上沢三区自治会長 藤田勝氏

面瀬小学校卒業の大学生たち

【夏の活動】4人

藤田真由さん、佐藤幸さん、櫻井朱音さん、畠山美穂さん

【春の活動】5人

藤田真由さん、佐藤幸さん、櫻井朱音さん、尾張由梨さん、高橋紅音さん

夏の活動

8月17日～8月23日 15人

活動内容：学習指導、クイズラリー、豆鉄砲づくり、野菜収穫&調理

冬の活動

12月23日～12月28日 16人

活動内容：学習指導、クリスマスリース作り、大型人生ゲーム(子ども達とます作りから行う)、白玉作り

春の活動

2016年3月23日～31日 18人

活動内容：学習指導、鶴巻遊び場での活動

事前調査

5月30日～31日 9人

内容：夏季ボランティア活動の事前調査

ヒアリング先：面瀬小学校 鈴木教務主任

気仙沼高校 佐藤海人氏（高校1年生）

気仙沼市議会議員 今川悟氏

面瀬小学校前校長 長田勝一先生

藤田正人氏

12月6日 5人

内容：冬季ボランティア活動の事前調査

ヒアリング先：面瀬小学校 鈴木教務主任

わかめ養殖 小野寺憲雄氏

地域団体「あそびーばー気仙沼」 神林俊一氏

※支援元：住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム、中央大学学員会

学習会

前期 回数：2回

内容：夏の活動の材料集め、事前調査に向けた勉強会では、地区の歴史・地理を学んだ。

後期 回数：3回

内容：団体の理念の見直し、学習指導のあり方、事前調査に向けた事前勉強では、ヒアリングする内容のまとめをしたり、ヒアリング先の情報を得たりした。

また、あそびーばーの神林さんや中澤先生とワークショップを開いていただき、活動の方向性などを話し合いながら学んだ。

「今年の活動を振り返って」

森美紗子（法学部2年）

わたしにとっての1年間の活動は、今まで見てこなかった、やってこなかったことへの挑戦であったと感じる。2年になったばかりの時に団体のメンバーに言われた「ボランティアの活動というのは、対メンバーや、対現地の人々などいろいろな人と接するため、それぞれの人々に誠意と責任を持って取り組むべきだ」という言葉がきっかけである。それまでわたしはサボっていたわけではないが、「言われたことを考えてみる」というスタンスであった。この言葉を受けてから、自分が今まで無責任な考え方、向き合い方をしていたと気付かされた。それから意識を変え、結果的にわたしにとって新しいことへの挑戦につながった。日程を合わせて行

1. 東北ボランティア

くだけであった事前調査を、打ち合わせの段階から外部の方と積極的に関わり、ミーティングのファシリテーションで団体運営にも深く関わった。これらを経て、団体メンバーが何を考えていて、どういう話をふるとうまく話せるかなど、ミーティングの運営に関わるから考えていたものが、メンバーとの深い人間関係に繋がったり、「気仙沼」という土地をより詳しく理解することで、そこに住む子どもたちへの活動も視野が広がったように思う。しかし、課題は多くあり、自分がファシリテーションをしているメンバー以外はあまり深く知る努力をしていないことなど、まだ改善すべきことはたくさんある。なので、自分の行動に関わる人々を意識して今後も責任を持って活動していきたい。

「この一年間で学んだ事」

大谷夏子（文学部1年）

『人と交流するということ』

団体に入ったばかりのころ、私は、現地での活動に対して、「してはいけないこと」ばかりを探していました。子どもたちと関わるにしても、「してはいけないこと」を知っていないと、子どもを傷つけるのではないかと不安でした。

しかし、実際に活動へ行くと、好きなように遊び、学生たちを慕ってくれる子どもたちを相手にして、そんなことを考える余裕はありませんでした。「面瀬地区の子ども」であるとか、「ボランティアでできている学生」であるとかを考えている暇はなく、ただ、一人ひとりの子どもに誠実に向き合おうとしました。子どもたちは被災地の小学生である前に一人の人間で、私も学生ボランティアである前に人間です。被災地支援活動であっても人が人と交流するということとは変わりなく、私が活動で気遣うべきことは特別なことではないと感じました。

しかし、子どもたちの不意のつぶやきや行動に、どう対応すればいいかわからなくなることもあります。また、子どもたちにどう働きかけたらいいのか、子どもたちにとってより良い環境を作るためにはどうしたらいいのかなど、自分の知識や経験ではどうにもならない多くの問題に直面しました。

この一年間は、それらについて考えることを、団体の先輩、同級生や顧問の先生、ボランティアセンターをはじめ、面瀬地区の方、講師の方、多くの人たちに支えていただきました。被災地支援と言っても、マニュアルのように決まったことをすれば良いのではないため、簡単に答えの出る問題ではなく、今も考え続けている最中です。しかし、すぐに解決できることではないからこそ、多くの機会を得て考え続け、取り組み続けることが必要ではないかと思えます。

来年度には、子どもたちの学年はひとつ上がり、団体も、新たなメンバーを迎えることと思います。子どもたちを取り巻く環境は変化し、それによって、抱える問題も変わっていきます。

次年度以降も、私たちの活動が人と人とのつながりによって成されていることを忘れず、面瀬地区と関わっていききたいと思えます。

団体の紹介：チーム次元

理念

「聞く・見る」「考える」「伝える」

私たちの活動は、定期的に現地へ足を運ぶことで、そこからの声を自分たちの耳で聞くことができ、震災当時から今日までの歩みを自分たちの目で追うことができます。

時間の経過につれて、現地のニーズも変化していきますが、その中で私たちができることを「考える」のは想像以上に容易なことではないです。しかし私たちは活動を通して大島の現状に向き合い、常に「考える」ことに努め、人との繋がりを大切にしています。

現地から離れた東京という地で私たちメンバーにできること、それは現地の現状やそこからの声を「伝える」ことであると考えます。震災から5年経った今、日常生活から震災の記憶がだんだんと薄れつつある中で、私たちに与えられた伝える場を活かして、これからも気仙沼を伝えていきたいと思えます。

活動場所

宮城県気仙沼市大島、鹿折唐桑地区

代表者

佐藤公美（経済学部3年）

所属メンバー

角田千紗（法学部4年）中村実央（文学部4年）、梅林彩美（総合政策学部4年）、重里昴江（経済学部3年）、石渡央崇（総合政策学部2年）

活動先・協力先

気仙沼復幸マルシェ 塩田賢一氏
漁師 村上力氏

春の活動

6月26日～6月29日 7人
活動内容：漁業支援（大島）
支援元：中央大学学員会

夏の活動

8月28日～9月1日 7人
活動内容：漁業支援（大島）
支援元：中央大学学員会

春の活動

2016年2月26日～2月28日 2人
活動内容：現地の近況視察（陸前高田、鹿折、大島）

学習会

前期 回数：週に1度、毎週木曜日
内容：活動内容（クール設置日程、助成金の使用用途等）に関するミーティング

後期 回数：週に1度、毎週木曜日
内容：活動内容（クール設置日程、助成金の使用用途等）に関するミーティング

1. 東北ボランティア

「今年の活動を振り返って」

佐藤公美（経済学部3年）

今年度はチーム次元の創立時のメンバーが卒業して初めての年でした。活動する中心メンバーが3年生3名、2年生1名と昨年度と比較して3分の1ほどになりましたが、人数が少ない中でも協力し活動を行いました。活動内容としては6月と8月に1回ずつクールを行い、気仙沼市大島で民宿を営しつつ漁師をされているこばさんの元でほたての養殖の手伝いをしました。人数が少なくなり今年度のクールの数は2回のみでしたが、6月に参加し8月にも参加してくれた生徒もいたことから、「参加者に活動を通して気仙沼を好きになってもらう」という、チーム次元のメンバーが参加者に対して1番感じてほしいことは達成できたと感じました。しかし来年度以降の活動についてメンバー内で話し合った結果、中心に活動できるメンバーが非常に少ない点などから、団体としての活動継続を断念することになりました。団体としての活動はなくなりますが、チーム次元のこれまでの活動で出会った大島の方々や復興マルシェの方々とのつながりはこれからも続いていきます。それが団体創立当初から掲げている私達チーム次元の理念である「支援が途切れても途切れない人と人とのつながりをつくる」ということだと私は考えています。規模は小さくなってしまいますが、個人的にこれからもできる範囲で気仙沼に関わりを持ち続けていきたいと思います。また、チーム次元の活動を通して実際に自分自身で現地に行くことの大切さを学んだことは、これからの就職活動や社会人になってからも私にとって大きな強みになると感じています。そんな貴重な経験をすることができたのもお世話になった気仙沼の方々や、学生課の職員の方、私達の活動に賛同し援助をくださった先輩方のおかげだと思います。本当にありがとうございました。

「この一年で学んだこと」

石渡央崇（総合政策学部2年）

私がチーム次元の活動に参加したのは大学に入って2年目の春のことです。友人の紹介で体験という形で活動に参加させていただきました。最初の活動は気仙沼で、子どもたちが遊ぶための公園を作るというもので、地元の方たちと触れ合いながら楽しく活動できました。気仙沼や大島の現地にいると、その場でしかわからない雰囲気がわかります。被災地として年月が経つとともに町の回復も見えてきますが、まだ被災の爪あとが目に入るため、自分たちのような存在も悪くないと思いました。そしてチーム加入を決めました。

チームに加入してから2回、気仙沼及び大島に行きチームの理念である「支援が途切れても途切れない人と人とのつながり」をもとに活動できました。メンバーのみんなで公園作り、漁業支援、お世話になった民宿の清掃などを行ないました。チーム次元の良いところは、加入メンバーがその友人を紹介して気軽に参加させることができることです。私自身も友人を紹介して2回ついてきてもらい、一緒に漁業の手伝いを中心に活動をしていました。

私の先輩方では、チームとしての活動以外でも現地に向かって人々と再会を懐かしみ、ふれあうことを楽しみにし、学生生活を送っています。チームの活動、チーム外での活動、両方の面で被災地のことを思っていることがメンバーの良いところだと感じます。これからもその考え方やチームの理念を忘れずに行動していけたら良いと思います。

団体の紹介：チーム女川

理念

○復興の歩みの一歩先を見つめ、女川の人たちの声に寄り添いともに歩む

東日本大震災から5年の歳月が経過し、私たちが活動する宮城県女川町は復興へ向かう途中にあります。時の経過とともに町の方々のニーズも変化していますが、常に女川の方々との対話の中から今自分たちには何ができるのか考えることを心掛けています。そのことから女川町の魅力を学内外の様々な人に伝えることや女川の震災から復興への道りを伝えていくことを主な活動目的としています。そのために女川町の方々、一人一人の思いや考えを聴き、その言葉を大切にしながら町についての理解を深め、魅力溢れる女川町を「発信」していくことにつなげています。

○私たちが学んでいること、生活の場を基盤に個性を活かした活動を行う

女川における現地での活動に加えて、メンバー各々の大学生活を通して得たことを積極的に活動の中で活かせる機会として、東京での活動も頻繁に行っています。また活動で得たことを再び学びに還元するためにも、お互いの意見や情報を交換することも大切にしています。

活動場所

宮城県牡鹿郡女川町

代表者

楠貴裕（法学部2年）

所属メンバー

黒川涼香（法学部3年）稲吉華那（理工学部3年）、矢本貴俊（修士課程1年）、佐藤広基（法学部3年）、久保田亜希（文学部4年）、窪田大悟（法学部3年）、中村亮士（商学部3年）、越智つぐみ（文学部3年）、北村悠馬（文学部2年）、岩立文香（文学部1年）

活動先・協力先

女川町のみなさま、女川町観光協会、女川向学館、東北応援団白金支部
Onagawa Days、NPO法人アスヘノキボウ

春の活動（新入生対象被災地スタディーツアー）

6月5日～6月7日 7人（新入生12名）

活動内容：新入生を対象としたスタディーツアーの実施

都内での活動

7月25日、26日、8月1日、2日 延べ14人

場所：四の橋祭り

内容：調理、販売の手伝い

8月16日、22日23日 延べ11人

場所：麻布十番祭

内容：調理、販売の手伝い

10月4日、10日、11日 延べ12人

場所：みなと区民まつり

内容：調理、販売の手伝い

1. 東北ボランティア

10月31日、11月1日 延べ16人
場所：中央大学多摩キャンパス 白門祭
内容：女川汁（さんまのすり身汁）の販売

春季休暇の活動

2016年3月24日～27日（4人）
活動内容：女川町復幸祭2016の運営の手伝い

学習会

前期 回数：4回

内容：スタディーツアーに参加する新1年生とともに女川町の現状について調べることや現地で活動する際にどのようなことに注意すべきなのかを考えました。また、傾聴講座に参加して、現地の方のお話を聞く姿勢について学びました。

後期 回数：2回

内容：前期に引き続き傾聴講座に参加しました。また、東北学院大学にてこれからの被災地支援の在り方についての意見交換を行いました。

「今年の活動を振り返って」

吉野琢巳（法学部3年）

私たちチーム女川は、「大好きな女川を伝えたい」という活動理念のもと、宮城県女川町で暮らしている方々にお話をお伺いする「被災地スタディーツアー」の運営や、麻布十番祭りなどで、女川町で獲れたさんまの炭火焼きやグッズの販売、そして、白門祭においては、女川町のさんまを使ったつみれ汁の販売を行いました。また、他の団体と協力して、パネルを使ったボランティアの活動報告も学内外で行いました。

活動を通して私たちは、ボランティアというものが、社会の問題点を捉え、その解決に何が必要であるかを把握し、実際の行動に移すという、一筋縄ではいかない活動であることを改めて実感しました。復興が進むにつれ、被災地でのボランティアで求められる活動のニーズは刻一刻と変化していきます。そのため、団体の活動が、前年の活動をそのまま踏襲した変化のない活動では、支援のニーズにズレが生じてしまい、活動する意義が根本的に揺らいでしまうこととなってしまいます。

今年度の私たちの活動においては、通常の活動で生じた課題の他にも、この様な被災地ボランティアのニーズの変化を把握することにも念頭に置きながら活動をしてきました。ニーズの変化に対応するために、私たちは、「女川町の現状はどうなっているのか？」や、「大学生の学生団体だからこそできる支援のあり方とは？」といった問題意識を常に大事にしながら、日々、メンバーによるミーティングを何度も重ね、実際の行動に反映させていきました。例えば、白門祭での活動による収益金を寄付する際にも、どの団体や事業先に寄付すべきなのかについて、ニーズを把握しながら何回も議論を重ねていきました。

活動を通して、私たちは社会を見る目を養い、それぞれの学びへの何らかのフィードバックができた様に感じています。自分の専攻の学習だけでなく、社会的な問題意識を醸成し、他人とその問題意識を共有し議論することで、自分の考えを深めていくことが、各個人なりに進められた様に思います。

震災からの復興といった社会的な問題を考える際には、終わりがありません。しかし、こうした問題を把握し考えることも、支援につながっているのではないかと改めて実感しました。私たちは、変化する女川町を受け止めつつ、これからも、「大好きな女川町を伝え」続けていきます。

「活動を通して学んだこと」

北村悠馬（文学部2年）

この団体では、震災復興に携わる多くの社会人と交流を持つことができました。もうすぐ震災から5年が経つ今、ボランティア活動は瓦礫撤去などではありません。私がこの団体で出会った方々は、被災地の復興にどう関わっていこうか真剣に考えていたと感じました。これほど多くの人々が東北の復興のために取り組んでいるというのはすごいことだと思いました。もちろん、被災した方々と直接触れ合いボランティア活動を行う方々もいて、復興に関わる方々以上に尊敬しています。しかし、前を向いて被災地をなんとかしようという取り組みも必要で、ボランティアとしてかかわることは、意味のあることなのではないかと思います。震災後の課題というのは非常に複雑で、何をするのが正しいとか決まっているわけではなく、また実際に直接誰かのためにやるということではないので、私自身はこうした取り組みが本当にボランティアをしていると言えるのだろうかと思いました。しかし、少なくともこの団体で、女川町と関わり、現地での課題を知ることができました。そこからいろいろと考えることもできました。私は、ずっと東京で生活していました。震災が起きてからの高校3年間、東北のことなんて他人事として、気にしないでいましたが、何も支障はありませんでした。しかし、東京でもいつ震災が起きるか分かりませんし、人口流出といった今被災地で起きている問題は、今後の日本で起きる、起き始めている問題です。一足先に行く東北を今一人でも多くの人が見ておく必要はあると思いました。決して誰にも注目されず復興が行われるべきではないと思います。

ボランティア活動では普段出会うことのできないような人々と出会うことができました。そして、実際の社会での問題に触れることができました。学んだというより感じたことは、現地での課題の解決の大変さと、今でも多くの人々が自分のやり方で復興に関わっているということです。

2. 学内ボランティア

1. クリーン大作戦・春の陣

実施日：5月30日（土）9時30分～13時30分
場所：多摩キャンパス周辺
参加者：39人（中大生24人、中大職員2人、明星大生12人、明星大職員1人）
内容：キャンパス周辺のゴミ拾い活動
主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- ボランティアはもっと敷居の高いものだと感じていたが、とても楽しく参加できました
- 自分は喫煙者だが、タバコの吸い殻ゴミが多いことを知り、喫煙マナーの向上の必要性を感じた
- 何度か参加しているが、だんだん参加者が増えていることが嬉しい。また、ゴミが少しだけ前回よりも減っていた。この活動の効果があったのだとしたら嬉しい
- ゴミを拾っているときに通りがかった車が窓を開けて「お疲れ様」と声をかけてくれた

〈活動の様子〉



道路沿いにはタバコ吸い殻がたくさん



サンダルを発見



集合写真

2. クリーン大作戦・秋の陣

実 施 日：11月29日（日）9時～12時30分
 場 所：多摩キャンパス周辺
 参 加 者：26人（学生18人、職員4人、職員の家族4人）
 内 容：東中野自治会・谷津入支部の皆さんと一緒に、キャンパス周辺道路のゴミ拾い活動と草刈り
 主 催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- ・タバコのポイ捨ては相変わらず多かった
- ・初めての参加で少し不安もあったが、みなさんが優しくて楽しかった
- ・いつもより早起きして、道をキレイにできたので達成感があり、清々しい気持ちになった

〈活動の様子〉



地域の皆さんと一緒に清掃



活動の様子



集合写真

3. クリーン作戦・ミニッツ ～昼休み30分間のゴミ拾い活動～

「クリーン作戦」に参加した学生から、「もっと定期的にゴミ拾い活動をしたい」という声があがり、2014年から継続的に昼休みの30分間を活用して「クリーン作戦・ミニッツ」を行っています。

	実施日	参加学生数
第1回	4月21日	3人
第2回	5月18日	2人
第3回	6月16日	1人
第4回	10月13日	3人
第5回	11月16日	5人
第6回	12月15日	5人

〈参加者の声〉

ゴミ拾って楽しいの?とよく聞かれます。ゴミ拾い、楽しいです!

直接目で見て、『こんなところにゴミが!』『この種類が多いな』ということに気づいたとき、前回のように地域の方々と合同で実施したことで、『地域に貢献している』ことを実感したとき、楽しい瞬間はたくさんあります。

参加学生からは“とても清々しい気持ちになる”という声をよく耳にしますし、地域の方々にも“若い力が加わると良いね”とおっしゃっていただきました。自分自身のやりがいはもちろん、地域の方々の快適な環境づくり、その成果が大量のゴミ袋を通して目に見える。これがゴミ拾いボランティアの良さではないかと思えます。

(文学部3年 岩本華奈)

〈活動の様子〉



手作りの空き缶取り器・缶ホイホイ



今日も空き缶たくさんでした

3. 地域連携

1. 地域防災

(1) チーム防災

概要

中央大学ボランティアセンターは、これまで東日本大震災の支援活動や学生の防災力向上のための「災害救援ボランティア講座」を実施してきた。それらに参加した学生の中から、実際に多摩地区での防災活動に参加し、地域防災に貢献する学生団体として「チーム防災」が発足した。日野市社会福祉協議会など地域の応援を受け、自治会や学校での防災訓練のサポートボランティアとして積極的に参加した。2016年2月6日は地域住民と大学生を対象に、防災イベントを実施した。また学内の防災意識向上のため、多摩キャンパスで「避難所運営ゲーム体験会」を実施した。これらの活動の結果、2016年3月12日日野市社会福祉協議会「第31回福祉のつどい」にて表彰された。

活動場所

多摩地域

所属メンバー

佐藤広基（法学部3年）、中村亮士（商学部3年）、小山景子（総合政策学部3年）、西沢栞（総合政策学部3年）

協力先

日野市社会福祉協議会、日野市



〈2015年度活動記録〉

	タイトル	実施日	中大生の参加人数	内容
1	東京都南平高校 奉仕の授業「HUG」体験	7月10日（金）	2人（佐藤、中村）	各クラスに入りファシリテーションを行う
2	日野市立三沢中学校地区育成会サバイバルキャンプ（三沢中地区育成会）	8月1日（土）、2日（日）	1人（佐藤）	防災訓練「カエルキャラバン」を子どもたちに説明する役割を担う
3	日野市立七生中学校防災宿泊訓練（七生中学校防災宿泊訓練実行委員会）	8月29日（土）・30（日）	3人（佐藤、中村、小山）	訓練の全般的なサポート。プログラム内の「カエルキャラバン」の担当者となる
4	南平六丁目田中自治会炊き出し訓練（南平田中6丁目自治会）	9月27日（土）午前	4人（中村、久保田、北村、堀地）	日野市みなみだいら児童館ぶらねっとにて、炊き出し訓練を行う

3. 地域連携

5	日野市平山苑自治会における第3回防災セミナー・避難所運営訓練（平山苑自治会）	9月27日（土）午後	4人（佐藤、中村、ほか）、社協実習中の明星生2名も	地域住民の方との防災カードゲーム「HUG（避難所運営ゲーム）」訓練
6	日野市「まちづくり市民フェア2015」におけるカエルキャラバン	10月18日（日）	21人、職員2人	市民の森ふれあいホール（日野市）で開催された。中大・明星大ブースで「カエルキャラバン」のジャッキアップ訓練、毛布担架を実施
7	学内開催「避難所運営ゲームHUG」体験	11月13日（金）	12人	「チーム防災」が企画。多摩キャンパスグループカウンセリングルームにて実施
8	ひらやまBOSAIウォークラリー（平山小学校運営協議会）	11月14日（土）	9人	毛布担架、ジャッキアップ訓練、紙食器づくり、車いす体験、空気消火器、防災クイズなどを担当
9	南平小防災体験	11月28日（土）	2人（中村、小山）	南平小学校で「ナマズの学校」や「持ち出し品なあに？」ほか
10	日野市災害ボランティア・センター立上げ訓練	12月15日（火）	1人（中村）、中澤センター長、職員1人	ひの煉瓦ホール（日野市民会館）
11	学内向け「避難所運営ゲームHUG」体験	12月18日（金）	9人	「チーム防災」が企画・多摩キャンパスグループカウンセリングルームにて実施
12	日鉱住宅防災会勉強会「被災地での教訓」	2016年1月17日（日）	2人（中村、西沢）	南平南部地区センターで元福島中央テレビ副社長・寺島祐二氏に、災害時の情報伝達についてのお話を伺う
12	イオンモール多摩平の森「多摩地区6大学防災イベント」	2016年2月6日（土）	延べ66人（佐藤、中村、西沢、小山を含む）	チーム防災が主催でHUGを実施。一般来場者、他大学生など午前・午後で延べ39人が参加した。カエルキャラバンも実施。
13	日野市緑が丘自治会における「災害図上訓練DIG」	2016年2月11日（木・祝）	2人（中村、西沢）	日野市緑が丘自治会にて行われた「災害図上訓練DIG」に参加
14	平山苑自治会「黄色いハンカチ作戦」訓練	2016年2月28日（日）	1人（佐藤）	災害時に周囲に安否を知らせる「黄色いハンカチ作戦」に参加

〈感想〉

夏休みの災害救援ボランティア講座を受講した際に、近くの中学校で防災宿泊訓練が行われることを知りました。以前から地域の活動に興味を持っていたこと、またボランティア講座で学んだことを次に繋げていきたいという思いから、防災宿泊訓練に参加しました。二日間の訓練を通じて、大学周辺には防災に力を入れている地域や自治体があることを知りました。そして今後も地域と関わりながら、防災に対する意識を広めていきたいという思いからチーム防災への参加を決めました。

チーム防災では、これまでに学内外での避難所運営ゲーム（HUG）の企画・実施、地域で開催される防災訓練や学習会への参加などの活動を行ってきました。これらの活動を通じて地域の方々との意見を交わすなかで、防災に関するだけでなく地域に関することなど様々なことを学ばせて頂きました。少しずつではありますが、地域の幅広い年代の方々との顔の見える関係を築けていることに感謝するとともに、このような関係を築くことが防災において大切だと改めて感じています。今後も、地域と学生が関わりあいながら共に防災力を向上できるよう、学内外での活動に力を入れていきたいです。

（総合政策学部3年 小山景子）

私がこの活動にかかわるきっかけは、学内HUGに参加したことでした。ゲームを通して楽しみながら防災を理解できることに魅力を感じ、その体験を広めるチーム防災の活動に加わりました。参加者から運営の立場に変わったことで、どうすればより参加者の気づきを増やせるか、参加してよかったと思ってもらえるかを考えることが必要になりました。また、参加者層に合わせた伝え方や広報などの工夫も課題でした。至らない部分も多かったと思いますが、活動を通して多くの方々から感想や応援をいただけたことは大きな励みになりました。

活動の中で、私自身も様々な意見から学ぶ機会が多くありました。復興支援に携わる学生、実際に避難所に行った方、長く地元に住んでいる方など、多様な視点に触れることができました。一人ひとりが防災について考え、それを共有することで地域全体の防災力向上につながるのだと実感しました。災害発生後の復興支援などが継続的に必要とされるのはもちろんですが、それと平行して今後の災害に備える活動も重要だと考えています。これまでの教訓を地域で共有し、意見交換をしていくことで、少しずつでも将来の防災・減災につながるよう、今後もより良い活動について考え続けていきたいです。

(総合政策学部3年 西沢栞)

〈活動風景〉



三沢中サバイバルキャンプ



七生中宿泊訓練



南平六丁目町会訓練



平山苑自治会HUG訓練

3. 地域連携



ひらやまBOSAIウォークラリー



ひらやまBOSAIウォークラリー



ひらやまBOSAIウォークラリー



ひらやまBOSAIウォークラリー



ひらやまBOSAIウォークラリー



ひらやまBOSAIウォークラリー



緑が丘自治会DIG訓練



緑が丘自治会DIG訓練



平山苑自治会黄色いハンカチ



平山苑自治会黄色いハンカチ



学内HUG



学内HUG



学内HUG



学内HUG



イオンモール多摩平の森での防災イベント



イオンモール多摩平の森での防災イベント

3. 地域連携



イオンモール多摩平の森での防災イベント



イオンモール多摩平の森での防災イベント

2. 連携事業（八王子市・日野市）

（1）大豆プロジェクト

- 実 施 日：9月19日（土）、11月21日（土）
 場 所：七ツ塚ファーマーズセンター、近くの畑（日野市）
 参 加 者：学生合計6人、職員1人
 内 容：「日野産の安全で安心な大豆を子どもたちの学校給食へ届けたい」という思いから、平成15年度から始まった『大豆プロジェクト』。市民の方々のボランティアで成り立つこの事業に、秋からボランティアセンターとして参加させていただいています。
 協 力：日野市産業振興課、NPO法人めぐみ

〈参加者の声〉

大豆の収穫作業に参加しました。大豆の茎を根元から引き抜いて、乾燥させるために一列に立てて並べる、というものです。根元から抜くのは思いのほか力が必要で驚きましたが、多くの方が参加されていたので、予想以上に早く作業は終了しました。協力し合って作業を行うことの大切さを、改めて実感しました。何人かの方とお話をする機会があり、楽しい時間を過ごしました。

作業の後は、大豆を始めとした食の安全等に関するお話を伺いました。普段当たり前のように食べているものについて再考するきっかけとなる貴重なお話でした。楽しくて、学ぶことの多い、充実したボランティアでした。機会があれば、今後の大豆プロジェクトのボランティアにも参加させていただき、微力ながらお役に立てればと思います。

（法学部1年 森春菜）

〈活動の様子〉



大豆の収穫作業



思ったより力がいります



作業後のミーティング



食に関する講演会の様子

(2) ユギ里山活動

- 実施日：10月24日（土）、2016年1月10日（土）、2月27日（土）、3月12日（土）
場所：ユギ里山保全チームの畑（八王子市堀之内）
参加者：学生延べ27人、職員1人とその家族4人
内容：東京都の里山保全地域に指定されている、八王子市堀之内にある保全地区にて、長年にわたり里山の風景を残していきたいと活動されている、ユギ里山保全チームの皆さんの活動に参加させていただいています。2016年からは、ボランティアサークルIVUSAのメンバーも継続的に参加するようになり、チームの方からは「これまでやりたいと思ってできていなかったことがみるみるうちに進んで嬉しい」との言葉をいただいています。
協力：ユギ里山保全チーム、八王子市環境保全課

〈参加者の声〉

この里山保全活動は、多摩ニュータウンの開発を背景に自然豊かな里山の景観を後世に残すため、ユギ里山保全チームさんが中心となって行っている活動です。景観を維持するというのは、簡単なことではありません。さらに自然が相手のこの活動にゴールはありません。しかしだからこそ、若い学生の力が必要であると思います。是非一度、あの美しい里山に足を運んでみてください。そしてその景観を守るため、一緒に汗を流しましょう。

（経済学部1年 鈴木祐介）

自分は以前サークルを辞めてしまっていたので、複数人で協力して1つの事をするという体験は久々に非常に充実感がありました。里山の方々や他のボランティアの学生も皆優しく、楽しく農作業が出来ました。自分は手先が不器用で、ボランティアをしたいという意思があるのにも関わらず「迷惑を掛けてしまうかも知れない」という不安のせいで今まで参加を渋っていました。しかし、今回の農作業は一步踏み出せば誰かの助けになれたり、自分の自信にも繋がるということ気付かせてくれた価値のある体験になったと思います。（法学部2年 今井皓大）

〈活動の様子〉



土をならして種まき準備



麦踏みの様子



ビニールシート張り



里山の川には何がいるかな

（3）みんなの遊・友ランド

実 施 日：6月14日（日）
 場 所：日野市市民の森ふれあいホール
 参 加 者：544人（うち中大生30人）、職員1人
 内 容：障がいのある子もいない子もひとつの場所で楽しめる場を提供するイベントのお手伝い
 主 催：日野市
 運 営：日野市青少年委員の会

〈参加者の声〉

初めて障がいを持つ子と一緒に触れ合った機会だった。はじめは緊張したけど、その子が笑顔になるとこっちも嬉しくなり、自分もとても楽しめた。いい機会をありがとうございました。

〈活動の様子〉



ボランティアへのオリエンテーション



子どもたちとのゲーム



みんな大好きプールマット



汗だくになりながら大興奮

(4) みんなといっしょの運動会

実施日：10月4日（日）

場所：中央大学第一体育館アリーナ

参加者：6人、職員1人とその家族4人

内容：障がいの有無にかかわらず運動会を通じて市民が交流する運動会の運営補助

共催：日野市社会福祉協議会、東京日野ライオンズクラブ

〈活動の様子〉



活動の前に説明を受けます



入場行進



競技中は真剣そのもの



中央大学応援団も盛り上げてくれます

（5）まちづくり市民フェア2015

実施日：10月17日（土）準備、10月18日（日）本番
 場所：日野市市民の森ふれあいホール
 参加者：約1,800人以上（うち中大生21人、職員2人とその家族4人）
 内容：日野市においてまちづくりに携わる団体が集うイベントへの出展と運営補助
 主催：まちづくり市民フェア実行委員会
 共催：NPO法人ひの市民活動団体連絡会

〈参加者の声〉

まちづくり市民フェアは、地域の人と一緒にフェアを作っていくというものでした。最初はお手伝いという感覚で参加を決めましたが、最初の準備から片付けまで手伝うことで自分もフェアを作っている一員だという気持ちを感じました。ただ準備を手伝うだけでなく、自分達の成果を発表したり、他の団体のお話を聞いたり、地域の美味しいものを食べたり等出来て本当に楽しいので、気軽な気持ちで参加してみてください！

（法学部4年 三原晋）

〈活動の様子〉



展示ブースの様子



スタンプラリー受付



カエルキャラバンの様子



集合写真

(6) 夢ふうせんバザー

実施日：10月25日（日）
場所：社会福祉法人夢ふうせん（日野市）
参加者：6人、教職員2人とその家族4人
内容：夢ふうせんのバザーにおいて、商学部・中村亨先生ゼミの有志メンバーによる東北支援物産展と、防災アトラクションの運営お手伝い
主催：社会福祉法人夢ふうせん後援会

〈参加者の声〉

普段接することの少ない様々な年齢層の方々と交流することができ、よい経験となりました。今後も多くの人たちと協力して、より良いものを作っていけるよう努力したいです。

（法学部3年 穴澤茉由子）

今回、特に震災時に活かせる新たな知識をたくさん得ることができました。避難の際に持って行くべきもの、活用法、ジャッキの使い方など、今後もし震災が起こった場合に備えるために、周りの人々に伝えていこうと思います。

（文学部1年 鶴田恵子）

〈活動の様子〉



東北支援物産展の様子



防災アトラクション・カエルキャラバンの様子

4. 地域と学生のコーディネート

ボランティアセンターができたことで、八王子市・日野市・多摩市などから「中央大学の大学生の力を貸してほしい！」という声が届くようになりました。相談があったときは、ボランティア掲示板へのチラシの掲示やボランティアをしたい学生が登録しているメーリングリストに情報を流し、呼びかけています。

《2015年度実績》

No	募集内容	月日	参加者
1	ひの新選組まつり	5月9日～10日	16人
2	NPO法人キアセット説明会	5月13日	8人
3	日野市環境フェア	11月14日～15日	6人
4	いのちの感謝収穫祭	11月25日	2人
5	夢ふうせんたき火まつり	12月5日	1人
6	日野市少年学級	毎月	2人



ひの新選組まつり説明会



ひの新選組まつり説明会



キアセット説明会

報告編

5. 学内活動報告

1. 被災地支援学生団体活動写真展

実施日：5月12日（火）～14日（水）

なお、展示期間中の各日昼休みは学生が説明会を行った。

場所：多摩キャンパス中央図書館1階

参加団体：被災地支援学生団体4団体、学生スタッフ「チーム女川」

主催：被災地支援学生団体

協力：中央大学ボランティアセンター

〈写真展会場の様子〉



2. 宮城県女川町 復興支援インターン写真展

実施日：6月17日（水）～30日（火）

場所：多摩キャンパス ヒルトップ2階 カフェテリア前

ねらい：2014年度春季休暇期間に本学学生6人が「復興支援インターンプロジェクト（主催：復興大学）」に参加し、宮城県牡鹿郡女川町の水産加工会社3社（ワイケイ水産、ヤマホン・ベイフーズ、岡清）で約1週間の職業体験を行った。その体験から被災地や被災企業の現状や課題、復興の進捗などについて学び、被災地はまだ復興の過程にあること、震災を風化させてはならないことを実感し、本写真展を企画した。活動中に学生自身が撮影した写真を通じて、インターンでの取り組みや学び、そして被災地や被災企業の現状や課題について中大生に知ってもらうことを目指した。

主催・発表者：2014年度春季復興支援インターン参加学生6人

〈写真展会場の様子〉



〈展示写真の一部〉



5. 学内活動報告



3. ボランティア写真展2015

- 実 施 日：10月21日（水）～26日（月）
 21日（水）～23日（金）各昼休みに学生による報告会を同会場で実施
- 場 所：多摩キャンパス中央図書館1階
- 参 加 団 体：被災地支援学生団体4団体、学生スタッフ「チーム女川」、「復興支援インターンプロジェクト（主催：復興大学）」参加者、中央大学付属杉並高校
- 主 催：中央大学ボランティアセンター
- 備 考：10月25日（日）ホームカミングデーにて来場者への説明を実施。来場者は約100人
 学員のほか、学生の父母や教員も来場いただいた

〈アンケートより一部抜粋〉

- ・震災から4年以上がたち、世間の多くの人の記憶が薄れてきたと思うが、被災者の心の傷はまだまだ癒えていない状況にあると思う。これからも各団体の理念を継承して、被災地の方々に勇気づけてほしい
- ・学生が頑張っている姿を通してパワーをもらえる。継続して活動してほしい
- ・中大OBとして、こうしたボランティアはとても大切な事と思う。今後も無理なく活動が続くことを期待する
- ・座学中心ではなく、ボランティア活動を通じて得られる貴重な経験が豊富にあれば、卒業後社会人として立派な人生を送れるのではないか
- ・ボランティアはとても良い活動。気持があっても様々な制約で実際行動に移せないが、このような機会に皆が活動している事を知ると、とても感心する。今後は地域に根差した活動がもっと広がると良いと思う

〈写真展会場の様子〉



学生による報告の様子



学生による報告の様子

5. 学内活動報告



学生による報告の様子



学生による報告の様子



沖縄からキャンパス見学の高校生も



中大杉並高校からの展示物



ホームカミングデーの様子



ホームカミングデーの様子

4. 父母対象キャンパスライフ体験会

実施日：11月7日（土）13：10～14：00

場所：多摩キャンパス 1406号室

テーマ：「ボランティア学生の体験発表会～私たちがボランティアを通して学んだこと」

内容：被災地支援学生団体および学生スタッフ「チーム女川」各団体の代表学生が活動発表を行った。

発表学生：学生団体「はまぎくのつぼみ」 木下卓哉（商学部1年）、田中瑠海（商学部1年）

学生団体「はまらいんや」 鈴木航輔（法学部1年）

学生団体「面瀬学習支援」 松本紗季（法学部2年）、田中結衣（文学部2年）

学生団体「チーム次元」 石渡央崇（総合政策学部2年）

学生スタッフ「チーム女川」 池田木綿奈（理工学部1年）

来場者数：20人

主催：父母連絡会主催

〈アンケートより一部抜粋〉

- 現地に赴いて、現地の人々と生きたかかわりをもってできることを続けている学生さん達のが、今度の益々のつながりに発展することを期待しています。
- 皆さん熱心な様子が伺えました。よく考えて行動しているなと思いました。早口な方がいらっしやり、ちょっと聞き取りにくく、もうちょっとゆっくり話していただければありがたかったです。皆さん引き続き活動頑張ってください。



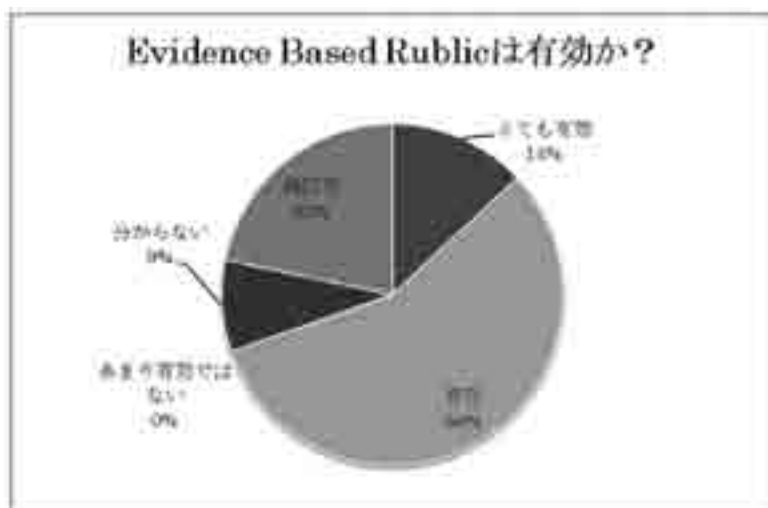
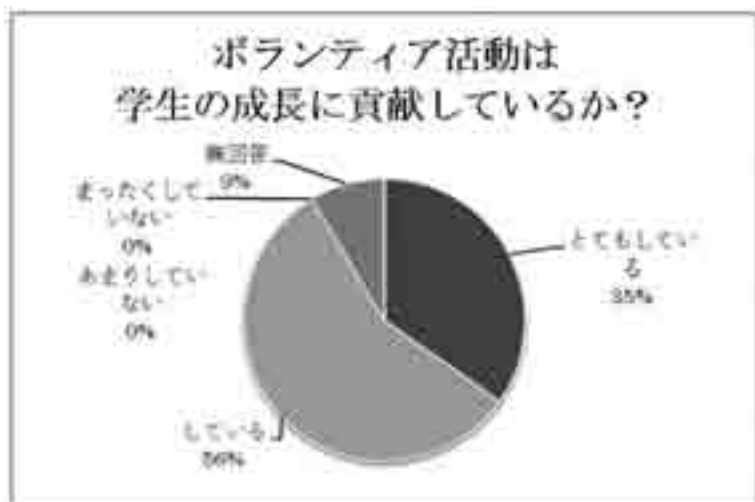
5. 中央大学教育力向上推進事業報告会 ～ボランティアセンターリーダー養成メソッド～

- 実施日：12月5日（土）13時30分～16時30分
場所：多摩キャンパス Cスクエア小ホール
参加者：77人
概要：2013年・2014年のボランティアセンター運営基盤となった「中央大学教育力向上推進事業」の報告会を開催した。センター設立時の2013年4月1日に入学し、その後ボランティアセンターと連携を持ちながら東北支援活動を続けてきた、5人の大学3年生たちの活動報告を中心に行った。また、教育力向上推進事業として大きな課題であった、ボランティア活動の教育的効果について、その指標となる「Evidence Based Rubric」の開発について報告した。
- 内容：開会の挨拶 松本真理子（中央大学ボランティアセンターコーディネーター）
第一部 ボランティア 学生による活動成果報告とトークセッション
発表者：被災地支援学生団体所属学生
稲吉華那（理工学部都市環境学科3年、チーム女川所属）
黒川涼香（法学部法律学科3年、チーム女川所属）
佐藤公美（経済学部国際経済学科3年、チーム次元所属）
佐藤耕太（法学部法律学科3年、はまぎくのつぼみ所属）
手塚文裕（法学部法律学科3年、はまらいんや所属）
コーディネーター：
中澤秀雄（ボランティアセンター長・中央大学法学部教授）
第二部 Evidence Based Rubricの開発課程と活用について
浅野高光氏（株式会社ラーニング・イニシアティブ）
閉会の挨拶 中川恭明（学生部長・中央大学総合政策学部教授）
主催：中央大学ボランティアセンター

〈感想〉

- 学部生とは思えない、しっかりとした発表や考えにとっても感心した。学業に遊びに大変だと思いが応援している。先生方、ボラセン職員の方、皆さんのサポートが効果的に展開していて感銘を受けた。
- 意欲を持って活動している様子がとても伝わってきた。大学生のパワーは自分たちが思っているより大きい。私たちの施設にボランティアに来てくれている方々をみてもそう思う。是非色々な場所に行き、実際の場を見て感じ、仲間と話し、振返って何か大切な事に気づけると良いと思う。自分自身も頑張ろうと思える発表だった。
- 今までにない深い発表が聞けて面白かった。発表の仕方や切り口もそれぞれ個性が出て、発表の準備にたくさんの時間をかけていたのだなと感じた。また、学生の言葉できちんと“言語化”をするために、学生から時間をかけて引き出したのだなというボラセン側の苦勞と成果も感じられた。

〈アンケート結果（一部抜粋）〉



〈会場の様子〉



会場

5. 学内活動報告



中澤ボランティアセンター長



佐藤公美



手塚文裕



黒川涼香



稲吉華那



佐藤耕太



第1部トークセッション



浅野高光氏



第2部の質疑応答



中川学生部長

6. 学外での活動報告事業

1. 大学ボランティア活動写真展@日野市役所

実施日：8月3日（月）～14日（金）

場所：日野市役所 1F市民ホール西壁側

内容：日野市役所を訪れる市民の皆さんに、日頃の大学生ボランティア活動の様子を見ていただけるよう、写真展を開催した。

主催・協力：日野市役所、中央大学ボランティアセンター、明星大学ボランティアセンター

〈活動の様子〉



写真展の様子①



写真展の様子②



写真展の様子③

2. 明星大学きらきらボランティアセンター主催 「2015夏の学生ボランティア活動報告会～広がる世界、つながる仲間」

- 日 時：10月6日（火）
会 場：明星大学28号館プレゼンテーション室
内 容：2015年夏季休暇にボランティアに行った、明星大学、法政大学、中央大学の学生が報告を行った。中央大学からは「チーム女川」代表・楠貴裕（法学部2年）が発表した。会場には学生だけでなく、地域や行政の方が集まった。発表終了後は、ひの社会教育センター・寺田氏より講評があった。
主 催：明星大学きらきらボランティアセンター

〈発表の様子〉



3. 「新しい東北フォーラム in 仙台」 における復興支援インターン報告

日 時：10月12日（月・祝）
 会 場：せんだいメディアテーク（宮城県仙台市青葉区）
 主 催：「新しい東北」官民連携推進事業（事務局：復興庁）
 内 容：「新しい東北フォーラムin仙台」のプログラムのひとつとして、大学生による「復興支援インターン」の報告発表が行われた。本学より田村恒介（経済学部4年、2014年夏季女川インターン参加）、立命館大学2年・菜切景子さん、新潟敬和学園大学3年山本里奈さん以上3名が報告した。山崎房長・復興庁参事官より講評がされた。

〈報告会の様子〉



田村恒介



会場の様子



山崎参事官による講評



発表者の集合写真

4. 早稲田大学 早稲田文化芸術週間 2015イベントシンポジウム 「4年後の自分と東北を想像しませんか？」 ～『復興支援インターン』を通して復興を考える～

- 日 時：10月16日（金）
会 場：早稲田大学 小野梓記念講堂
内 容：1. 復興支援インターンの紹介 斎藤晋氏（復興庁宮城復興局）
2. インターン参加学生による発表
中央大学・田村恒介（経済学部4年）、早稲田大学
3. パネルディスカッション
「復興支援インターンを通して復興を考える」
コーディネーター 澤村隆太氏（東北学院大学ボランティアステーション）
パネリスト 斎藤晋氏（復興庁宮城復興局）
松本真理子（中央大学ボランティアセンターコーディネーター）
学生（中央大学・田村恒介、早稲田大学）
主 催：早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター（WAVOC）

〈当日の様子〉



掲載：読売新聞ONLINE <http://www.yomiuri.co.jp/stream/?id=2909999&ctg=3>



5. 中央大学杉並高等学校・ボランティア活動勉強会

実施日：12月12日（土）
 場所：中央大学杉並高等学校・PC教室
 参加者：高校生18人、大学生3人、教職員3人
 内容：3月に東北へ研修に行く高校生へ、大学生から体験談を報告したり現地での様子をアドバイスする勉強会

〈参加者の声〉

今回、自分の母校また経験した研修の事前学習として高校生にボランティアについて話すことができいい経験となりました。自分自身、団体での活動だけでなく昨年の研修を振り返ることができ、改めて自分が行っているボランティアとは何なのか考える機会になりました。私たちの話に耳を傾ける高校生の姿を見て頼もしく思いました。また、来年度以降の活動を共にできたら嬉しく思います。
 （文学部1年 小谷 彩夏）

中央大学杉並高校の東北ボランティア研修は私自身が中央大学へ進学後に被災地支援のボランティアをしたいと思うようになるきっかけとなった活動でした。そんな原点ともいえる母校の事前活動に微力ながら携わることができ、改めて刺激を得ることができました。また、被災地に行ったり活動して感じたことや見聞したことを発信するよい機会となりました。
 （文学部1年 平田 祐）

〈活動の様子〉



活動発表する楠貴裕



活動発表する平田祐、小谷彩夏



グループに分かれてさらに質問



熱心な高校生に感心しました

6. 大学生ボランティア活動報告&防災イベント

- 実施日：2016年2月4日（木）～11日（木・祝）
※2月6日（土）は、イオンホールにて、大学生による活動発表や防災イベント、物産展を実施
- 場所：イオンモール多摩平の森 3Fエスカレーター前
- 参加団体：中央大学ボランティアセンター、中央大学被災地支援学生団体、明星大学ボランティアセンター、明星大学減災プロジェクトFine、明星大学虹色の薔薇の会、明星大学防犯ボランティア隊MCAT、法政大学多摩ボランティアセンター学生スタッフ、実践女子大学東日本大震災岩手県宮古支援プロジェクト、首都大学東京「東日本きずなプロジェクト」、東京薬科大学ボランティア団体 I V O L E A、日野市ボランティア・センター
- 後援：日野市役所
- 内容：・パネル展示 期間中開催
各大学の被災地支援の活動を写真や文字で紹介。学生が会場で解説を行う
・イベント 2月6日（土）10時～17時
①学生の活動報告
②避難所運営ゲームの実施
③防災ワークショップカエルキャラバンの実施
④東北物産展の実施（中央大学・明星大学）
⑤着ぐるみや大道芸による呼び込み
- 来場者数：パネル展 3,223人、イベント 300人 【合計 3,523人】
参加大学生数 66人（中央大学31人、明星大学20人、実践女子大学6人、法政大学4人、首都大学東京4人、東京薬科大学1人）

〈来場者の声〉

- ・私は山梨県に住んでおりますが、出身は福島県南相馬市小高区です。津波では多くの方が亡くなり、海岸の方は家も松原も無くなりました。皆様がどのようなことをされているのか拝見したくなり伺いました。どうぞこれから被災地を元気づけてください。皆様の若々しい笑顔はきっと皆さんを勇気づけていると思いますよ。そして今朝、私がラジオで知ったように、もっとマスコミやネット等で発信されると良いのではと思います。どうしても人々は忘れ易いので。3.11が来ると思い出して頂くのはありがたいですが、その地に居る人はずっと続いている暮しがあるのです。息の長いご活動をお祈りします。私も元気を頂けました。どうもありがとうございます。
- ・東日本大震災から年月が経つがそれを風化させないよう、今まで活動されている学生さんに感謝します。活動は被災者の方に力を与え、被災していない私たちには忘れてはならない事など勉強になりました。
- ・「避難所運営ゲーム」を大変興味深く参加させていただきましたので、これを私どもの自治会の人たちにも経験させたいと思いました。会場での学生ボランティアの方々は皆さんとても熱心で優秀な学生さんたちと思いましたが、中でも中央大学の学生さんたちはとても好感のもてる学生さんたちでした。さらにより教育に励まれますように、期待しています。本当にありがとうございました。
- ・避難所運営ゲームに参加したことで避難所の様子についてイメージが持てました。多くの事情を抱える人が一同に集まる空間の運営の難しさを知ることができました。若い世代にこうした防災の知識とスキルを伝えていくことの重要性を知りました。

〈参加学生の声〉

- 地域の方々の声や大学生間の交流などにより深められることができました。大学生なりの行動や求められていること、こらからの活動への意欲がわかりました。楽しかったです。これが今後も継続できることを楽しみにしています。
- どうすればお客様が立ち寄ってくださるのかを考えながら行いました。他大生の方との交流や一般の方との交流がとても新鮮でした。来年はさらにパワーアップすべく、反省をしっかりと行いたいと思います。
- 他大学のプレゼンを聞いたり、カエルキャラバンの補助をしたりすることで、自分の勉強にもなりました。受付では、地域の方とお話することもあり、とても良い機会でした。ありがとうございました。
- いつもとは違う経験ができ、新鮮でした。すでに中大ボランティアセンターで活動されている人が輝いて見えました。私も頑張ります。
- (着ぐるみを来て) 1Fフードコートで宣伝を行っていた際に、小さいお子さんを連れた若い女性の方が「ああ、これ今日だったんだ」と声をかけてくださった。事前PRがしっかり行っていた証かなと思う。また「東北支援のために買って行くね」と言ってくださったお客様も見られ、我々の願いも通じたと感じた。リーフレットの裏の販売先の連絡先の欄の部分に興味を示してくださったお客様も多く、継続的な支援につながるのではないかなと思う。

〈パネル展〉



パネル展の様子



大学を越えてのつながり

〈2月6日イベント〉



報告学生 田中瑠海



報告学生 佐藤広基

6. 学外での活動報告事業



避難所運営ゲーム（HUG）の様子



皆で議論します



カエルキャラバンの様子



子どもに伝わりやすいよう工夫します



東北物産展の様子



無事完売しました



着ぐるみでイベントをアピール



子どもたちに大人気



たくさんの学生が関わってくれました

7. 八王子市役所でのパネル写真展

実施日：2016年3月18日（金）～28日（月）

場所：八王子市役所・八王子駅南口総合事務所内

内容：八王子市社会福祉協議会主催による「被災地復興写真展 一明日へのチカラ」
での大学活動パネル展示

主催：八王子市社会福祉協議会

〈活動の様子〉



学 び 編

7. 入門

1. ボランティア講座

【多摩】

(1) 公務員になりたい人のための連続・ボランティア講座

実施日：6月25日（木）16時40分～18時10分
会場：多摩キャンパス 6103教室
参加者：64人（学生59、講師2、職員3）
内容：公務員が必要なボランティア精神、ボランティアの4原則、ボランティアの目的や意義、社会と自分、ボランティアマナー、情報の探し方
講師：大村国博氏（日野市役所 企画部地域協働課）
宮崎雅也氏（日野社会福祉協議会 日野市ボランティア・センター）
主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- ボランティアは自分の中で漠然としたものだったが、クリアになり、やる気がでてきた
- ボランティアの探し方や意義を聞いてやりたくなった
- ボランティアをする意欲が高まった。これからの時代に公務員に求められるものがわかった
- ボランティアは好きなことをやれば良いということがわかった

〈講座の様子〉



講座の様子



ボランティア経験者からのコメント



講師のお二人



熱心に聞き入ります

(2) ボランティア体験×学び 振り返りワークショップ

実施日：10月8日（木）16時40分～18時10分
 会場：多摩キャンパス 1410号室
 参加者：41人（学生36、教職員5）
 内容：自身のボランティア体験を振り返り、今後の活動へのヒントとする
 主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- 全然分野の違うボランティア活動でも、抱えている課題などは共通することがわかって有意義だった
- 様々な視点でのボランティア活動の効果・意義が可視化できてよかった
- これまでは意識できていなかった新たな視点を加えながら、もう一度初心に帰って活動していきたい

〈講座の様子〉



先輩から振り返りのコツを聞きます



個人ワークの様子



グループワークの様子



連続・ボランティア講座修了者への表彰

(3) 春休み、一步踏み出したいアナタのためのボランティア講座

- 実施日：2016年2月2日（火）13:30～15:30
 会場：多摩キャンパス 6508教室
 参加者：26人（学生16、地域8、職員2）
 内容：ボランティアの目的や意義、社会と自分、ボランティアマナー、情報の探し方、先輩たちの体験談や福祉施設での現場で感じていることなど、ワールドカフェ形式で話をする
 主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- ボランティア講座では、普段なかなか聞くことのない貴重なお話を伺うことができました。ボランティアに対する視点の違いや皆様の様々な想いを知ることができ、自分の世界が広がった気がします。また、慣れないことではありましたが、自分の経験を語るというのは、何を考えてどんな行動を取って来たかを振り返る意味でもよい経験になりました。ありがとうございます。今回の様なイベントがこれからの学生の力になることを祈っております。

（経済学部4年 羽子田直人）

- 私は、春休みにするボランティアを申込に行くと、「この後講座があるから一緒にどう？」と誘われたのがきっかけで参加した。正直最初は、海外や福祉にはあまり興味がないと思っていたが、特に予定もなかったので参加してみた。するとこれが功を奏した。中東やドイツのボランティアと普段では聞くことのできないボランティアの話も聞くことができたし、福祉ボランティアに関わっている方も「私たちは一人で生きていきたいという人を少しでも補助していきたいのです」という言葉に深く胸をうたれた。

最後に、この講座に参加した複数の学生と親しくなり、終了後はセンターを訪れて春休みにするボランティアについて2時間くらい話した。このような新しい学びとつながりを創ることができ、本当に良かった。

（文学部2年 花井奎太）

〈講座の様子〉



4年生の先輩に話をしてもらいました



先輩の体験談に引き込まれます



グループに分かれて話が膨らみます



地域の方々にも来ていただきました

【後楽園】**(1) 前期 理工学部 ボランティアオリエンテーション**

- 実 施 日：7月6日（月）、7日（火）、9日（木）各9時～10時30分
会 場：後楽園キャンパス 5332教室
参 加 者：7月6日は52人、7月7日は69人、7月9日は43人
内 容：ボランティア活動とボランティアセンターについて理工学部の大学生に知ってもらうために、オリエンテーション枠内の1コマで実施
講 師：7月6日は金森俊一氏（NPOカタリバ 文京区青少年施設b-lab 副館長）
7月7日は松元雄基氏（NPOカタリバ 文京区青少年施設b-lab ディレクター）
7月9日は瀬川知孝氏（NPOカタリバ 文京区青少年施設b-lab サブディレクター）
主 催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- ボランティアは高尚な人がすると思っていたが、そうではないことが分かった
- とても楽しい話だった。遅刻したことを後悔している
- 知らない世界を知ることができて良かった



(2) 後期 理工学部 ボランティアオリエンテーション

- 実施日：10月5日（月）、6日（火）、7日（水）各9時～10時30分
会場：後楽園キャンパス 5332教室
参加者：10月5日は26人、10月6日は65人、10月7日は23人
内容：ボランティア活動とボランティアセンターについて理工学部の大学生に知ってもらうために、オリエンテーション枠内の1コマで実施
講師：10月5日は齋藤祐輔氏（NPO法人底上げ 代表）
宮内康之氏（明治学院大学法学部3年）
10月6日は直井友樹氏（NPO法人NICE 中長期部門）
10月7日は山田将平氏（NPOカタリバb-lab）
主催：中央大学ボランティアセンター



5日齋藤氏



6日直井氏



7日学生と山田氏

2. ボラカフェ

- 実施日：下記参照 時間はお昼休み
 会場：6号館教室、グループカウンセリングルーム
 内容：お昼休みにボランティアについて気軽に話せる場として今年度から新たにスタートし、6月から1月にかけて14回実施。後期からは、学生が自分たちの活動を通して感じたことや学んだことを発表する場として開催した。
 主催：中央大学ボランティアセンター

日程	テーマ	参加人数
6月23日	ボランティアとは??何のためにするもの??	9人
6月25日	ボランティアを始めよう!ボランティアマナーと情報の探し方	10人
6月30日	ボランティアとは??何のためにするもの??	17人
7月2日	ボランティアを始めよう!ボランティアマナーと情報の探し方	12人
10月7日	環境	4人
10月14日	子ども・福祉	7人
10月21日	被災地支援	4人
10月28日	まちづくり	3人
11月11日	避難所ボランティアから学んだこと ~台風18号水害の被災地より presented by 茂木貴宏 (文3)	8人
11月18日	水を巡るエトセトラ ~世界的規模での水問題 presented by 三原晋 (法4)	3人
11月25日	FLP佐々木ゼミ主催 中央大学リユース市の仕組み教えます presented by 稲本巨佑 (商2)	7人
12月2日	猫の里親探しの今日的事情とは ~保護猫カフェボランティアやっています presented by 戸田寿希也 (文3)	6人
12月18日	ボランティアを始める前に知っておいて欲しいこと	4人
2016年 1月13日	僕たちが建てる家は、家以上のものかもしれない Presented by 下村真 (商2)	9人
	合計14回	103人

〈参加者の声〉

- 毎回新たな気づきをくれる時間でした。また参加したいです。
- 自分の活動を発表する場があってありがたいです。自分の考えをまとめられる機会になりました。

〈活動の様子〉



お茶やお菓子を食べながら話します



活動している学生の体験談も



自分の活動で感じたことを発表



真剣に聞き入ります

3. 災害救援ボランティア講座

実施日：8月5日（水）、6日（木）、7日（金）各9時～17時
 会場：多摩キャンパスCスクエア中ホール 5日（水）午後、立川防災館
 参加者：29人（うち1名は体調不良のため、1日目のみの参加）
 内容：8月5日午前：講義 出火防止と初期消火、午後：立川防災館での災害疑似体験
 8月6日終日：上級救命技能講習
 8月7日午前：講義 災害救援ボランティアの基本、災害と防災対策の基本
 午後：演習 災害時の決断力、災害時のリーダーシップと安全衛生等
 主催：中央大学学生部
 協力：災害救援ボランティア推進委員会

〈参加者の声〉

- ・3日間勉強したことで災害救援についての方法はまだ慣れていないところがあると思うが、前の何も知らなかった自分と比べて災害に遭う時にまず慌てず、学んだ対応措置を思い出して行動できると思う。そして、家族や周りの人たちに伝えたいと強く思った。
- ・ボランティアに興味はあったが実際に行動に移すことがなかった私にとって、現地に足を運ぼうと思った良い契機になったと思う。次は現地でより多くのことを学ぼうと思う。
- ・これまで何となくで通していた知識について再確認するとともに、改めてこのような活動の大切さや必要性というものを感じることができた。一人ひとりの対策と行動から、共に一般の人たちで助け合うという我々一般人の行動が非常に大事になるということを強く感じた。このような自助と共助を周りにも発信していきたい。

〈講座の様子〉



消火器を使った消火活動（立川防災館）



AEDを使った心肺蘇生法



乳幼児の心肺蘇生法



グループワークの様子

8. スキルアップ

1. ミニシンポジウム「都市計画課とNPOの視点から 阪神淡路（御蔵通）と東日本大震災（三陸リアス沿岸） ～生活・生業・コミュニティ再建とファシリテーション」

日 時：6月26日（金）13時30分～16時30分

会 場：多摩キャンパス6103教室

講 師：内山征氏（都市計画家協会理事、（株）アルメックVPI）
宮定章氏（認定NPO法人まち・コミュニケーション代表理事）

内 容：東日本大震災から4年3ヵ月が経過し、報道も激減しているなか、現場に通い、
現地と伴走する都市計画家やNPOスタッフの視点から、現地の状況や課題につ
いて話をいただいた。また、現地との関わりの中で講師が行っている「ファシリ
テーション」の意味、ノウハウを教示いただいた。谷下正義・中央大学工学部
教授からも人口減少や住宅再建の遅れなどに対する研究発表がなされた。

参 加 者：15人

共 催：FLP谷下・中澤ゼミ／中央大学ボランティアセンター

〈会場の様子〉



第2部はトークライブ



講師の宮定章氏



講師の内山征氏



谷下先生

2. 講座「傾聴講座」(1)

- 実 施 日：6月27日(土) 13時～17時
 会 場：多摩キャンパス 学生部委員会室
 参 加 者：13人(学生12、職員1)
 講 師：NPO法人パートナーシップアンドリスニングアソシエーション代表
 後庵正治氏
 内 容：学生が、今後のボランティア活動における高齢者施設や仮設住宅等での傾聴ボランティアや、幅広い年代の方々とコミュニケーションを円滑にする際などに生かすことを目的とする内容。
 主 催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- 講座を通して「聴く」ことが「聞く」ことに比べていかに大変で難しいことかを学びました。「相手を尊重してすべて受け止める姿勢」を普段の日常生活の会話の中で意識することで、これまでとは違った相手の話を聞くことができ、人間関係も深まるかもしれないと思いました。心理学専攻でもあるので、臨床など大学の勉強とも結び付けて、傾聴というスキルを磨いていきたいと思います。(文1・女子学生)
- 後庵先生の傾聴講座を受けるのは昨年11月以来、2度目だが、ロールプレイの中で、自分の成長を感じることもできたし、まだ、自分が出来ていないことを新たに気づく機会となりました。「何かをしてあげねばならない」「何も相手にできていなくて、自分はだめなのではないか」と悩んでしまっていたが、傾聴の基本姿勢の「受容(何もしなくていい。ただ相手を受け止めればいい)」ということを知り、あえて何もしないことも必要なのだと思えました。チーム内で話を聞くとときや、現地の方にお話をいただくときに、より不快なく話をしてもらえるようにしていきたいです。(法2・男子学生)
- 講座でも最も印象に残っていることは「相手のことを尊重し、相手のことを受け入れる」という姿勢です。大学のゼミではグループディスカッションで相手に激しく反論したり、自分の主張をはっきりさせたりすることに取り組んできましたが、傾聴の姿勢を取り入れて、自分の意見を言う前に「まずは相手の意見を理解すること。冷静に相手の話を聞くこと」につとめることで、よりディスカッションの内容も深まっていくと思いました。夏に活動に行く前に練習を積み重ねて、自分自身に傾聴の姿勢を染み込ませたいと思います。(法2・女子学生)

〈講座の様子〉



後庵正治氏



ロールプレイの様子



集合写真

3. 講座「傾聴講座」(2)

- 実施日：12月6日(日) 13時～17時
会場：多摩キャンパス 学生部委員会室
参加者：12人(学生11、職員1)
講師：NPO法人パートナーシップアンドリスニングアソシエーション代表
後庵正治氏
内容：冬休みのボランティア活動を行う前に、学生が「傾聴」のスキルを身に付け、活動に生かすことを目指した。「傾聴」の基本的な考えのほか、ロールプレイを通して、トレーニングした。
主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- 東北での活動を振り返るだけでなく、自分の日常的な会話の在り方を考える機会となった。日常、私は“聴かない方”の会話ばかりを行ってきたように思う。自分の興味関心に関する話を振り、相手がいま何を話したいかなどはあまり考えずに過ごしてきた。また共通の話題を見つけたとしても自分の主観的判断に基づいた話ばかりしてしまって、住民がお話をするという機会を奪っていたかもしれない。それは、相手との間の沈黙が怖かったからだろう。そんな自分にとって「傾聴」という考え方とテクニックは新鮮だった。一回の講座で完全に身に付けられるものではないので、日々の積み重ねや、被災地に行ったときの住民の方々との会話の反省を通して少しずつでも身に付けていきたい。(法1・男子)
- 半年前も講座を受けた。その間メンバーミーティングをする時に相手の要旨が読み取れない場合は質問をしていたが、その時について語気が強くなっていたが、今回の講座を受けてみて、やはりその時は傾聴の姿勢ができていなかったのだと気づいた。今回は相手の意図や伝えたいことを読み取り、それを自分の言葉で言い換えながら相手に確認をとることを意識した。練習のなかで相手から「伝えたいことと一致していた」と言ってもらえて自信がついた。課題として相づちのバリエーションが少ないと指摘されたので今後は改善していきたい。(法2・男子)
- 昨年度も傾聴講座を受講し、目から鱗が落ちるような気持ちになり、その後、実践をしていた。しかし人の話を聞く方に専念するあまり、苦しい気持ちになっていた。今回先生にそのことを相談し、普通の会話と傾聴の切り替えが必要だということが分かった。これからもうまく傾聴のスキルを使いながら、コミュニケーション力を磨いていきたい。(文3・女子)

〈講座の様子〉



後庵正治氏



ロールプレイの様子



集合写真

4. 講座「被災地の子どもたちのケアについて」

- 日 時：7月24日（金）16時40分～18時10分
 会 場：多摩キャンパス 学生部委員会室
 講 師：鈴木宏哉氏（順天堂大学 スポーツ健康科学部 准教授）
 参 加 者：9人（学生7人、職員1人、教員1人）
 内 容：被災した宮城県牡鹿郡女川町で子どもたちの運動支援「アクティブクラブ」を行っている鈴木准教授をお招きし、子どもたちの心と体の変化や子どもへの関わり方について学んだ。
 主 催：中央大学ボランティアセンター



鈴木宏哉准教授



集合写真

5. はまらいんやミニシンポジウム

- 実施日：2016年1月30日（土）13時30分～18時30分
会場：多摩キャンパス学生部会議室
参加者：17人（うちOB/OG3名、教職員3名）
内容：被災地学生支援団体「はまらいんや」の創設者や初期メンバーに来てもらい、「神戸の教訓を東日本大震災へ 一面瀬中仮設住宅 初期支援を振り返るミニシンポジウム」を開催。これまでの面瀬中学校仮設住宅と支援活動の歩みを振り返り、故黒田裕子さんやNPOスタッフの皆さんから教え育てていただいたことを含め、後輩たちに共有する時間とした。
主催：中央大学ボランティアセンター

〈講座の様子〉



まずは目的を共有



初期メンバーのOB/OGさん



先輩たちの話に聞き入ります



集合写真

資料編

9. 表彰状受賞学生

(1) 信濃育英会 「第21回明るい社会に貢献する奨学制度」

受賞 黒川涼香（法学部3年生）

受賞 稲吉華那（理工学部3年生）



受賞した稲吉（左）、黒川（右）



懇親会で受賞学生を代表してのスピーチ

(2) 社会福祉法人日野市社会福祉協議会 「第31回福祉のつどい」

表彰状受賞「チーム防災」

メンバー：佐藤広基（法学部3年生）、中村亮士（商学部3年生）、小山景子（総合政策部3年生）、西沢栞（総合政策部3年）



表彰式の様子。西沢（左）、中村（中）、佐藤



授与式

10. ボランティアセンター 利用集計

ボランティアセンター相談者統計（人）

月	相談者	男	女	法	経	商	文	総	理	不	1	2	3	4	他	震災	教育	福祉	国際	構内	地域	他
4月	107	52	55	34	24	13	23	11	1	1	67	34	0	3	3	23	4	1	19	2	2	15
5月	40	10	30	18	8	7	3	1	1	2	23	1	8	7	1	12	9	4	17	4	7	10
6月	111	36	75	48	16	5	25	7	0	10	33	42	26	4	6	20	18	8	17	3	21	6
7月	117	58	59	58	24	7	15	3	1	3	26	34	50	4	3	10	17	6	8	3	23	9
8月	18	11	7	13	0	0	0	2	0	3	2	3	12	0	1	1	0	0	1	0	0	0
9月	71	29	42	32	5	12	17	5	0	0	17	25	16	12	1	3	3	2	4	2	2	8
10月	145	63	82	81	26	14	18	2	2	2	56	49	30	6	4	5	4	4	2	3	11	5
11月	89	41	48	53	4	11	18	2	0	1	35	29	20	4	1	2	1	1	5	0	3	2
12月	126	64	62	63	15	18	22	2	5	1	56	36	27	5	2	5	1	1	5	1	7	4
1月	127	69	58	70	6	15	25	8	0	3	51	36	32	7	1	3	5	2	2	0	4	2
2月	79	34	45	37	16	8	12	0	4	2	47	15	12	2	3	2	0	0	0	0	1	4
3月	72	33	39	23	18	8	18	5	0	0	49	17	1	3	2	1	1	1	1	1	2	1
合計	1102	500	602	530	162	118	196	48	14	28	462	321	234	57	28	87	63	30	81	19	83	66

ボランティアセンタールーム利用記録

月	利用件数(件)	利用日数(日)	利用時間(分)	利用人数(人)
4月	23	15	1620	62
5月	42	20	2818	187
6月	31	19	2319	136
7月	15	13	1200	83
8月	8	4	756	33
9月	6	4	570	25
10月	26	19	2196	145
11月	29	19	2658	148
12月	18	13	1536	114
1月	16	11	1458	68
2月	11	10	2016	69
3月	11	11	1600	54
合計	236	158	20747	1124
月平均	19.7	13.2	1728.9	93.7

ボランティアセンタールーム本貸出記録

年度	冊数
2013年度	48冊
2014年度	118冊
2015年度	51冊

11. ボランティアセンターの取組記録

2015年4月1日～2016年3月31日

日付	内容	場所	参加者等
4/1	ボランティアセンター運営委員会設置	多摩キャンパス ボランティアセンター (6号館地下1階学生課内)	ボランティアセンタースタッフ体制強化 コーディネーター、専従事務員各1名増員
4/2～6	学生団体新歓ブース設置	多摩キャンパス	新入生勧誘
4/15～17	被災地支援学生団体ネットワーク活動説明会	多摩キャンパス (6104教室)	主催：学生団体 参加者合計約80人 (※アンケート回答者65名)
4/16	新入生被災地スタディーツアー@女川町 理工学部説明会	後楽園キャンパス (6426教室)	参加学生5名 職員1名
4/20	新入生被災地スタディーツアー@女川町 説明会	多摩キャンパス (6104教室)	参加学生約45名 職員1名
4/21	第1回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	参加学生3名 職員4名
4/22	第1回ボランティアセンター運営委員会	多摩キャンパス ボランティアセンター (6号館地下1階学生課内)	中澤センター長、委員6名、職員3名
4/23	2015年度初回学生団体ミーティング	多摩キャンパス (6408教室)	参加学生20名、中澤センター長 運営委員2名、職員4名
5/1～30	ネパール大地震被災者支援寄付	多摩キャンパス ボランティアセンター (6号館地下1階学生課内)	公益財団法人日本ユニセフ協会へ寄付
5/9～10	ひの新撰組まつり	日野市、高幡不動尊周辺	参加学生17名
5/11, 15	新入生被災地スタディーツアー@女川町 事前学習会 (1)	11日 多摩キャンパス (6602教室) 15日 多摩キャンパス (5603教室)	チーム女川、スタディーツアー参加者
5/12	新入生被災地スタディーツアー@女川町 理工学部事前学習会 (1)	後楽園キャンパス (E3102教室)	ボランティア入門 スタディーツアー参加者
5/12～14	被災地支援学生団体写真展	多摩キャンパス 中央図書館1階 展示スペース	主催：学生団体
5/13	第2回ボランティアセンター運営委員会	多摩キャンパス ボランティアセンター (6号館地下1階学生課内)	中澤センター長、委員6名、職員6名
5/18, 22	新入生被災地スタディーツアー@女川町事前学習会 (2)	18日 多摩キャンパス (6602教室) 22日 多摩キャンパス (5603教室)	チーム女川、スタディーツアー参加者
5/18	第2回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	参加学生2名 職員1名
5/19	新入生被災地スタディーツアー@女川町 理工学部事前学習会 (2)	後楽園キャンパス (6425教室)	スタディーツアー参加者
5/25, 29	新入生被災地スタディーツアー@女川町事前学習会 (3)	25日 多摩キャンパス (6602教室) 29日 多摩キャンパス (5603教室)	スタディーツアー参加者
5/26	新入生被災地スタディーツアー@女川町 理工学部事前学習会 (3)	後楽園キャンパス (6425教室)	スタディーツアー参加者
5/30	クリーン作戦2015 春の陣	多摩キャンパス周辺 (明星大学VCとの協働)	参加学生36名(含、明星大12名) 職員3名(含、明星大1名)
5/30～31	夏季ボランティア事前調査 学生支援団体「面瀬学習支援」	宮城県気仙沼市	参加学生8名
6/5～7	新入生被災地スタディーツアー@女川町	スタディーツアー 宮城県牡鹿郡女川町	参加学生24名(内、学生スタッフ7名) 引率職員2名
6/8 12	新入生被災地スタディーツアー@女川町事後学習会 (1)	8日 多摩キャンパス (6408教室) 12日 多摩キャンパス (5603教室)	チーム女川、スタディーツアー参加者
6/9	新入生被災地スタディーツアー@女川町理工学部事後学習会 (1)	後楽園キャンパス (6425教室)	スタディーツアー参加者
6/11	第3回ボランティアセンター運営委員会 (臨時)	多摩キャンパス ボランティアセンター (6号館地下1階学生課内)	中澤センター長、委員3名、職員2名
6/14	第25回 みんなの遊・友ランド	日野市市民の森ふれあいホール	参加学生6名 職員1名
6/15, 19	新入生被災地スタディーツアー@女川町事後学習会 (2)	15日 多摩キャンパス (6408教室) 19日 多摩キャンパス (5603教室)	スタディーツアー参加者

日付	内容	場所	参加者等
6/16	被災地支援学生団体「はまらいんや」 第1回説明会	ボランティアセンタールーム	主催：学生団体
6/16	新入生被災地スタディーツアー@ 女川町事後学習会（2）	後楽園キャンパス（6425教室）	スタディーツアー参加者
6/16	第3回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	参加学生1名 職員1名
6/17 ～7/1	復興支援インターン写真展 （2014年度春季ボランティア@女 川町）	多摩キャンパス ヒルトップ2F	主催：2014年度復興インターン生
6/18, 22, 24	復興支援インターン&夏季集中ボ ランティア説明会	多摩キャンパス（6103教室）	参加学生18名 職員2名
6/19	被災地支援学生団体「はまらいん や」 第2回説明会	ボランティアセンタールーム	主催：学生団体
6/22	小宮法学部教授の授業でのプレゼ ンテーション	多摩キャンパス	プレゼンター：松本コーディネーター
6/23, 25	第1回 ボラカフェ ～ナツ編～ 「ボランティアとは?何のためにす るの?」	多摩キャンパス（6104教室）	参加学生19名 職員1名
6/25	第1回 公務員になりたい人のた めの連続・ボランティア講座	多摩キャンパス（6103教室）	ゲスト：大村国博氏（日野市役所企画部 地域協働課）、宮崎雅也氏（日野市社会 福祉協議会 日野市ボランティアセン ター） 参加学生59名 職員2名
6/26	東北まちづくり講座 「都市計画家/NPOの立場からみ る阪神淡路（御蔵通）と東日本大 震災（三陸）-生活・生業・コミュ ニティ再建とファシリテーション」	多摩キャンパス（6103教室） 共催：FLP谷下・中澤ゼミ/ボランティ アセンター	講師：宮定章氏（NPO法人まち・コミュ ニケーション）、内山征氏（都市計画課）
6/27	ボランティア傾聴講座	多摩キャンパス ボランティアセンター （6号館地下1階学生課内）	講師：後庵正治氏（NPO法人パートナ シップアンドリスニングアソシエーシ ョン理事長） 参加学生12名 職員1名
6/30 7/2	第2回 ボラカフェ ～ナツ編～ 「ボランティアを始めよう!ボラン ティアマナーと情報の探し方」	多摩キャンパス（6104教室）	参加学生29名 職員1名 日野市社会福祉協議会職員2名
7/1	ボランティア団体登録制度導入	多摩キャンパス ボランティアセンター （6号館地下1階学生課内）	当センターの「ボランティア情報の取扱 に関する方針」に基づく活動団体を登録。 登録団体のボランティア募集情報を更新 時迄（原則3年間は有効）对学生に提供。
7/1～11	スタディーツアー活動報告写真展 「女川の瞬間」	多摩キャンパス ヒルトップ2F	主催：学生団体
7/4～6	夏季ボランティア事前調査 学生団体「はまらいんや」	宮城県気仙沼市面瀬	参加学生1名
7/5	女川物産展（さんま焼き）	新ゆりグリーンプラザ	チーム女川 参加学生2名
7/6, 7, 9	ボランティア入門講座（オリエン テーション前期）	後楽園キャンパス	参加学生 164名 学生スピーカー： 被災地スタディーツアー参加学生、被災 地支援団体・チーム女川所属学生 ゲストスピーカー： 金森俊一氏（認定NPO法人カタリバ b-lab副館長）、松元雄基氏（認定NPO 法人カタリバ b-labディレクター）、瀬 川知孝氏（認定NPO法人カタリバ b-labサブディレクター）
7/10	第1回 南平高等学校での「HUG」 授業 （避難所運営ゲーム）	東京都立南平高等学校	第1学年生徒対象 男子176名、女子150名 計326名 中央大学学生2名、職員1名
7/22	第4回ボランティアセンター運営 委員会	多摩キャンパス ボランティアセンター （6号館地下1階学生課内）	中澤センター長、委員5名、職員4名
7/22	東京6大学ボランティアセンター 連絡協議会	法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎 5F（529・530会議室）	6大学：法政、明治、立教、早稲田、中 央

11. ボランティアセンターの取組記録

日付	内容	場所	参加者等
7/24	講演 「被災地における子どもの身体活動支援」	学生部委員会室	講師：鈴木浩哉教授（順天堂大学） 対象：被災地支援学生団体
8/1～2	日野市立三沢中学校地区育成会サバイバルキャンプ（三沢中地区育成会）	日野市立三沢中学校	参加学生1名
8/3～14	大学ボランティア写真展	日野市役所	共催：明星大学
8/5, 6, 7	災害救援ボランティア講座	多摩キャンパス&立川防災館	主催：学生課、災害救援ボランティア推進委員会 後援：総務省消防庁・NHK
8/4～9/1	夏季集中ボランティア活動	陸前高田市、石巻市雄勝町、巨理郡山元町、気仙沼市、石巻市牡鹿半島	主催：大学間連携災害ボランティアネットワーク 参加学生20名（中央大学）
8/16～9/2	復興支援インターン	宮城県牡鹿郡女川町	主催：復興大学災害ボランティアステーション 共催：実施市町の商工会議所・商工会、復興庁宮城復興局、大学間連携災害ボランティアネットワーク他 参加学生4名 職員2名
8/29～30	日野市立七生中学校 防災宿泊訓練	日野市立七生中学校	参加学生3名 職員1名
8月9月	2015年度夏季ボランティア学生団体 ・はまらいんや（8/6-12） ・面瀬学習支援（8/16-24, 9/24-25） ・チーム次元（8/28-9/1） ・はまぎくのつぼみ（8/4-8, 9/7-11）	気仙沼市面瀬、大島、宮古市 ★電通育英会助成金 ★日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo） ★住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム	参加学生 約50名
9/10～11	第9回大学ボランティアセンター全国フォーラム2015（新潟）	新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部 4大学メディアキャンパス	テーマ：学生を地域、社会へと誘うモチベーションを探る 職員1名
9/12	住友商事ユースチャレンジ・フォーラム2015	TKPガーデンシティ仙台	助成金対象団体による中間報告会 中央大学被災地支援学生団体を代表し、[面瀬学習支援]より代表1名が参加
9/19	大豆プロジェクト	七ツ塚ファーマーズセンター	参加学生4名 職員1名
9/25～11/6	台風第18号による大雨等災害義援金	多摩キャンパス ボランティアセンター（6号館地下1階学生課内）	社会福祉法人中央共同募金へ寄付
9/26	水害ボランティアの学生引率・現地視察	茨城県常総市	日本財団学生ボランティアセンター Gakuvo主催
9/27	日野市南平児童館における炊き出し訓練	みなみだいら児童館ぶらねっと	参加学生4名 職員1名
9/27	日野市平山苑地域におけるHUG訓練	平山苑自治会	日野市社会協議会 [大学生×地域＝防災力UPプロジェクト]
10/4	みんなといっしょの運動会	多摩キャンパス第一体育館アリーナ	参加学生6名 職員1名
10/5, 6, 7	ボランティア入門講座（オリエンテーション後期）	後楽園キャンパス	ゲストスピーカー： 齊藤祐輔氏（NPO法人底上げ 副理事長） 直井友樹氏（NPO法人NICE 中長期ボランティア事業部） 金森俊一氏（認定NPO法人カタリバb-lab副館長）
10/6	明星大学夏季ボランティア報告会	明星大学	参加学生1名 職員1名
10/7	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリングルーム	参加学生4名
10/8	ボランティア体験×学び 振り返りワークショップ	多摩キャンパス1410号室	参加学生36名 教職員5名
10/10～11	みなと区民まつり	港区芝公園周辺	参加学生8名 職員1名
10/10	中澤ボランティアセンター長講義	多摩キャンパス ボランティアセンタールーム	参加学生5名 職員1名

日付	内容	場所	参加者等
10/13	第4回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	参加学生3名 職員1名
10/14	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリ ングルーム	参加学生7名
10/16	2014年度復興支援インターン報告 会	早稲田大学	発表学生1名(2014インターン生) 職員1名
10/18	まちづくり市民フェア2015	日野市市民の森ふれあいホール	主催：まちづくり市民フェア実行委員会 事務局 参加学生21名 職員2名
10/21	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリ ングルーム	参加学生4名
10/21～26	ボランティア活動写真展2015	多摩キャンパス 中央図書館1階 展示スペース	出展 被災地支援学生団体 来場者 約200名
10/24	ユギ里山ファーム	八王子市堀之内	参加学生3名 職員1名
10/25	防災イベント&ミニバザー(東北 物産展)	社会福祉法人夢ふうせん	参加学生6名 職員1名
10/28	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリ ングルーム	参加学生3名
10/29 ～11/1	白門祭写真展	多摩キャンパス	復興支援インターン 写真展・物産展 チーム女川 女川物産展
10/31 ～11/1	被災地支援学生団体「面瀬学習支 援」秋季活動	宮城県気仙沼市面瀬地区	参加学生4名
11/7	ボランティア学生の体験談発表会 (キャンパスライフ体験会)	多摩キャンパス(1号館 1406)	参加者23名
11/11	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリ ングルーム	参加学生8名
11/13	学内開催「避難所運営ゲーム HUG」体験	多摩キャンパス・グループカウンセリ ングルーム	参加学生12名
11/14	ひらやまBOSAIウォークラリー	平山小学校	参加学生9名
11/16	第5回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	参加学生5名 職員1名
11/18	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリ ングルーム	参加学生3名
11/21	大豆プロジェクト	七ツ塚ファーマーズセンター	参加学生2名 職員1名
11/21	黒田裕子さん追悼フォーラム	神戸まちづくり会館	参加学生3名
11/23～27	岩手復興支援物産展	中央大学生協同組合 1F店舗	主催：被災地支援学生団体(はまぎくの つぼみ)
11/25	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリ ングルーム	参加学生7名
11/28	南平小学校防災体験	南平小学校	参加学生2名
11/28～30	被災地支援学生団体「はまらいん や」秋季活動	宮城県気仙沼市	参加学生3名
11/29	クリーン作戦	多摩キャンパス周辺	参加学生17名 職員4名 東中野自治会・谷津入支部の皆さん
12/2	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリ ングルーム	参加学生6名
12/5	中央大学教育力向上推進事業報告 会	Cスクエア 小ホール	来場者77名
12/6	ボランティア傾聴講座	多摩キャンパス ボランティアセンター (6号館地下1階学生課内)	講師：後庵正治氏(NPO法人パートナ シップアンドリスニングアソシエーシ ョン理事長) 参加学生11名 職員1名
12/10～12	三陸のものマルシェ(女川復興物 産展)	JR上野駅 中央改札外グランドコン コース	主催：東日本旅客鉄道(株)、(株)ジェイア ール東日本商事 参加学生3名
12/12	中央大学杉並高等学校 東北研修 事前学習「大学生に学ぶ ボラン ティア活動勉強会」	中央大学杉並高等学校	スピーカー：チーム女川1名 はまぎくのつぼみ2名 職員1名

11. ボランティアセンターの取組記録

日付	内容	場所	参加者等
12/12 ～13	平成27年度大学間連携災害ボランティアシンポジウム	東北学院大学 土樋キャンパス	共催：復興大学災害ボランティアステーション/大学間連携災害ボランティアネットワーク/東北学院大学災害ボランティアステーション 参加学生10名 職員1名
12/15	第6回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	参加学生5名 職員1名
12/15	日野市災害ボランティア・センター立ち上げ訓練	ひの煉瓦ホール	参加学生1名 教職員2名
12/18	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリングルーム	参加学生4名
12/18	学内開催「避難所運営ゲームHUG」体験	多摩キャンパス・グループカウンセリングルーム	参加学生9名
12月	2015年度冬季ボランティア学生団体 ・はまらいんや (12/22-1/2) ・面瀬学習支援 (12/23-12/28)	気仙沼市面瀬、牡鹿郡女川町 ★電通育英会助成金 ★住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム	参加学生約30名
2016年 1/10	ユギ里山ファーム	八王子市堀之内	参加学生8名 職員1名
1/13	ボラカフェ	多摩キャンパス・グループカウンセリングルーム	参加学生9名
1/17	日鉱住宅防災会勉強会	南部センター	参加学生2名 職員1名
1/28	大学地域間連携首都直下地震対策フォーラム	専修大学神田校舎1号館	職員1名
1/30	はまらいんや ミニシンポジウム	多摩キャンパス ボランティアセンター (6号館地下1階学生課内)	参加学生11名 OB、他4名 職員2名
2/2	春休み、一歩踏み出したいアナタのたまのボランティア講座	多摩キャンパス 6508教室	参加学生16名 職員2名
2/4 ～11	大学生ボランティア活動報告&防災イベント	イオンモール多摩平の森 ★電通育英会助成金	参加大学：中央大学、明星大学、法政大学、実践女子大学、首都大学東京、東京薬科大学 協力：日野市ボランティアセンター 後援：日野市役所 来場者3,223名
2/4	中央大学文学部教授会でのプレゼンテーション	多摩キャンパス文学部	ボランティアセンター紹介 学生ボランティアへの支援金アピール
2/11	災害図上訓練	日野市緑が丘自治体	参加学生2名 職員1名
2/16 ～18	気仙沼スタディーツアー (2017年度活動事前調査他)	宮城県気仙沼市陸前高田、面瀬地区 ★電通育英会助成金	主催：ボランティアセンター 参加学生10名 職員3名
2/21 ～23	神戸スタディーツアー	兵庫県神戸市 ★電通育英会助成金	主催：ボランティアセンター 講師：村井雅清氏 (被災地NGO協働センター 顧問)、宇都幸子氏 (NPO法人阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク 代表) 宮定 章氏 (認定特定非営利活動法人まち・コミュニケーション 表理事) 参加学生6名 職員3名
2/27	ユギ里山ファーム	八王子市堀之内	参加学生8名 職員1名
2/28 ～3/5	復興支援インターン	宮城県牡鹿郡女川町	主催：復興大学災害ボランティアステーション 共催：実施市町の商工会議所・商工会、復興庁宮城復興局、大学間連携災害ボランティアネットワーク 参加学生4名 教職員2名
2/28	「黄色いハンカチ」訓練	平山苑自治会	参加学生1名
2/29	首都直下地震時の災害ボランティア活動 連携訓練	飯田橋セントラルプラザ17階 消費生活総合センター	主催：東京都災害ボランティアセンター アクションプラン推進会議 参加職員2名

日付	内容	場所	参加者等
3月	2015年度春季ボランティア 学生団体 ・はまらいんや (3/8-12) ・面瀬学習支援 (3/23-31) ・チーム女川 (3/24-17) ・はまぎくのつぼみ (3/14-16)	宮城県気仙沼市面瀬地区、牡鹿郡女川 町、岩手県宮古市 ★電通育英会助成金 ★日本財団学生ボランティアセンター (Gakuvo)	参加学生50名
3/6	第13回ボランティア交流会	新町交流センター	職員2名
3/11	防災講座 「東日本大震災から5年 あのと き あなたは・・・」	日野市中央公民館	主催：日野市中央公民館 講師：松本コーディネーター)、藤田豊 氏 (都立南平高校教員)
3/12	第31回福祉のつどい表彰 受賞者 中央大学「チーム防災」	日野市民会館 ひの煉瓦ホール	主催:日野市社会福祉協議会
3/12	ユギ里山ファーム	八王子市堀之内	参加学生8名 職員1名
3/13	キャナル・マーケット	日野駅周辺	参加学生1名
3/18 ~28	八王子市役所 パネル写真展	八王子駅南口事務所ホール	主催:八王子市社会福祉協議会

以上

2016年3月31日現在までのボランティアに関する活動記録

12. 協力・連携・助成金

(1) 協力・連携

〈順不同・敬称略〉

大学連携間災害ボランティアネットワーク（拠点校：東北学院大学）※2011年加盟
阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長 黒田裕子（故人）
阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク事務局 宇都幸子
面瀬中学校仮設住宅自治会 尾形修也会長
藤田アイ子
気仙沼市立面瀬小学校
気仙沼市立面瀬中学校
上沢三区自治会・婦人部
元気仙沼市議会議員 佐藤輝子
気仙沼市議会議員 今川悟
面瀬ふれあい広場準備会 佐藤正儀会長、熊谷涼美枝副会長
会員 熊谷幸男、小野寺孝雄、児島健次、熊谷力市、キングスビレッジ
面瀬地区まちづくり協議会長 藤田正人
面瀬地域ふれあいセンター 中井充夫館長
一般社団法人プレイワーカーズ 神林俊一、廣川和紀、遠藤みゆ
気仙沼あそびーばーの会 鈴木美和子、千葉開生
気仙沼復興豆腐のマサキ食品 千葉淳也
面瀬小学校PTA 及川孝
NPO法人NEO（なんでもエンジョイ面瀬クラブ）小池良光理事長
面瀬地区下沢自治会 神谷和馬会長
面瀬地区千岩田自治会 梶谷正常会長
気仙沼市千岩田在住 小野寺憲雄
気仙沼市役所 小野寺憲一
旅館海光館代表 小野寺征貴
面瀬小学校元校長 長田勝一
気仙沼高校 高橋誠子（元）教諭
宮城県気仙沼西高等学校 小山和美 ボランティア部
気仙沼市気仙沼中学校住宅自治会
気仙沼市気仙沼公園住宅自治会
三陸新報社 小野寺英彦編集局長
リアス・アーク美術館 山内宏泰学芸員
宮城県気仙沼向洋高校 千田健一校長
株式会社阿部長商店
株式会社八葉水産
GANBAARE株式会社
NPO法人底上げ
宮古市社会福祉協議協会
宮古市役所
清寿荘在宅介護支援センター
銚ヶ崎学童の家
女川桜守りの会のみなさま、遠藤定治会長、藤中郁生

女川町観光協会 遠藤琢磨、阿部真紀子、遠藤達彦
女川魚市場買受人協同組合 石森洋悦副理事長
有限会社梅丸新聞店 阿部喜英
株式会社高政 高橋正樹
有限会社マルキチ阿部商店 阿部淳
ワイケイ水産株式会社 木村喜昭
株式会社岡清 岡明彦、岡芳彦
株式会社ヤマホンベイフーズ 山本文晴
トレーラーハウス宿泊村 EL FARO 佐々木里子
NPO法人アスヘノキボウ
ダイシン／カフェさくら 島貫洋子
小野寺茶舗 小野寺武則
Cebolla 堂賀みつえ
RIVER SON 川村辰徳
金華楼 鈴木康仁
女川町教育委員会
認定NPO法人カタリバ コラボ・スクール女川向学館
いのちの石碑プロジェクト 阿部一彦
小さな命の意味を考える会代表 佐藤敏郎
女川さいがいFM
竹浦地区 鈴木成夫
桐が崎地区 鈴木公義
女川福幸丸
東北復興応援団白金支部
順天堂大学 准教授 鈴木宏哉
気仙沼復興マルシェ 塩田賢一
大島公民館長 小野寺樹一郎
気仙沼大島 マルエ水産 小松俊浩
気仙沼大島 旅館民宿のみなさま
関西学院大学災害復興制度研究所 山中茂樹
被災地NGO協働センター 顧問・村井雅清、増島智子
認定特定非営利活動法人 まち・コミュニケーション 代表理事 宮定章
株式会社兵庫商会 取締役会長 田中保三
日本財団学生ボランティアセンター(Gakuvo)
東京ボランティア・市民活動センター
ひの市民活動団体連絡会／まちづくり市民フェア実行委員会事務局
NPO法人めぐみ 代表 山本徹
ユギ里山保全チーム 代表 豊田方威
七ツ塚ファーマーズセンター
自立ステーションつばさ
イオンモール多摩平の森
日野市立平山小学校
社会福祉法人夢ふうせん
認定NPO法人やまぼうし
NPO法人P.L.A 後庵正治
災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉
NPO法人NICE
日野市青少年委員の会

12. 協力・連携・助成金

都立南平高校 ボランティアグループ YouSee!
八王子市福祉政策課
日野市地域協働課
明星大学ボランティアセンター
法政大学多摩ボランティアセンター
首都大学東京ボランティアセンター
実践女子大学ボランティアセンター
東京薬科大学学生サポートセンター
八王子市社会福祉協議会／八王子市ボランティアセンター
日野市社会福祉協議会／日野市ボランティア・センター
文京区社会福祉協議会／文京ボランティア・市民活動センター
文京区青少年プラザb-lab

宗教法人信行寺 浅野弘毅
中央大学学員会

(2) 協定

- 2014年3月12日「日本財団学生ボランティアセンター」との間で「学生ボランティア活動推進」に関する協定の締結

(3) 助成金

- 公益財団法人 電通育英会 平成27年度「人材育成活動への助成事業」に採択
プロジェクト名：「防災を伝承し地域を巻き込む学生の『触媒力』向上プロジェクト ～三陸、K O B E、そして多摩の事前復興へ」
東北被災地の学びに、震災20周年を迎えた神戸の学びも加え、また多摩での現場活動に取り組むことで地域における社会資源をネットワーク化して行く学生の触媒力向上を目指す一連プログラムを行う。
- 住友商事平成27年度「東日本再生ユースチャレンジ・プログラム」活動・研究助成Aコースに採択
対象団体：被災地支援学生団体「面瀬学習支援」の活動

13. メディア掲載

1. 大学関係広報誌

(1) HAKUMON Chuo

2015夏号（ボランティア活動写真展）



2015冬号（越智つぐみ）



(2) Chuo Online

松本真理子 学生の成長を促すボランティア活動



学生の成長を促すボランティア活動 ～ボランティアセンターより

松本真理子／中央大学ボランティアセンター、コーディネーター

ボランティアセンターの設立

2013年4月多摩キャンパス学生課に「ボランティアステーション」（翌年ボランティアセンターに改称）が設立された。センターには専門のコーディネーターが2名常駐し、ボランティアをしたい学生へのボランティア情報の提供や活動相談、学生ボランティアを必要としている地域との調整などを行っている。センターのいちばんの目的は、ボランティア活動を通じて学生たちの成長を促すことである。様々な課題を抱える実際の場に出て、大学で得た知識などを総動員し、自らの知恵と工夫で社会に貢献する「ボランティア活動」は、本学の建学の精神「実地応用ノ素ヲ養フ」に通じるものではないだろうか。

学生たちの活躍

センター設立の契機は、東日本大震災による。このとき多くの学生や教職員が被災地ボランティアに名乗りを上げた。震災から5年経とうとする現在も現地の課題は山積しており、センター所属の「被災地支援学生団体」4団体をはじめセンターは被災地支援活動に学生を送り続けている。今年の夏も学生75名が現地へ赴いた。初めて被災地を訪れた学生は一様に「まだこんなにも復興していないとは思ってもよらなかった」と、学校の外にある現実を目の当たりにして、社会の入り口に立つ経験をする。一方、活動先の地域には「学生が来る」ということだけで、仮設集会所に顔を出す高齢者や大学生と遊ぶことを待ちきれない子どもたちがいる。ある気仙沼の小学校の先生が「（長期休みになったら中大生が）当然来るものだ、私たち子どもたちも思っていますよ」と仰っていたが、通い続けたことで地域にとって中央大学の学生は欠

かせないものとなりつつある。また、こうしたつながりから中央大学の存在を知り被災地域から入学した学生もいる。「大学生」は沿岸部の過疎地にとっては珍しい存在であり、学生たちの活動が地域に与える影響は小さくはない。

五感を使う、ボランティアの現場

現在、被災地の活動は、がれき撤去など肉体労働ではなく、人々との交流を基本とした活動になっている。現場には、学生と現地の高齢者や子どもの笑顔にあふれている。被災地支援学生団体「はまらいんや」は「現地の方の今日を生ききる力になる」ことを掲げ仮設住宅の集会所でお茶会を催すなどしている。これは、ただおしゃべりをするのではなく、現地の方の笑顔の裏側にある、暮らしにくさや不安、悲しみなどを、ちょっとした仕草や部屋の様子から読み取り、その心に寄り添うことを目指している。それには、学生が声の大きさ、間のとり方、表情などで相手がリラックスできる雰囲気を作りながら、同時に相手の微細な変化を見落とさないようにアンテナを張り、その変化に瞬時的に対応していくという、「五感」をフル活用した動きが必要となってくる。これは子ども相手でも同様だ。学生団体「面瀬学習支援」は、被災し大人が苦労している姿を見ている子どもたちが「子どもらしくなくなってしまった。大学生の前では子どもは素直になれるはず」という現地の声を受けて、子どもたちと遊び学ぶことを2012年から行っている。学生を前に子どもたちは「おんぶ」「だっこ」をせがみ、いたずらをして気を引き、大きな声で笑い走り回り、元気いっぱいだ。しかしその裏には、震災前に比べて家庭環境や生活環境が大きく変化したことによるストレスや不安がある。潜在的なニーズに気が付くためには、子どもと全力で遊びながらも子どもの様子を冷静に観察する力が必要だ。こうした力は文献を読んだり、教室のなかで考えるだけでは身に付くものではないだろう。ボランティアの現場に出て、その瞬間瞬間に心と身体を動かすことを繰り返し、少しずつ五感が磨かれていく。

事前の目標設定と事後のリフレクション

ボランティア活動では、活動前の目標設定と活動後の振り返りも成長のために大切なプロセスとして取り組んでいる。現場に出る前に、なぜその活動に自分は取り組むのかという目的意識を明確にしていくことで、現場に関わる学生の主体性の度合いが変わってくる。ボランティアという言葉にはしばしば「奉仕」や「自己犠牲」のイメージが付きまとうが、「主体性・自発性」こそがボランティアで最も大切なことである。(参照：ボランティアセンターHP「理念とあゆみ」)

目的意識を明確にする過程では、現地の様子を調べたり、学生間でディスカッションを行ったり、専門家を招いての「傾聴講座」や「心のケアの勉強会」などを開いている。現地に行く前に多くの情報を得てイメージを膨らませておき、現場でそれとの差異を敏感に感じ取ることには、知識を現場に合わせて捉え直していく応用力を鍛えることにつながる。

活動後は「振り返り」を行う。活動期間中は基本的に毎日、その日のうちに振り返りを行い、翌日の活動の改善につなげる。いわゆる「PDCAサイクル」を回すということだ。目標・計画を立て、実践し、行動を振り返り、次の行動につなげる—という循環の中で、学生の実行力は高まる。また長期休暇明けにはボランティアセンターが主催し、ボランティア活動をした学生を集めた「振り返りワークショップ」を行っている。これは失敗を反省するといったことよりも、活動を俯瞰して観ることに力点を置いている。ボランティア活動は自分と相手(支援者)との関わりだけでなく、大学生ボランティアを受け入れるNPOや市民団体、地域や社会との関係性のなかで成り立つ。自分の活動が、様々な関係者にとってどのような影響(メリット)を及ぼしているのか、目の前の課題はどのような社会的な課題と結び付いているのかを考えることで、社会の中での自分の立ち位置を明らかにしていくことができる。それは、社会の中で自分をどう生かすのか、自分が社会の一員としてどのような社会を望むのかを考えることでもあり、社会に羽ばたく直前の大学生時代に明確にしておきたいことでもある。コーディネーターは学生の様子をとらえながら、これらのプログラムを企画し、学生をサポートしている。

ボランティア活動がもたらしたもの

ボランティア活動の一連の取り組みは、様々な好影響をもたらしつつある。ひとつは、学生から「大学の授業への取り組み方が変わった」という声があることだ。地域の人たちと触れあうことで、成長への意欲が高まったり、課題意識から授業やゼミを主体的に選択している。また、多摩地域のまちづくりにも貢献している。被災地で防災やコミュニティづくりの重要性に気が付き、被災地に行くだけでなく足元の多摩での実践を始めた。2014年は日野市平山地域で学生主体の「減災ウォークラリー」が行われ、学生と地域住民合計180人が参加した。そして、就職への影響だ。継続的な被災地ボランティアに取り組んだ過去の卒業生たちは、目的意識を持って就職活動をし、国家公務員や新聞社、大手航空会社などに内定した。現場で鍛えられたコミュニケーション力や場を把握する力、ものごとを俯瞰する力などが就職活動でも発揮されたのではないかと推測する。

課題は効果の可視化と他部署・他機関との連携

ボランティア活動がどのように学生の成長を促すかを説明してきたが、これらを行うにはいくつかの課題がある。大きな課題は、人的コストだ。学生の主体性を引き出し力を伸ばすことや現地のニーズとのコーディネーションなど、個々に対して継続した大人の関わりが必要だが、コーディネーター2名では手の届く範囲は限られている。活動範囲を広げるためには教員や職員、地域の大人など多様な人の関わりが欠かせないが、そのためには関係者で共有できる「学生の成長の可視化」の仕組みを作らねばならない。可視化は、現在取り組んでおり、12月5日（土）午後多摩キャンパスCスクエアにて、ボランティアセンターの取り組みと学生の成長についての事業報告会を実施する予定だ。興味のある方にはぜひ参加いただきたい。

さいごに

センターには毎日10人前後の学生が来る。志が明確な学生もいるが、「何か挑戦してみたい」「自分に自信がない」「サークルに入りそびれた」「将来就きたい仕事がない」など大学生活での居場所ややりがいを求めてくる学生もいる。センターは社会のリーダーとなるような人材を育成するとともに、同時に学生ひとりひとりの小さな一歩を応援する温かい場所でもありたい。

松本真理子（まつもと・まりこ）／中央大学ボランティアセンター、コーディネーター

千葉県出身。1981年生まれ。2004年明治大学政治経済学部卒業。在学時にキャリア教育のNPO団体の立ち上げに参画。船橋市教育委員会、コミュニティ紙の新聞記者、地産地消イベントプロデューサーなどを経て、2011年9月より宮城県女川町で子どもたちの放課後の居場所「コラボ・スクール女川向学館」（運営：認定NPO法人カタリバ）にて広報・地域コーディネーターとして従事する。2013年4月より現職。

開澤裕美 地域×学生が生み出していくもの



『地域×学生』が生み出していくもの ～ボランティアセンターより

開澤裕美／中央大学ボランティアセンター コーディネーター

大学が地域にある、ということ

中央大学ボランティアセンターが2013年に設立されてからもうすぐ4年目を迎えようとしている。岩手県宮古市・宮城県気仙沼市・女川町を中心とする被災地支援活動により、学生は徐々に地域の方々にとって欠くことのできない存在になりつつある。一部の沿岸地域における中央大学生へ向ける目は、まるで子どもを育てるそのように厳しくもあり、とても温かい。今後も学生にとって大いなる学びの現場となるべく、彼らとともに地に足のついた活動を継続していきたい。

一方で、多摩キャンパス周辺の八王子市・日野市をはじめとする多摩地域に目を向けてみる。大学が多いこの多摩地域、中央大学生とは地域の皆さんにとって一体どんな存在になっているのであろうか。コーディネーターとして地域へ出て、行政やNPO/NGOをはじめとする様々な市民の方々とお会いする機会は多く、率直な感想としては、皆さんの中央大学生への期待は非常に大きい割には、地域への存在感は物足りないというのが現状ではないかと思う。私自身、大学で勤務し始めてから『大学が地域にある』ということへの地域からの期待値が想像以上に大きく、しかもそれが極めて曖昧なものだと日々感じている。確かにこの少子高齢化時代、若者がいるというだけで活気づくのはもちろんのこと、この若い力は不確かではあるが多くの可能性を秘めたとても心強い存在なのである。ボランティアセンターとしては、その地域からの曖昧な期待感を読み取り、授業に参加し机で勉強するだけでは得ることのできない学生の秘めた能力を掘り起こし、地域と学生との新たな架け橋を創る役割を担っていこうと、これまでも今後も取り組んでいる。

学生が地域から学ぶもの

地域に学生が出ていく、その方法としては様々な形態が考えられる。授業やゼミでの実習やフィールドワークをはじめ、インターン、アルバイト、どの場面でも地域の方々との繋がりは欠かせない、要のひとつとなる重要なステークホルダーである。その中でも、ボランティアとしての関わり方の特徴としては、まず自らの意思で行う主体性や自発性があること、利害が絡まないことなど、ボランティアならではの利点が挙げられるであろう。

実際の活動としては、学生主体のボランティアサークルによる子どもたちとの活動(児童館、児童養護施設、子ども会、学童施設)、福祉施設、障がいのある子どもたちとの活動に加え、ボランティアセンターができてからは社会福祉協議会や市役所などとの新たな繋がりが増え、地元行政との良い関係性ができつつある。また、東日本大震災の経験を多摩地域での防災に活かすべく、日野・八王子地域での防災・減災活動にも積極的に参加している。2014年度には、減災イベントの企画・運営に中心的に関わったことをはじめ、多摩地域を中心とする様々なボランティア要請を数多く受け取り、述べ約80名以上の学生が多様な地域づくりに参画した。2015年度には、地域の自治会を中心とする防災活動イベントに多くの学生が参加しているのに加え、環境・農業・福祉分野において、新たな地域・まちづくり活動をボランティアセンター主導でマッチングを行い、これまで以上に多くの学生が参加している。

学生にとっては、これまで通学するだけだった大学周辺の地域活動に参加することにより、見るものの視点が大きく変わっていく。漠然と『公務員になりたい』と勉強を進めていた学生が、現場で生き活きと市民とともに活躍する公務員を目にすることにより、自分自身のなりたい姿を構築していく。畑での農作業を初めて経験した学生が、農業や命を育む大切さを実感し、改めて自炊するきっかけを掴み新たな世界を広げていく。触れ合う機会がなかった障がい者と対面することにより、自分自身の心のバリアが取れて新たな成長へと繋がっていく。これまでは通学する場所であった地域が、自分を学ばせ、世界を広げさせてくれる様々な存在を包含するコミュニティへと変わっていく。私はその瞬間を彼らの側で見られるありがたい仕事をさせてもらっている。

学生にとっての壁とは

しかしながら、いくつかの時間軸での難しさというのを学生と関わる中で日々感じている。まずは、大人の想像よりも高く立ちはだかる『はじめの一步』である。ボランティアをしたことがなくやってみたいという相談に来る学生にとっては、コーディネーターが紹介するボランティアへの『はじめの一步』が中々踏み出せない。もちろん人には依るが、電話やメールで連絡を取るだけ、その一步が想像以上に難しい学生も少なくはない。また、ようやく一步を踏み出し、充実した活動を経験した学生の中においても、二歩目・三歩目がこれまた中々続かない。初めての経験に満足し、もっと行きたい学びたいという欲がない学生も少なくないのが現状である。加えて、感情の不安定さや世代交代による乱高下など、学生特有の壁にぶち当たる。

こちらとしても、一步目へのサポートをいかにしていくか、継続的に彼らに関われるような仕掛けをどのように取っていくかなど、試行錯誤しながら彼らと一緒に学んでいきたい。

コーディネーターとしての関わり方とは

ボランティア活動をしてみたい、または既に行っている学生と日々向き合い、彼らが行う活動をより良くより深いものにするべくサポートする、コーディネーターとしての理想の関わり方というのはどういったものか。大学という教育機関の中にあるボランティアセンターとして、どのように接すればより深い学びへと彼らを誘うことができるのか、その難しさと奥深さを感じている。前職である国際ボランティア活動を行うNPOで関わっていた大学生は比較的同じようなタイプの学生が多かったが、大学という組織で関わる学生は本当に多様なため、こちらも日々勉強の毎日である。

また、学生ならではの感情の不安定さも視野に入れ、大人や地域からの期待を良い刺激とし

て活動を継続できるような情報を整理しながら、今後も彼らの一番の応援団となれるよう、精進していきたい。

学生にとってより広く深い学びの機会提供のために

前述した学生コーディネーターというのは、どうしても個人のこれまでの経験値や勘に頼ってしまいがちである。接する学生の立場に立つと、いろいろな大人からいろいろなことを言われ、一体誰の言葉に従っていいのかと混乱する一因となり得る。

そこで現在ボランティアセンターでは、経験値や勘にばかり頼ることなく、『形式知に基づいたインストラクション』を行うため、学生個人の成長段階の状態を把握できるよう、独自の指標づくりに2015年から取り組んでいる。対面する学生がこれまでどのような経験をして、どのような力を持っており、また今後どういった部分を伸ばしていくために、どのような関わり方をすれば良いのか。そんな難問がすぐに解決できるとは思えないが、できる限り彼らへの関わり方がより良いものとなるよう、外部の方の協力も得ながら進めているところである。大学での4年間という限られた時間において、ボランティアを通して貴重な体験ができ、それが今後の人生において大きな財産となるよう、手厚いサポートを目指していきたい。

最後に

2015年に引き続き、地域と大学の協働事業として、今年も2月4日～11日の期間中に『大学生ボランティア活動報告&防災イベント』を実施する。地域の方々が多く集う商業施設であるイオンモール多摩平の森（豊田駅）をお借りして、中央大学と多摩地域にある5つの大学や行政、地域ボランティアセンターと共に協働で取り組むイベントである（参照HP）。内容は、期間中展示しているパネル写真展に加え、2月6日（土）には、大学生によるボランティア活動発表や防災ゲーム、防災アトラクション、東北応援物産展など、家族でも楽しめるように準備を進めているところである。こうした事業を通じて、一人でも多くの学生が地域と繋がり、新たな一歩を踏み出せるきっかけとなることを望んでいる。

開澤裕美（かいざわ・ひろみ）／中央大学ボランティアセンター コーディネーター

京都府宇治市出身。1975年生まれ、1997年同志社大学法学部政治学科卒業。国際ボランティア活動を企画・運営するNPO法人で関西事務局を立ち上げた後、CSR（企業の社会的責任）のコンサルタントを経て、2015年4月より現職。NPO法人NICE（日本国際ワークキャンプセンター）副代表・理事も務める。

中澤秀雄 東日本大震災が浮き彫りにした公共性の空洞化と希望



東日本大震災が浮き彫りにした公共性の空洞化と希望

中澤秀雄／中央大学法学部教授
専門分野 政治社会学・地域社会学

東日本大震災関係で、私がChuo Onlineに投稿するのは5回目になる。過去には、中央大学のボランティア活動について2012年・13年と連続して連名記事を載せていただいた^[1]。また復旧過程において浮上してきた法的・制度的な課題について2012年秋に上下に分けて寄稿した^[2]。2013年夏になると「『復旧』に回収される『復興』」と題して、現地の疲弊をリポートする文章を書かざるを得なかった^[3]。今回も気持ちが続かないまま執筆しているが、主流メディアが壊れてしまった今、こうして一人一人が発信し続けるしか方法がないのだと言いつけている。

東日本大震災が明らかにした公共性の空洞化

「もう被災地は復興したんでしょう？」と聞かれることも多くなった。たしかに東北の中心都市・仙台は一層繁栄しており、昨年には華々しく国連世界防災会議が開催された。岩沼など仙台平野部分の防災集団移転・区画整理も、一部を除き目処がついた。しかし、牡鹿半島以北のリアス式海岸地区についてはそうではない。想像を絶する規模で土埃が舞う国道45号線沿いの様子を見て、「復興などしていないことがよく分かった」と案内した学生たちは異口同音に感想を漏らす。また福島県浜通りについては、政府が強引に原地復帰政策を進めているが根本的な問題解決は遠く、浜通り住民の口は重くなるばかりである。一方で在京の主流メディアは調査報道と議題化の能力を失い、もはや東日本大震災を阪神大震災と同じ過去の出来事と位置づけたかのようだ。河北新報・三陸新報など東北ローカル報道に日々接している私は、全国紙や地上波テレビを滅多に見なくなっているのだが、無意義に展開されるパッチワーク情報をた

まに一覧して、同じ国に生きているとは思えず言葉を失う瞬間がある。確かに阪神大震災のとき東京が冷たかったとは関西圏の人がよく言うことだが、それでも関西では1995年に生まれていなかった子にも、確実に記憶がリレーされている。2004年中越地震を経験した新潟の人々は「今度は自分たちが恩返しをする番だ」とこの5年間言い続けてきた。しかし3.11当時に中学生だった今の大学新入生について言えば、在京メディアが何も伝えなくなった事実の端的な反映として、東日本大震災は一過性のぼんやりした記憶に止まっている。苦勞して2014年から中央大学ボランティアセンターを立ち上げたものの、毎年白紙状態から被災地に触れさせ考えさせるところからスタートするので、正直なところボラセンスタッフにも現地にも若干の徒勞感がある（学生が悪いわけではない。若い人は社会状況を正直に映す鏡である、というだけの話だ）。東日本大震災とは、昭和時代とは異なり一国単位での公共性が成り立たなくなった日本の姿を、残酷に明らかにした事件でもあったと、現在の私は考えている。思い返せば震災直後からその予兆はあった。「日本は変わらなければいけない」とか「平成の後藤新平よ出よ」とか熱に浮かれたように日本改造案を論じる「識者」が多く現れ、中には「これは天罰だ」と公言する人までいた。要するに震災を奇貨として自分たちの望む社会を実現しようという発想であり、学問的には「ショック・ドクトリン」(Naomi Klein) と呼ばれる行動様式に近い。ちなみに佐藤優は「客観性・実証性を無視ないし軽視して、自分の望むように社会を理解する態度」と反知性主義を定義しているが、これを適用すると上記「識者」たちの態度は、むしろ反知性主義に近いのではないかという疑いもある。小熊英二が2011年6月の時点で『『がんばれ日本』とか転換期とかいう話をしているのだけれども、結局のところ自分の利害構造で、自分のところから話しているだけ』（『東北再生』イースト・プレス社：pp.19-20）と冷ややかに述べていた指摘は、遺憾ながら凶星だった。これとは逆に三陸リアス地域は5年間のあいだに、現実を客観的に認識している。「震災直後は地元住民も『一日でも早い復興』と口にしていました。今は誰も口にしません」（気仙沼市議会議員・今川悟氏、2015年の土木学会シンポジウムにて）。「復興加速化」という政府のスローガンは東北では空しく響き、逆にハッキリと「空洞化してしまった日本社会の公共性」を指し示している。

東日本大震災がもたらした希望

こうして震災後3年ほどすると「東日本大震災を経て、果たして日本社会は変わったのでしょうか？」と質問される機会も増えた。この質問は反語表現に近く、「何も変わっていないですよね」という語気を含んでいる。然り、既に311以前から公共性が空洞化していた以上、一国レベルで日本社会が変わるはずがない。それは論理的に導かれる結論だ。この状況下では、公共性ではなく政治権力のヘゲモニーを握った人間・集団の決定が、昭和時代とは比較にならない大きな槌子の力で制度を変えていくことになる。これも論理的に導かれる帰結だ。東北被災地はその混乱の中で、更に忘れられていく。

しかし一方で、東北ないし三陸沿岸というスケールで見れば、東日本大震災は地域社会の編成原理を変えた。よそ者・ネットワーク・企業などの外部資源がかつてない規模で流入し、比較し考えるための素材が多くもたらされて、東北人自身が客観的・実証的に自画像を描き直すことになったからだ。これまで「年齢階梯制」（長老格の男性が支配するピラミッド型地域構造）とか「行政依存」という言葉で表現されることの多かった東北で、若年層・女性・よそ者の動きが目立っている。東北に移住するとか、そこまで行かなくても生活の重点を北に移す非東北人も多い。日常的に、各分野の一流の人材が出入りするようになったので「幕末の長崎はこんな感じだったのではないか」と言う人もいる。

起業も目立って増えており、例えば「気仙沼ニッティング」（高級手編みセーター）「GANBAARE」（帆布製品）「東北食べる通信」（Community Supported Agricultureを促進するためのプラットフォーム）「気仙沼地域エネルギー開発」（間伐材を利用した木質バイオマス）など震災後に立ち上がって全国的な認知度を享受している企業・NPOもある^[4]。厳密な意味での起業ではないが、気仙沼の老舗水産加工業者である（株）阿部長商店は、「マーメイド」という新ブランドを立ち上げてアヒージョなど新商品を開発し、積極的な販路拡大に取

り組んでいる。同社の阿部泰浩社長は、中大生を前に次のように語ってくれた（2015年2月18日）。「震災から3カ月たったころ、テレビ朝日の『報道ステーション』が壊滅した工場をバックに生放送したことがある。そのとき古舘キャスターと2時間くらい話をしたのですが、彼は『東北は昔から労働力を搾取されてきたという不満がありますよね』という。自分は今までそんなことは考えたことがなかった。しかし、よく考えたら、下請けみたいなことを今までやっていたなと気付いたのです。お袋も東京に集団就職で行って働いていた。もっと知恵を働かせばできると思ったので、今はマルハやニッスイとは組まない。自分のブランドを作る方向に転換しました」。同じく老舗の齊吉商店は、気仙沼の高校生のアイデアを商品化した「なまり節ラー油」を扱っているが、この商品は高校生による起業のモデルとして様々な媒体で取り上げられている。このように新たな希望が同時多発的に芽吹いている気仙沼において、私ども中央大学も幸い、協働相手と位置づけていただいている。中澤は気仙沼市面瀬行政区まちづくり協議会アドバイザーに就任しているが、学生たちも面瀬地域を中心に小学校への学習支援、仮設住宅でのコミュニティ活動、地域資源の発見のための調査、地域誌の編集などに継続的に携わらせていただいている。

5年を経た東北は「若い人が客観的に自らを認識し、自ら決意して動けば社会が、そして公共性が変わる」と実感できる現場にもなっている。中央大学ボランティアセンターとしては、その熱が学生に伝わり、やがて日本全体の公共性を創り直してくれる人材が輩出することを願って、今日も現場での学びをサポートする後方支援を続けている^[5]。

1. 「中央大学の被災地ボランティア「冬ボラ」報告：入門編を越えて継続へ」（2012年1月26日）
および「三陸被災地にいま必要なこと：大学（生）という『旅の者』の挑戦」（2013年2月12日）
2. 「三陸沿岸からみる災害地域再生の法的課題（前編）」（2012年9月27日）
「三陸沿岸からみる災害地域再生の法的課題（後編）」（2012年10月4日）
3. 「『復旧』に回収される『復興』」（2013年7月8日）
4. それぞれのURLは以下の通りである。

気仙沼ニットイング

<http://www.knitting.co.jp>

GANBAARE

<http://www.ganbaare.jp>

東北食べる通信

<http://taberu.me/tohoku/>

気仙沼地域エネルギー開発

<http://chiiki-energy.co.jp>

5. 中央大学ボランティアセンターの活動は大学の公式ホームページ（<http://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/>）やそこにリンクするFacebookページで随時報告している。また、コーディネーターが執筆した2本のChuo Online記事（<http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/education/20151022.html> / <http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/education/20160128.html>）も参照いただければ幸いである。学生が東北で活動するための資金はつねに不足しており、篤志を賜れば幸いである。中央大学のボランティア募金口を用意する学内手続きは進めているが、現時点においては以下の口座にご寄付を頂ければありがたい（中央大学としての募金の実現すれば税制上の控除が受けられますが、現時点では控除等の優遇がないことをお許しください）。

※支援金の振込先 郵便局振替口座 00160-3-449355（加入者名）中央大学ボランティアネットワーク

中澤 秀雄（なかざわ・ひでお）／中央大学法学部教授

専門分野 政治社会学・地域社会学

東京都出身。1994年東京大学卒。2001年東京大学から博士（社会学）の学位を取得。札幌学院大学社会情報学部講師、千葉大学文学部准教授を経て2009年から現職。日本社会学会、地域社会学会等に所属。主著は『住民投票運動とローカルレジーム』（ハーベスト社）『環境の社会学』（共著、有斐閣）『平成史』（共著、河出書房新社）など。『住民投票運動と～』により第5回日本社会学会奨励賞、第32回東京市政調査会藤田賞、第1回日本都市社会学会若手奨励賞を受賞。

(3) 白門ヘラルド

8 February 2018 Interview Hakumei Hazaki

Volunteer work helps deepen mutual understanding.
 Says Mrs. Kikawa, vice president of NICE.
 国際ボランティアで育った私に聞く —NICE 副代表理事 木村 久子—



As Japanese society grows global, it is becoming more natural for Japanese to work hand in hand with people from other countries. One of the most important of these is volunteer work. As a former student in England, says Mrs. Hiroe Kikawa, vice president of NICE (Nippon International Center), a Japanese NGO engaged in promoting international volunteer projects.

国際化が進む中、日本人と外国人とが手を取り合うことは当たり前となりつつある。国際ボランティア活動を通じてお互いの文化や価値観を学ぶことは、国際化が進む中、日本人と外国人とが手を取り合うことは当たり前となりつつある。国際ボランティア活動を通じてお互いの文化や価値観を学ぶことは、国際化が進む中、日本人と外国人とが手を取り合うことは当たり前となりつつある。

International volunteer work can help young people acquire and develop self-reliance. A camping style volunteer program in which participants work and live together is often called "work-camp." International volunteer workcamps originated in 1966 when young men from Germany and France gathered near Yonkers in northeastern France to revive the forgotten dreamland during World War I. The idea of the first volunteer project inspired "the volunteer movement" to give to world-wide donation. Today, more than 170 NGOs are active across the world undertaking broad-ranging volunteer programs.

その力を借りたのが国際ボランティア活動の原点として、ドイツとフランスの若者たちがプロブンス地方のヴェルダンで共同生活を送ったこと。この活動は、第二次世界大戦で壊滅した地域の復興を目的として行われた。この活動の成功は、国際ボランティア活動の原点として、ドイツとフランスの若者たちがプロブンス地方のヴェルダンで共同生活を送ったこと。

It may be unrealistic for you to live in a facility place, surrounded by people who share the same sense of value with you. However, it's not good if all is a city transition for you to jump out into a place where people have a totally different sense of value," Mrs. Kikawa stressed during her interview with Hakumei Donut NICE which organizes Japan-Japan volunteer work activities both at home and abroad. It is the vice president of the Coordinating Committee for International Voluntary Service (CCIVS), an affiliate of the United Nations Economic, Scientific and Cultural Organization (UNESCO). It hosts one of the world's most massive volunteer activities, working in close cooperation with 400 organizations in 90 countries.

「自分と合うところ、価値観が同じ人ばかりで過ごすことは稀だが、そうではないところで自分の個性を出して生きていくことも大切だ。自分と合うところばかりで過ごすことは稀だが、そうではないところで自分の個性を出して生きていくことも大切だ。自分と合うところばかりで過ごすことは稀だが、そうではないところで自分の個性を出して生きていくことも大切だ。」

She said, "One of great points about international volunteer activity is that it



国際ボランティアで身につく相互理解

～ボランティアセンター開澤氏（NICE副代表）に聞く～

国際化が進む日本の中で外国人とともに働くことは当たり前となりつつある社会において求められる力の一つとして、お互いのことを理解し合いながら相手を受容できることが挙げられる。

その力を磨くための方法の一つとして国際ボランティアが考えられる。特に現地に泊まりがけで行われる合宿型ボランティア活動は、ワークキャンプと呼ばれている。ワークキャンプは1920年にドイツとフランスの若者たちがフランスのベンダル郊外で一緒に戦争で破壊された農地の再建を行ったことから始まったとされ、その後様々なネットワーク組織が結成され、現在170以上のNGOが世界各地で活動を展開している。

「自分と合うところ、慣れた状況にいることはすごく幸せなことだが、そうではなくて自分の価値観と全く違うところへ自ら飛び出ていくことが大事」そう語っているのは、NICE日本国際ワークキャンプセンター副代表理事の開澤裕美氏だ。NICEは国内外でワークキャンプなどの事業を行っている団体だ。日本で唯一国連・CCIVS(国連ボランティア活動調整委員会)に加盟しており、海外で提携している団体は90ヶ国165団体に及び世界トップクラスのネットワークを保持している。

「海外でボランティア活動を行うことのいいところは単なる旅行では終わらないことだ。」と開澤氏は語った。旅行で行くだけだと現地の人と多少話す程度でその国について深く知る事にはなかなか繋がり辛い。そこを観光地巡りだけでなく、現地で問題となっていることにボランティアとして直接かかわることでその国への理解が深まるそうだ。「ワークキャンプでの参加者は日本人だけではない。最近だと台湾や韓国の参加者が多く、ヨーロッパからはフランスやドイツからの参加者が多い。活動を行っている日本人と他の国の人との価値観の違いを感じる場面が多々ある。例えば日本人は作業をしなければならぬものと考えて行う人が多いのだが、あるイタリア人の人は自分なりの理論で、その作業をやらなくてもいいと結論が出たら作業しない人がいることなどがあつた。その理由を話してもらい全員で納得していた。」と説明していた。このような自分とは別の価値観が確立している人が多くいる中でともに話し、作業をして仲良くなることで、多様な価値観に触れ、慣れることができるそうだ。

「治安の状態への不安や自身の英語力への自信の無さから一人で海外へ行くことをしり込みする若者が増えている」と嘆いた。「お互いのことを理解するには実際にあって個人的なつながりが必要なのにその機会を持つとしない人が増えていることは非常に残念。日本でもボランティアを通して、文化も環境も違う知らない者同士が出会いともに作業を行うことで学ぶことが多いだろうが、海外での活動の方がインターネットでも得られる情報が少なく、より自分の知らない状況に身を置くことができ、その環境から自分の知らないものを受容する力が磨かれる。」と訴えた。

(楠 貴裕)

(4) 中央評論

学生の被災地支援ボランティアから見えるもの 小林大祐



第 1 号 2018年

「大学関係広報誌」の発行は、大学関係者への情報提供と、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

大学関係広報誌の発行について

本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。本誌の発行は、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。本誌の発行は、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

1

第 1 号 2018年

本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。本誌の発行は、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。本誌の発行は、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

1

第 2 号 2018年

大学関係広報誌の発行について

本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。本誌の発行は、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。本誌の発行は、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

1

第 2 号 2018年

本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。本誌の発行は、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。本誌の発行は、大学の魅力を広く伝えることを目的として行われてきた。本誌は、大学の最新の動向や、学生生活の紹介、教職員の仕事の紹介など、多岐にわたる情報を掲載している。

1





震災に見舞われた被災地での活動

新たな発見がなされた。一つは、被災地での活動を通じて、被災地の現状やニーズがより明確になり、今後の支援活動に活かせるという思いが湧いてきた。また、メンバー同士で協力して商品を作るという経験が、今後の活動でも活かせるのではないかという思いが湧いてきた。

震災からでも出来る身近な支援を模索している。このことから学生ラフでの活動については、私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。

新たな発見がなされた。一つは、被災地での活動を通じて、被災地の現状やニーズがより明確になり、今後の支援活動に活かせるという思いが湧いてきた。また、メンバー同士で協力して商品を作るという経験が、今後の活動でも活かせるのではないかという思いが湧いてきた。

震災からでも出来る身近な支援を模索している。このことから学生ラフでの活動については、私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。

震災からでも出来る身近な支援を模索している。このことから学生ラフでの活動については、私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。



震災ラフでの活動の様子

震災からでも出来る身近な支援を模索している。このことから学生ラフでの活動については、私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。

震災からでも出来る身近な支援を模索している。このことから学生ラフでの活動については、私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。

震災からでも出来る身近な支援を模索している。このことから学生ラフでの活動については、私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。私たちが出来る範囲で、被災地のニーズに応えるという思いが湧いてきた。

2015年12月号 草のみどり291号

復興支援インターンとボランティア

経済学部経済学科2年 (福島県立福島商業高校) 齋藤 江里

2015年9月6日(土)宮城県大川町で実施された「復興支援インターン」(復興大学主催)に復興支援インターンとして参加した。被災地での活動を通じて、被災地の現状やニーズがより明確になり、今後の支援活動に活かせるという思いが湧いてきた。また、メンバー同士で協力して商品を作るという経験が、今後の活動でも活かせるのではないかという思いが湧いてきた。

今回の出会い

今回の活動は、宮城県大川町という場所である。この町は東日本大震災で多くの被害を受けた町で、ボランティアの活動が盛んに行われている。私は、この町で被災者の生活を支えるために、復興支援インターンとして参加した。

活動の様子

活動は、被災地の現状やニーズを把握するための調査や、被災者の生活を支えるための支援活動が行われた。また、メンバー同士で協力して商品を作るという活動も行われた。この活動を通じて、被災地の現状やニーズがより明確になり、今後の支援活動に活かせるという思いが湧いてきた。

復興支援インターンとボランティア

経済学部経済学科2年 (福島県立福島商業高校) 齋藤 江里

2015年9月6日(土)宮城県大川町で実施された「復興支援インターン」(復興大学主催)に復興支援インターンとして参加した。被災地での活動を通じて、被災地の現状やニーズがより明確になり、今後の支援活動に活かせるという思いが湧いてきた。また、メンバー同士で協力して商品を作るという経験が、今後の活動でも活かせるのではないかという思いが湧いてきた。

活動の様子

活動は、被災地の現状やニーズを把握するための調査や、被災者の生活を支えるための支援活動が行われた。また、メンバー同士で協力して商品を作るという活動も行われた。この活動を通じて、被災地の現状やニーズがより明確になり、今後の支援活動に活かせるという思いが湧いてきた。

2016年02月号 草のみどり293号

草のみどり Vol.124

気仙沼でのつながりの輪

法学部政治学科4年 林 葉奈 (私立山手学院高校)



私は、被災地支援学生団体「はまらいんや」の活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。

「はまらいんや」について
被災地支援学生団体「はまらいんや」は、宮城県気仙沼市の復興にも、高校版気仙沼市の復興にもユニティ支援の活動を展開しています。住民交流の促進や孤立の防止を目指し、お茶会やレクリエーションを行っています。関係者を繋いでいる方に対して、必要に応じて個別訪問もしています。

「はまらいんや」は気仙沼の方言「はまらいんや」が由来で、この意味は「はまらいんや」という意味の言葉です。

2011年夏から活動が始まり、現在の支援ニーズに合わせて活動内容を調整しながら、先輩から後輩へ活動は引き継がれています。活動当初は、仮設住宅で「四時三十分」の集まりがあり、活動内容は「日本ホスピス在宅ケア研究会」(以下、日本ホス)から指導

助言をいただいていた。みなが行っていた活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。

「はまらいんや」の理念の一つは、被災地の皆さんはつらい体験を経た、色んな人とかかわって、人と人とのつながりを実感し、人々を支援することです。被災地の皆さんはつらい体験を経た、色んな人とかかわって、人と人とのつながりを実感し、人々を支援することです。

「はまらいんや」は、被災地支援学生団体「はまらいんや」の活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。



気仙沼において活動をしてきたことがあった。今回の訪問イベントが、我々が活動している地域の方から評価してもらえたことは、何物にも代え難い喜びであった。そして、二度となくおぼろげな記憶が、共に努力してきた学生、地域の方にウオータリーで成功を報告することができ、うれしく思った。なぜなら、ウオータリーは、決して五人の初期メンバーは、主目的に行動する方々と共に作り上げたイベントだからである。多くの学生を始め、各大学のボランティアセンター、警察、地域の方々の協力の賜である。

ウオータリーのこれか
ウオータリーは、2015年1月、主催者が学生から地域、学校に行き「はまらいんや」の活動に「継続的」な関わりを望んでいくために、被災地支援学生団体「はまらいんや」には、被災地支援学生団体の活動が不可欠である。ウオータリーは被災地支援学生団体の活動が不可欠である。ウオータリーは被災地支援学生団体の活動が不可欠である。

「はまらいんや」は、被災地支援学生団体「はまらいんや」の活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。



2015年12月号 草のみどり291号

出たからかと思われていたけれど、今でもこうして話してくれたい。がうれし」とおっしゃった。ささいなことで悩んでいること、大切なことを教わりたいこと、はまらいんやの理念の一つは、被災地の皆さんはつらい体験を経た、色んな人とかかわって、人と人とのつながりを実感し、人々を支援することです。

「はまらいんや」は、被災地支援学生団体「はまらいんや」の活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。

「はまらいんや」は、被災地支援学生団体「はまらいんや」の活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。



月の活動では「焼きたて」を開き、みんなで焼きたてを食べました。被災地支援学生団体「はまらいんや」の活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。

「はまらいんや」は、被災地支援学生団体「はまらいんや」の活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。

「はまらいんや」は、被災地支援学生団体「はまらいんや」の活動に3年次より参加し、これまで5回、気仙沼市に現地入りしています。最近では昨年2月下旬、冬の活動に加わらせていただきました。



(6) 白門三七会

白門三七会会報 第32号

白門三七会会報 (4)

大震災からやがて五年！被災地は今
中大のボランティア活動

中大式学生ボランティアセンターの活動
 中大式学生ボランティアセンターは、被災地支援活動として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。今年度は、中大式学生ボランティアセンターが主催する「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

中大式学生ボランティアセンターは、被災地支援活動として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

中大式学生ボランティアセンターは、被災地支援活動として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

中大式学生ボランティアセンターは、被災地支援活動として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

中大式学生ボランティアセンターは、被災地支援活動として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

(7) 学員時報

中大式学生ボランティアセンター

ボランティア活動月間

白門支援金について

白門支援金は、中大式学生ボランティアセンターが主催するボランティア活動の奨励と、被災地支援活動の推進を目的として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

白門支援金は、中大式学生ボランティアセンターが主催するボランティア活動の奨励と、被災地支援活動の推進を目的として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

「学員」から「社会」へ 白門の絆をつなぐさまざまな支援

白門支援金について

白門支援金は、中大式学生ボランティアセンターが主催するボランティア活動の奨励と、被災地支援活動の推進を目的として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

白門支援金は、中大式学生ボランティアセンターが主催するボランティア活動の奨励と、被災地支援活動の推進を目的として、毎年「中大式学生ボランティア活動月間」を開催し、多岐にわたるボランティア活動を行っています。

2. 新聞記事・広報誌等

The Japan News by The Yomiuri Shimbun 2015/11/8

Capturing the age,
focusing on the future
Chuo University

ChuoOnline
THE PLATFORM FOR THE FUTURE

Volunteer
activities for
student growth

Maiko Matsuzaki
Vice Director of Student Growth
Center

http://www.yomiuri.co.jp/afw/chuo/oly

中央大学
CHUO UNIVERSITY

http://www.yomiuri.co.jp/afw/chuo/oly

中央大学新聞 2015/11/11

No. 1252
11/11

中央大学新聞
CHUO DAIGAKU SHINBUN

HP http://cu.press.com/ E-MAIL info@cu.press.com

実際の被害を
目の前に

ボランティア活動の意義を
実感する学生たち

中央大学新聞

毎日新聞 2016/1/29

多摩地区の学生 被災地で活動

中央大など東京・多摩地域の9大学の学生らの被災地での活動を伝えるパネル展「大学生たちのボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。中央大、明大、法政大、実践女子大、

亜細亜大学東京、東京理科大学の日大等は、被災地に被災地支援活動を行っており、その活動や被災地の今の様子を写真パネル100枚以上が展示される。期間中は大学生スタッフが活動内容の説明も行う。午前10時～午後10時。観覧無料。また毎日午前10時～午後5時には、明大のイオンモールで、被災地支援活動と地域防災イベントも開催。午前10時～午後2時からは、避難所の運営をゲーム感覚で考える「HUIO」が、午前10時～午後5時には、子ども向けの防災ワ

ークショップ「防災アクションカエルキャラクターが体験できる。入場無料。問い合わせは中央大ボランティアセンター→2242・671・3471。

東京新聞 2016/1/30

Campus インフォメーション

2月4日日本では、2月11日～11月11日の間、中央大ボランティア活動の森で、被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。

被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。

読売新聞 2016/1/31

朝日新聞 2016/2/3

学生の支援活動 パネル展示

震災5年

被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。

被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。被災地支援活動「ボランティア活動」が3月4～11日、東京都日野市多摩平2のイオンモール多摩平の森で開かれる。

朝日新聞 2016/2/3

2016年(平成28年)2月6日(土曜日)

読者 朝日 東京 5頁



パネル展で展示された学生たちの写真

活動の記録 パネル展で

11日まで日野

県内から3年連続しようとしたい
 池田日本大職員が被災地で、赤十字
 会の学生たちが提供する支援物資を測
 量するパネル展「大学生たちのまっ
 シンティア活動」が11日まで、日野市
 のイオンモール多摩平の仮設3階で開

大学生の被災地支援

かれていた。
 中央大、明大、日大、東大、東海大
 子大、京都大学南口、東海大学大の
 非大が参加し、学生たちも各自が展
 示内容によって説明している。
 中央大のボランティアグループ
 「はまぎくのつばき」メンバーで、
 同大の被災地支援学生会メンバーは、前年
 熊本市で被災地の子どもたちの健康を

手伝ったり献血者の探し相手になっ
 たりする活動を続けている。
 中央大は、熊野で子供が「誰は
 人を助すから面白い」と考えたのが
 シリタだったといい、「被災地は
 災害の傷口は見えにくい。ふとした
 時に生々しく被災の状況が伝わる。心を
 配らなければならぬ」と語った。ま

池田日本大の学生支援する「シン
 ティア」の一環で、県内の被災地を巡
 るのは、「おかげで、おかげのことを話してい
 ないと思える。被災地に行き続けること、伊太
 だと思える」と語っていた。
 8日には同フロアのイオンモール
 で午前10時から午後5時まで、東正
 会児童会館の学生によるパネル展、
 被災地の復興イベントなども行われる。

The Japan News by The Yomiuri Shimbun 2016/2/14

**Capturing the age,
focusing on the future**
Chuo University

CHUO UNIVERSITY

ChuoOnline

The topic for this week's ChuoOnline section



**Deliverables of
the community
and students**

Harumi Katsawa
Coordinator
Chuo University Research Center
for International Graduate Education
(Education/2016/2/14 Issue)

ChuoOnline | Well search



中央大学
CHUO UNIVERSITY
— Founded in 1949 —

<http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/dy/>

三陸新報 2016/3/25



いっぱい学び遊ぼう

※大 春休みも面瀬で学習支援

気仙田

子供たちの学習をサポートする中央大生

【気仙田・面瀬】中央大学の学生が、春休みも面瀬の小学校で学習支援活動を行っている。子供たちが「いっぱい学び遊ぼう」というテーマで、学習や遊びを楽しんでいる。中央大の学生は、子供たちの学習をサポートし、分からないところを丁寧に教えている。また、子供たちが興味を持っている分野について、楽しく話を聞かせている。子供たちは、中央大の学生と接することで、学習の楽しさや、分からないことを質問する大切さを学んでいる。また、遊びを通してコミュニケーション能力を養っている。中央大の学生は、子供たちの成長を応援し、地域社会に貢献している。今後も、学習支援活動を通じて、子供たちの未来を応援していく。

三陸新報 2015/8/22

2015年(平成27年)8月22日 土曜日

少しでも役立てば

※大 地元で学習ボランティア

気仙田

【気仙田】中央大学の学生が、地元で学習ボランティア活動を行っている。子供たちの学習をサポートし、分からないところを丁寧に教えている。また、子供たちが興味を持っている分野について、楽しく話を聞かせている。子供たちは、中央大の学生と接することで、学習の楽しさや、分からないことを質問する大切さを学んでいる。また、遊びを通してコミュニケーション能力を養っている。中央大の学生は、子供たちの成長を応援し、地域社会に貢献している。今後も、学習支援活動を通じて、子供たちの未来を応援していく。



学習支援で地域の子どもたちと助け合う関係が広がる

三陸新報 2015/12/30

2015年(平成27年)12月30日 水曜日 14

学習支援で交流

※大 大みそかは年越しそば提供

気仙田

【気仙田】中央大学の学生が、大みそかには年越しそばを提供している。子供たちの学習をサポートし、分からないところを丁寧に教えている。また、子供たちが興味を持っている分野について、楽しく話を聞かせている。子供たちは、中央大の学生と接することで、学習の楽しさや、分からないことを質問する大切さを学んでいる。また、遊びを通してコミュニケーション能力を養っている。中央大の学生は、子供たちの成長を応援し、地域社会に貢献している。今後も、学習支援活動を通じて、子供たちの未来を応援していく。



アスレチックも楽しめるゲームも楽しんだ児童たち

イオンモール多摩平の森 チラシ 2016/1/30

EVENT INFORMATION

1/29-31 スポーツウェア・シューズ クリアランスセール

1/30-31 無料名入れ 実演販売

1/2-11 大学生ボランティア 運動靴油も防犯イベント

2/7 もりフェス

2/7-8 犬のしつけ教室 おせんぼわんわん

2/11 PICK-UP EVENT

2/20-21 早めに花を贈ろう! 花想グラスフェア

駐車料金

最初の2時間無料	以降30分毎に200円
最初の3時間無料	以降30分毎に200円

AEON MALL
イオンモール多摩平の森

〒194-0202 東京都多摩市平野1-1-1 (134号線)
TEL: 042-554-1200 (直通)

9時-22時 ** 10時-23時 **
11時-23時 ** 9時-22時 **

イオンスタイル多摩平の森
TEL: 042-554-1200 (直通)

3. メディア放送

(1) テレビ放送

年 月 日	放送局／番組名	内 容
2016年2月4日	MYJ:COM ／デイリーひの	大学生ボランティア活動報告 &防災イベント @イオンモール多摩平の森

(2) ラジオ放送

年 月 日	放送局／番組名	内 容
2016年2月6日	NHKラジオ ／マイあさラジオ	チーム防災の取り組み紹介

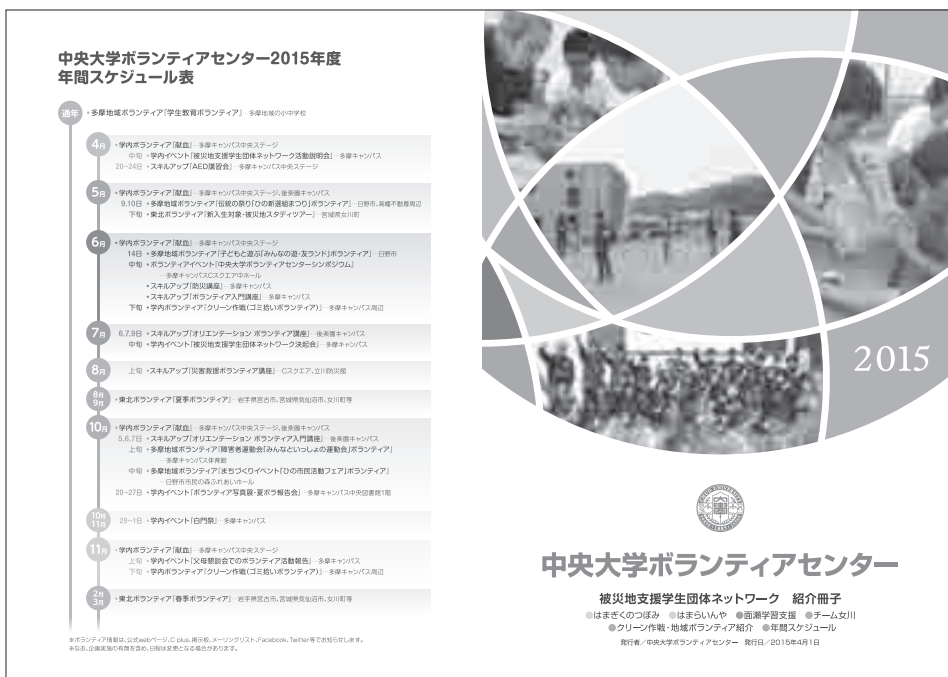
14. 作成物掲載

1. 刊行物

2014年度ボランティアセンター報告書



2015ボランティアセンター冊子



2015ボランティアセンターリーフレット

ボランティアをしてみたい人

1. コーディネーターに相談してみよう!

ボランティアセンターには、専門のコーディネーターがいます。ボランティア情報の提供をはじめ、ボランティアの心得や活動に対する不安など何でも相談に応じます。コーディネーターに会いに来てください。不在の場合もあるので、メール・Telで確認をしてから来てくださいね!

2. メーリングリストに登録しよう!

学内外のボランティア情報をいち早くお届けします。登録を希望する方は、ボランティアセンターアドレス (chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp) まで
1. 氏名 2. 学籍番号 3. 登録するアドレスをご連絡ください。
※登録するアドレスは、大学からのメール (~@tamajs.chuo-u.ac.jp) が必ず届くように設定してください。

3. 自分で情報を探してみよう!

情報はこんなところにあるよ!

掲示板

facebook

ラック

メーリングリスト

インターネット

学生課のイベント案内

4. 必ずボランティア保険に加入しよう!

ボランティアを始める前には、必ずボランティア保険に加入しましょう。ボランティアセンターや近隣の社会福祉協議会で加入受付を行っています。

ボランティアセンターで できることいろいろ

震災復興ボランティア

東日本大震災の被災地の一刻も早い復興を願い、学生ボランティアによる支援を行っています。被災地支援ボランティアを行う学生への活動費補助、ボランティアセンター主催のプログラムを実施しています。また、東北学院大学を拠点校におく「大学間連携災害ボランティアネットワーク」にも加盟しています。

※活動情報は主に学費からの実費金を使用しています。

<被災地支援学生団体ネットワーク登録団体> ※2013年度

- ▶ はまのつばみ (岩手県宮古市・生活支援)
- ▶ はらひらいや (宮城県気仙沼市医療・福祉コミュニティ支援)
- ▶ 風潮学習支援 (宮城県気仙沼市医療・学習支援)
- ▶ トム次元 (宮城県気仙沼市大島・漁業支援)
- ▶ 和みの輪 (福島県相馬市・イベント運営、コミュニケーション)

<ボランティアセンター全員の実績>

2013年 6月 「新入生対象 被災地スタディーツアー」(宮城県女川町)

2013年 8,9月 「夏の東北ボランティア」(岩手県大槌町、宮城県女川町)

2014年 3月 「春季ボランティア」(岩手県宮古市、宮城県気仙沼市、女川町)

災害リーダー・防災リーダー育成

災害時に学生が自分の命を守り、周囲の助けとなることのできる実践講座を実施しています。

<実績>

- ▶ 「災害支援ボランティア講座」
- ▶ 「上級救命講習講座」
- ▶ 「AED利用講習会」

ボランティアセンタールーム

ボランティアセンタールームは、主に学生間のミーティングで使用しています。昼休みには、その日集まった学生とコーディネーターとで自由に語り合う「ランチミーティング」も催しています。ルームには、関連書籍や過去の新聞記事、DVDがあり、活動に役立てることができます。ルームを利用したい場合は、ボランティアセンターまでお越しください。

学内ボランティア

ボランティア初心者の方にお勧めの企画を実施しています。

<実績>

- ▶ クリーン作戦～学内や近隣地域での清掃活動～

地域ボランティア

近隣の社会福祉協議会や団体などのボランティア情報を提供しています。

ボランティアセンターでできること?

社会貢献の場

学びの場

中央大学
ボランティアセンター

創造の場

成長の場

中央大学 ボランティアセンター

開室時間/月～金 9:00～17:00

中央大学・明星大学駅

ボランティアセンター
6号館地下1階

アクセス

多摩モノレール 中央大学・明星大学駅 直結
京王線 多摩動物公園駅下車 徒歩10分

問い合わせ

中央大学ボランティアセンター
Address / 〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1
6号館地下1階 学生課内
Tel / 042-674-3487
Fax / 042-674-3469
Mail / chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp
Web / http://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/

中央大学 ボランティアセンター

「場」へ飛び込もう!

中央大学

CVCだよりVol.3

CHUO UNIVERSITY VOLUNTEER CENTER

CVCだより

春学期 VOL.3

発行:中央大学ボランティアセンター(多摩キャンパス6号館地下1階学生課内 042-674-3487) 発行日:2016年3月

多摩地域6大学 & 行政のコラボ企画 実施しました!

2月4日~11日、イオンモール多摩市の森にて6大学生ボランティア活動報告&防災イベントを行いました。中央大学の他、明星大学・法政大学・実践女子大学・首都大学東京・東京薬科大学が参加し、自衛隊、自衛隊ボランティアセンターと協同して実施しました。

イベントでは活動報告会、防災を考慮するプログラムや物産展などを行い、パネル展とイベントを合わせて3,523人の方々に参加いただき、6大学から60人の学生が関わりました。広範囲では、新聞掲載、雑誌、ラジオ、テレビにも取りあげてもらい、今後につながる貴重な活動となりました。



震災から5年。いろんな支援のカたち

気仙沼 & 神戸スタディーツアー

東北での支援活動を続ける。被災地支援学生団体の学生と教職員で、今後のボランティア活動へのヒントを得に、2月16~18日に気仙沼、2月21~23日に神戸へ行ってきました。多くの学びと気づきが得られたスタディーツアーだったのではないかと思います。

東北・復興支援インターン

2月28日~3月5日、宮城県黒川町で4名の学生が復興支援インターンを経験しました。復興大学員がボランティアステーションが主催、被災企業での職業体験を通じ、東北の現状や課題を実体験で学び、大学内外で発信することを目的としています。

☆☆ ボランティアセンター公認・被災地支援学生団体の新歓説明会 ☆☆

東北で支援活動を行う被災地支援学生団体が合同で新歓イベントを行います。興味のある方、ぜひとも来て下さいね!会場は決まり次第、お知らせいたします。アナタのご参加、お待ちしております!

- ◆お花見: 4月8日(金) 14:00~15:30(予定)
- ◆合同説明会: 4月11日、12日、14日の昼休み
- ◆個別説明会: 4月18日、19日、21日の昼休み

ボランティア・イベント情報 参加者募集!

★詳細・申込はボランティアセンターへ chuo_volunteer@naqa.chuo-u.ac.jp

※現在わかっている情報のみ記載しています。これから増える情報、最新情報はボランティアメールマガジンを配信した、ボランティアセンターに掲載する予定です!

月	火	水	木	金	土	日
				1	2	3
					入学式・多摩	入学式・後編
4	5	6	7	8	9	10
				お花見会	ユギ里山	
11	12	13	14	15	16	17
合同説明会	合同説明会	ボラカフェ【入門編】	合同説明会			
18	19	20	21	22	23	24
個別説明会	個別説明会	ボラカフェ【入門編】	個別説明会	ボラカフェ【地域ボラ編】	ユギ里山	
25	26	27	28	29	30	
ボラカフェ【国際ボラ編】		ボラカフェ【入門編】				

※マークの説明会などは、被災地支援学生団体が主催で行います

★ユギ里山: 大学の近所にある東京都指定の堀之内登山系山岳地域で、貴重な自然を守りながら長年にわたり手入れをされている女子の手伝い活動。農作業を行います。気持ちよい登山で、一緒に農作業を楽しみましょう!9:30~お昼まで。軍手、汚れてもいい服必要。詳細はお問い合わせください。

★ボラカフェ: お昼休みランチやお茶しながら、ボランティアについて気軽に話すボラカフェ。水曜日は「ボランティア入門編」として、ボランティアについて話したいこと、まどめてあれ話をします。25日は「国際ボランティア編」、22日は「地域ボラ編」(まちづくり)です。お茶とお菓子準備して待っています!



『ぼらせん』のひとりごと

山科満・文学部教授

※ボランティアセンターの運営委員会の先生方による、ルールコラムです。

被災地に行くボランティアの学生さんは、一度ならず「自分の行為が本当に被災地の人の役に立っているのだろうか」と自問すると思う。自立の朝[?]だが、自己満足とか、裏では偽善とか、いろんな言葉がこぼれかたの塊である。でも、そんなことを考える人こそ、現地に足を踏み入れる資格がある。「字ばせて、ただ」この後ろめたさを幾分でも自家した者だけが、あの人のための言葉を交わることが出来る。いつか、一緒に行きませんか。

編集後記

3回目の発行となるCVCの今回は、ボランティアの魅力をもっと多く皆さんに知ってほしい、年に数回発行しています。いいは新年度が始まりました。新入生の皆さん、入学おめでとう!まず「一人暮らしデビューの皆さん、頑張ってくださいね。時々家族の離れ合いが悲しくなれば、ぜひボランティアに来てみてください。地域のボランティア仲間達との離れ合いは、きっとおれおれあったか〜となると間違いないです!1人との離れ合いで成り立つボランティアは、あなたのコミュニケーション能力を引出し、伸ばしてくれるはずです。自分の新たな一面を見出したら、将来の目標が見えて来たり、まずは参加してみてくださいね!!

★メールマガジンを配信★
右記URLから申込できます。
様々な情報発信中!



2. ポスター・チラシ

クリーン作戦・春の陣

中央大学ボランティアセンター&明星大学ボランティアセンター企画

春の陣！
クリーン作戦
2015
今日からはじめられる、
地域貢献活動

日時 2015年5月30日(土)10:00~12:00
※終了後にプチ交流会を行います。

集合 9:30 ボランティアセンター前

場所 多摩キャンパス周辺(東中野地区など)

対象 学生・教職員・誰でも歓迎！
サークル・ゼミなど、グループでの参加も歓迎します！
教職員の方さん、ぜひ一緒にキャンパスを美しくしましょう！

申込 メールにて、
件名:クリーン作戦
本文:学籍番号・氏名・連絡先(メール、携帯番号)を下記まで送信して下さい。
chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp

備考 作業に支障がない、動きやすい服装にしてください。

<問い合わせ>
中央大学ボランティアセンター
(多摩キャンパス6号館地下1階)
TEL 042-674-3487

クリーン作戦・秋の陣

中央大学ボランティアセンター企画

秋の陣！
クリーン作戦
2015
今日からはじめられる、
地域貢献活動

★日時 2015年11月29日(日)9:00~12:00
※終了後に明星大学へ移動してプチ交流会を行います。

★集合 8:40 多摩キャンパス正門前

★場所 多摩キャンパス周辺(東中野地区)

★対象 学生・教職員・誰でも歓迎！
東中野自治会の皆さんと一緒に清掃します。教職員の皆さん、ぜひ地域の皆さんと一緒にキャンパス周辺を美しくしましょう！

★申込 メールにて、
件名:クリーン作戦・秋の陣
本文:学籍番号・氏名・連絡先(メール、携帯番号)を下記まで送信して下さい。
chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp

★備考 作業に支障がない、動きやすい服装にしてください。

★問い合わせ
中央大学ボランティアセンター
(多摩キャンパス6号館地下1階)
TEL 042-674-3487

キレイなキャンパスがいいね！

ボラカフェ・ナツ編

ボラカフェ
～ナツ編～
ランチとお菓子持込OK!
食べて話しながら、ほっこりしましょう。

第1回 ※どちらかの日程を選んでください
6/23(火) or 6/25(木)
第2回 ※どちらかの日程を選んでください
6/30(火) or 7/2(木)
いずれも昼休み(12:40~13:10)

<内容>
第1回 「ボランティアとは? 何のためにするもの?」
ボランティアの4原則、ボランティアの目的や意義、社会と自分
第2回 「ボランティアを始めよう! ボランティアマナーと情報の探し方」
ボランティアをする前の最低限のマナー、ボランティア情報の探し方

<場所> 多摩キャンパス 6104号室(6号館1階)

<申込方法>
メールにて受付します。
メールアドレス chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp 宛に、
件名【ボラカフェ希望】として、1.名前、2.学籍番号、
3.メールアドレス、4.参加を希望する日程(火曜or水曜)
を記入して送ってください。

<問い合わせ> 中央大学ボランティアセンター TEL: 042-674-3487

ボラカフェ・10月編

ボランティアについて、
皆で気軽に話しましょう。

ボラカフェ
～神無月編～
ランチ持込OK!
一緒にご飯しましょう。

テーマは環境 10/7水
テーマは子ども&福祉 10/14水
テーマは被災地支援 10/21水
テーマはまちづくり 10/28水

<時間> いずれも昼休み(12:40~13:10)
<場所> グループカウンセリングルーム
(5号館地下1階・学生相談室隣り)

<申込方法>
メールまたは学生課窓口(6号館地下1階)にて受付。
メールアドレス chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp 宛に、
件名【ボラカフェ希望】として、1.名前、2.学籍番号、
3.メールアドレス、4.参加を希望する日程 を記入して
送ってください。

<問い合わせ> 中央大学ボランティアセンター TEL: 042-674-3487

ボラカフェ・11月編

ボランティアについて、皆で気軽に話しましょう。

ボラカフェ

ランチ持込OK!
お茶とお菓子もあるよ!

～霜月編～


★11/11水
「避難所ボランティアから学んだこと ～台風18号水害の被災地より～」
presented by 茂木貴宏くん(文3)

★11/18水
「水を巡るエトセラ ～世界的規模での水問題～」
presented by 三原晋くん(法4)

★11/25水
「FLP佐々木ゼミ主催 中央大学リユース市の仕組み教えます」
presented by 稲本巨佑くん(商2)

<時間> いずれも昼休み(12:40～13:10)
<場所> ・11/11,18はグループカウンセリングルーム(5号館地下1階・学生相談室隣り)
・11/25は3号館3Fラウンジ(金魚鉢)

<申込方法>
メールまたは学生課窓口(6号館地下1階)にて受付。
メールアドレス chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp 宛に、
件名【ボラカフェ希望】として、1.名前、2.学籍番号、
3.メールアドレス、4.参加を希望する日程 を記入して送ってください。



<問い合わせ> 中央大学ボランティアセンター TEL: 042-674-3487

ボラカフェ・12月編

お昼休み、一緒にランチしましょう!
お茶とお菓子もあるよ!

ボラカフェ

～師走編～

★12/2水
「猫の里親探しの今日的事情とは」
～保護猫カフェボランティアやります～
presented by 戸田寿希也くん(文3)


★12/16水
「ボランティアを始める前に知っておいて欲しいこと」
presented by ボランティアセンター
内容: ボランティアの目的や意義、マナー、ボランティア情報の探し方

<時間> いずれも昼休み(12:40～13:10)
<場所> グループカウンセリングルーム(5号館地下1階・学生相談室隣り)

<申込方法>
メールまたは学生課窓口(6号館地下1階)にて受付。
メールアドレス chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp 宛に、
件名【ボラカフェ希望】として、1.名前、2.学籍番号、
3.メールアドレス、4.参加を希望する日程 を記入して送ってください。

<問い合わせ> 中央大学ボランティアセンター TEL: 042-674-3487

ボラカフェ・1月編



ボラカフェ

～2016睦月編～

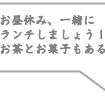
ボラカフェでは、学生の皆が日々の思いを気軽に発表できる場を提供しています。

日時: 1/13(水) お昼休み

テーマ:
「僕たちが建てる家は、家以上のものかもしれない。」
国際ボランティアを続ける理由」
presented by 下村真くん(商2)


<時間> いずれも昼休み(12:40～13:10)
<場所> グループカウンセリングルーム(5号館地下1階・学生相談室隣り)

<申込方法>
メールまたは学生課窓口(6号館地下1階)にて受付。
メールアドレス chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp 宛に、
件名【ボラカフェ希望】として、1.名前、2.学籍番号、
3.メールアドレス、4.参加を希望する日程 を記入して送ってください。



<問い合わせ> 中央大学ボランティアセンター TEL: 042-674-3487

公務員になりたい人のための連続・ボランティア講座



連続・ボランティア講座

第1回
6/25(木) 16:40～18:10
<場所> 多摩キャンパス 6103教室(6号館1階) <定員> 50人 ※定員になり次第締切

<テーマ>
「ボランティアとは??
公務員に必要なボランティア精神って??」
ボランティアの4原則、ボランティアの目的や意義、社会と自分、ボランティアマナー、ボランティア情報の探し方

公の仕事をしている先輩からボランティアについて聞いてみよう!

<ゲスト>
日野市役所 企画部地域協働課 大村国博氏
日野市社会福祉協議会 日野市ボランティアセンター 宮崎雅也氏

<申込方法> メールもしくは学生課窓口にて受付します。
メールアドレス chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp 宛に、
件名【連続・ボランティア講座希望】として、1.名前、2.学籍番号、3.メールアドレス
を記入して送ってください。
窓口の場合、多摩キャンパス 学生課ボランティアセンター(6号館1階)で受付します。

★ 連続講座のため、以下に参加できる人のみを対象とします ★
第2回 「ボランティアフィールドワーク」 夏休み期間を利用して希望するボランティアに参加
第3回 「広げてみよう! 私とボランティアの可能性」 10月上旬に多摩キャンパス教室で開催

<問い合わせ> 中央大学ボランティアセンター TEL: 042-674-3487

ボランティア講座

もう、春休み。
今年こそ、一歩踏み出したい
アナタのための

ボランティア講座

2/2 (火)
13:30~15:30

【場所】多摩キャンパス 6508教室 (6号館6階)
【テーマ】
「ボランティアって?? どんなんの??」
ボランティアの4原則、ボランティアの目的や意義、
社会と自分、ボランティアマナー、ボランティア情報の探し方
先輩の体験談も聞けるので、参加お待ちしております!

【申込方法】 メールもしくは学生課窓口にて受付します。
メールアドレス chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp 宛に、
件名【ボランティア講座希望】として、1.名前、2.学籍番号、3.メールアドレス
を記入して送ってください。
窓口の場合、多摩キャンパス 学生課ボランティアセンター(6号館1階)で受付します。
【問い合わせ】 中央大学ボランティアセンター TEL:042-674-3487

ボランティア写真展

主催:被災地支援学生団体
協力:中央大学ボランティアセンター

ボランティア 写真展 2015

【説明会】
昼休みには、ブースにて個別説明会を
開催します。

5/12~14

中央図書館1階展示スペース
(中央大学多摩キャンパス図書館)

【問合せ】
中央大学ボランティアセンター
東京都八王子市東中野742-1 6号館地下1階 学生課内
TEL 042-674-3487 FAX 042-674-3469
@阿克苏 多摩モルレル 中央大学・明星大学駅直結

復興支援インターン活動報告写真展

復興支援インターン 活動報告 写真展

宮城県女川町

中央大学
多摩キャンパス
ヒルトップ2F

2015.6.17 Wed
~2015.6.30 Tues

問い合わせ先: 中央大学ボランティアセンター

大学ボランティア活動写真展

大学ボランティア 活動写真展

~地域で活躍する大学生たち~

会期: 2015年8月3日(月)~14日(金)
会場: 日野市役所1F市民ホール西側壁

明星大学ボランティアセンター

ひびきあう日野

中央大学ボランティアセンター

【問い合わせ】日野市企画部地域協働課
中央大学ボランティアセンター tel 042-674-3487 / 明星大学ボランティアセンター tel 042-591-6231

ボランティア写真展

中央大学ボランティアセンター主催

ボランティア写真展2015

【活動報告会】
今年の夏に被災地支援に行った学生による報告会を会場内で行います。

＜実施日＞ ※各日12:40～13:10
10/21(水) テーム女川(女川町)、テーム次元(気仙沼市大島)
10/22(木) はまらいんや(気仙沼市)、面瀬学習支援(気仙沼市)
10/23(金) 女川復興支援インターン、はまぎくのつぼみ(宮古市)

10/21～26

10:00～17:00
中央図書館1階展示スペース
(中央大学多摩キャンパス図書館)

【問合せ】
中央大学ボランティアセンター
東京都八王子市東中野742-1 6号館地下1階 学生課内
TEL 042-674-3487 FAX 042-674-3469
©アソセス 多摩モビルール 中央大学・明星大学駅直結

キャンパスライフ体験会




キャンパスライフ体験会 ボランティアセンター企画
ボランティア学生の体験発表会
～私たちがボランティアを通して学んだこと～

11/7 (土) 13:10～14:00 1406号教室 (1号館4階)



大学生ボランティア活動報告&防災イベント



今年も開催！
イオンモール多摩平の森
大学生ボランティア
活動報告&防災イベント
2月4日～11日

【参加大学】
中央大学・明星大学・法政大学
実践女子大学・首都大学東京・東京薬科大学
【協力】 日野市ボランティアセンター
【後援】 日野市役所

＜問い合わせ＞中央大学ボランティアセンター TEL: 042-674-3487 メール: chuuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp

1 活動パネル展「大学生たちのボランティア活動」
2月4日(木)～11日(木) 営業時間内 場所: 3Fエスカレーター前

ボランティア活動もしている大学生たちの活動について展示をご紹介します。展示期間中は大学生スタッフより、ご来場のみなさまに活動内容について詳しくご説明いたします。

大学の垣根を越えて協力して実施した活動の様子

2 震災の教訓を生かそう！「東北応援物産展」&「地域防災イベント」
2月6日(土) 10:00～17:00 場所: 3Fイオンホール

「3.11」の約1か月前となるこの時期に、東日本大震災のできごとを改めて思い出しただけで、東北への応援と自分たちの防災について考えてみませんか？学生が普段ボランティア活動をしている東北地域の物産集めた「東北応援物産展」と子どもたちが楽しめる防災ワークショップ「カエルキャラバン」や「避難所運営ゲームHUG体験会」などを実施します。

大学生による活動発表	10:00-10:30 発表1	13:30-14:00 発表2
避難所運営ゲーム (HUG)	10:30-12:00 1回目	14:00-16:00 2回目
防災ワークショップ「カエルキャラバン」	11:00-15:00 期間中いつでも来てください！	
東北応援物産展	10:00-17:00 東北地方ならではのいろんなものがあります。買うことで応援して下さい！	

11:00-15:00には、バルーンアートや大道芸、キャンドル作りのコーナーなどもあり、さまざまなイベント盛りだくさんです♪ご家族連れでもお越しください！元気な大学生がお待ちしています。

HUG参加町会単位の参加も大歓迎です！

避難所運営ゲームの様子 | カエルキャラバンの様子 | 私たち大学生が待っています！

＜問い合わせ＞中央大学ボランティアセンター
TEL: 042-674-3487 メール: chuuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp

被災地スタディーツアー



日 程	6月5日(金)～7日(日) 2泊3日 ※5日は車中泊 ＜集合＞6月5日(金)21:00 中央大学多摩キャンパス11号館前集合
行 き 先	宮城県牡鹿郡女川町※死者行方不明者率、住居倒壊率最大の町
宿 泊 場 所	トローラーハウスの宿「EL FARO」(エルファロ)
募 集 対 象	本学部生12人程度(新入生を優先しますが2年生以上のエントリーも受け付けます)
参 加 費	7,000円 ※25日の朝食以外の食費は各自負担
交 通 手 段	貸切バス 中央大学多摩キャンパス ⇄ 女川
目 的	・東日本大震災で甚大な被害を受けた女川町の「今」を自分の目で確かめる。 ・現地の方から震災直後から今日までのお話を伺い、災害の教訓や自分たちができることを考える。 ・ボランティア活動のはじめの一歩の機会とする。
そ の 他	・事前学習・事後学習に参加し、事後レポートを提出できる人。(日程は参加者の履修を確認してから決定します) ・参加者は2015年度ボランティア保険(600円)に加入いただけます。 ・無断欠席などはキャンセル料が発生します

エントリー方法

- ▼STEP1 説明会に参加する
 - ◎多摩キャンパス 4月15日(水)・4月20日(月)12:40～13:10 @6104教室
 - ◎後楽園キャンパス 4月16日(木)12:20～12:50 @6426教室
- ▼STEP2 エントリー 【4月24日(金) 17:00〆切】
「エントリーシート」と「履修登録チェックリスト」を窓口へ提出
 - ◎多摩キャンパス → ボランティアセンター(6号館地下1階学生課内)
 - ◎後楽園キャンパス → 学生生活課(1号館1階)
- ▼STEP3 ≪選考結果発表≫【4月27日(月)12:00 掲示板・Web・Facebookで発表】
→合格者は「申込書」「承諾書」「ボランティア保険料」を提出して申込が確定します。

【問い合わせ】中央大学ボランティアセンター (多摩キャンパス6号館地下1階学生課内)
TEL 042-674-3487 メール chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp

事業報告会

中央大学教育力向上推進事業報告会 ボランティアセンター リーダー養成メソッド

**2015年
12月5日(土)
13:30～16:30**

**中央大学多摩キャンパス
Cスクエア 小ホール 入場無料**

主催：中央大学ボランティアセンター
協力：株式会社ラーニング・イニシアティブ

お問い合わせ・申し込み先
中央大学ボランティアセンター
Tel：042-674-3487

e-mail：chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1
中央大学多摩キャンパス 6号館地下1階 学生課内

プログラム

第1部
『ボランティア学生による
活動成果報告とトークセッション』
発表：被災地支援学生団体所属学生
コーディネーター：中澤秀雄氏
(ボランティアセンター長
(法学部教授))

第2部
『Evidence Based Rubricの
開発課程と活用について』
解説：浅野高氏
(株式会社ラーニング・イニシアティブ)

● 内容詳細
中央大学の建学の精神「實地適用ノ素ヲ養フ」。それは、混沌とした現場で自分を見失わず社会の利を創り出すことができる力ということではないでしょうか。
ボランティア活動の現場は、災害・貧困・障がい・異文化・遠征・環境保護など、既存の枠組みでは解決に至らない社会課題がたくさまであります。その現場に真摯に向き合い、行動することで、学生たちは確かに成長していきます。
それは、多様な主体と心を通わせる高いコミュニケーション力や混沌とした現状を把握してニーズを見つけて出す鋭い観察力、自ら解を行動で示していく機動力などであり、頭・心・身体をすべてフル活用した「五感力」だと、ボランティアセンターでは考えています。
こうしたボランティアを通じた学生たちの確実な成長を、客観的視点でも認知できるかたちで表し、正確や課外といった立派な賞を越えて、より効果的な育成を全学的に生み出すためのひとつの手掛かりとして、『Evidence Based Rubric』のオリジナル版の開発を株式会社ラーニング・イニシアティブの協力を得て取り組んできました。
2012年度後期から2014年度を事業期間として、『中央大学教育力向上推進事業』に採択され立ち上がったボランティアセンターの成果を、学生たち自身の声とともにご報告します。

● 会場案内図
中央大学多摩キャンパス Cスクエア 小ホール

● 交通案内
多摩モノレール中央大学・明大駅下車
徒歩5分 ※公共交通機関をご利用ください

● 主催
中央大学ボランティアセンター
Tel：042-674-3487
開演時間：月～金 9:00～17:00

HUG

Hinanjo
Unei
Game

**避難所
運営
ゲーム**

まずは体験
してみよう!

避難所がどういものかを体感できるカード
ゲーム「避難所運営ゲームHUG」を
知っていますか？
避難所は災害時に避難するだけでなく、家
を失った場合は何日も何カ月もそこで暮ら
す生活の場所となります。だからこそ、色々
な配慮やコツを事前に知っておくことが必要
です。避難所がどんなものかを知って災害
に備えませんか？
たくさんのご参加、お待ちしております！

12/18(金) 12:40～14:50
※昼休みのみもOK!

★場所： グループカウンセリングルーム(5号館学生相談室隣り)
★申込： メールもしくは多摩キャンパス学生課窓口にて受付します
メールアドレス chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp 宛に、
件名【HUG体験希望】として、1.名前、2.学籍番号 3.メールアドレス
を記入して送ってください。窓口の場合、ボランティアセンターへ(6号館地下1階)

15. ボランティアセンター組織規約

中央大学ボランティアセンター及びボランティアセンター運営委員会設置要綱

(設置)

第一条 中央大学学生部内にボランティアセンターを置く。

(目的)

第二条 ボランティアセンターは、中央大学学生のボランティア活動を促進し支援することを目的とする。

(センター長)

第三条 ボランティアセンターにボランティアセンター長を置く。

2 ボランティアセンター長は、本学専任教員の中から、学生部長の推薦に基づき学生部委員会に諮って、学長が委嘱する。ただし、学生部長は、推薦に先立ち、当該専任教員が所属する学部長又は大学院研究科長と事前に協議するものとする。

3 ボランティアセンター長の任期は二年とし、再任を妨げない。

(運営委員会の設置)

第四条 中央大学学生部内に中央大学ボランティアセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会は、第二条の目的にのっとり、ボランティアセンターの運営について審議決定する。

(運営委員会の構成)

第五条 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 一 ボランティアセンター長
- 二 学生部委員の互選による者一人
- 三 各学部教授会で互選した者 各一人
- 四 学生部事務長及び学生課長
- 五 学生部長が指名する者 若干人

2 運営委員会は、必要に応じ、委員以外の者の出席を求めて、その意見を聴くことができる。

(運営委員長)

第六条 運営委員会の委員長は、ボランティアセンター長をもって充てる。

2 委員長に事故があるときは、前条第二号及び第三号の委員の互選により、その代行者を定める。

3 委員長は、運営委員会を招集し、議長となる。

(運営委員の任期)

第七条 第五条第一項第三号に定める委員の任期は二年とし、再任を妨げない。

(運営委員会の任務)

第八条 運営委員会は、第二条の目的を達成するため、次の事柄について検討し、必要な施策を実施する。

- 一 中央大学学生によるボランティア活動の促進と支援
- 二 ボランティア活動に関連する正課教育や関係部課室との連携
- 三 その他、目的達成のために必要な施策

(事務所管)

第九条 運営委員会に関する事務は、学生部事務室学生課が所管する。

附則 この要綱は、平成二七年四月一日から施行する。

2015年度ボランティアセンター運営委員

	氏名	所属
センター長（運営委員長）	中澤 秀雄	法学部
運営委員	平山 令二	法学部
	丸山 佳久	経済学部
	中村 亨	商学部
	山科 満	文学部
	田口 善弘	理工学部
	加藤 久典	総合政策学部
	山ノ井 和哉	学生部事務長
	石橋 敦史	学生課長
	松本 真理子	コーディネーター
	開澤 裕美	コーディネーター

ボランティア情報の取扱いに関する方針

中央大学ボランティアセンターでは、以下に該当する募集团体の活動を、学内掲示板、ファイル閲覧、ML、コーディネーターによる相談業務を通じて、学生に広くボランティア活動の情報提供をしております。

- 1) 公益性・公共性が高い活動
- 2) 営利を目的としない活動
- 3) 活動にあたり、安全性が高いと判断される活動
- 4) 受け入れた学生に対し、教育的に配慮を伴った対応をする活動

つきましては、下記項目に同意の上、情報提供いただけますようお願いいたします。

なお、情報提供にともなってなされた一切の行為とその結果については、参加者募集を希望した団体において責任を負っていただけますようお願い申し上げます。

情報提供につきましては、中央大学ボランティアセンターで所定の審査のうえ決定いたします。提供の可否または提供予定日についてはご連絡いたしませんのでご承知おきください。また、学生の自主的な思いで活動を選択することになりますので、募集をしました件につきまして活動者が必ず見つかるとは限りませんのでご理解ください。

御団体から提供いただきました個人情報につきましては、中央大学ボランティアセンターにて活動情報の提供の目的にのみ使用させていただきます。

1. ボランティア募集の受付

- ▶ ボランティアセンターに電話・E-mail等で情報募集チラシ等の設置、募集内容についてご連絡ください。受付時に簡単な聞き取り調査をさせていただきます)
- ▶ ボランティアセンターから、E-mailもしくは郵送で「団体登録票」をお送りします。
- ▶ ご記入いただいた「団体登録票」と一緒に、団体概要パンフレット、担当者の名刺、情報募集チラシ等を郵送、もしくはセンターに直接お持ちください。
- ▶ 登録完了後、ボランティアセンターにて、お預かりしたボランティア情報をポスターやチラシ等で周知します。

2. ボランティア募集を行う団体・活動の選定基準

- 1) ボランティア募集を行う団体の範囲
活動分野や範囲、法人格の有無は問いません。
例) ボランティア・市民活動団体（任意団体、NPO）、社会福祉法人、医療法人、学校法人、社団法人や財団法人等の公益法人、国や地方自治体、独立行政法人、国連機関、大使館、企業（非営利による社会貢献活動に限ります）、労働組合など
- 2) ボランティア募集团体の受入れ体制について
 - ✓ ボランティアの募集や受入れの担当者が明確であること
 - ✓ 有償活動とボランティア活動を明確に区別していること
- 3) 以下に該当するボランティア活動は、受付できません
 - ✓ 政治的・宗教的活動に関する内容の場合。特定の政治組織や宗教団体への加入を強要・勧誘するような活動に関する内容の場合
 - ✓ 日本国または国際法上の法令に抵触する場合
 - ✓ 公序良俗に反する、または犯罪的行為を誘発するおそれのある内容の場合
 - ✓ 第三者に損害または不利益を与えたり、第三者を誹謗中傷する場合
 - ✓ 情報が虚偽または誇大の内容の場合

- ✓ 情報に関する責任体制が明確でない場合
- ✓ 精神的・肉体的苦痛が心配される場合
- ✓ 水泳監視・ベビーシッター・病人の介護等の人命にかかわることが予想される場合
- ✓ 車の運転が活動の内容に含まれる場合
- ✓ 宿泊を伴う場合（キャンプボランティアなど、適切に夜間睡眠が確保される場合についてはこの限りではない）
- ✓ 本来有資格者によってなされるべき活動の場合
- ✓ その他不適当だと判断されたもの

3. ボランティア受入れ団体との申し合わせ

ボランティア受入れ団体と中央大学ボランティアセンターとは、以下の点を申し合わせ事項として確認いたします。

- ✓ 申込をした学生に対し活動内容や条件等を提示し、その内容について両者の間で合意の上、活動をはじめること
- ✓ 活動をはじめる前には、オリエンテーション等を実施し、活動に必要な情報や留意点をあらかじめ伝達し、活動がはじまった後は、必要に応じて研修や支援等をおこなうこと
- ✓ ボランティア活動中は、各団体ボランティア担当スタッフとともに活動をおこなうこと
- ✓ 申込をした学生が適切なボランティア保険に加入済みであることを確認してから活動を始めること。ボランティア保険に未加入の場合は、申込を受け付けないこと
- ✓ 活動時間は、休憩を入れて1日8時間、週28時間を超えないこと（外国人留学生の資格外活動における就労時間に準拠）
- ✓ 夜10時以降の深夜活動をさせないこと

4. 免責

ボランティアセンターで紹介するボランティア情報に関して、発生したトラブル等に対してセンターでは責任を負いかねます。予めご了承ください。

以上

14. ボランティアセンター組織規約

団体登録シート

団体名 (正式名称)	※当てはまるものに○をつけてください NPO 法人 ・ 社会福祉法人 ・ 公益財団／公益社団法人 ・ 一般財団／一般社団法人 学校法人 ・ 任意団体 ・ 学生団体 ・ 行政 ・ その他 ()
	ふりがな
住所	〒
担当者名	ふりがな
連絡先	TEL E-mail
団体の説明	1) 設立年月日
	2) 活動分野 (当てはまるものに○をつけてください) 環境 ・ 国際 ・ こども／青少年 ・ 福祉 ・ 文化／芸術 ・ 地域／まちづくり スポーツ ・ その他 ()
	3) 団体のミッション (設立趣旨)
	4) 主な活動内容
	5) 主な活動場所 <最寄駅>
	6) 中央大学の学生ボランティアの受入れ経験の有無 有 ・ 無 (有の場合: 約 人)
ボランティア 保険	※当てはまるものに○をつけてください 団体により加入する ・ 個人で加入する必要あり

事務局記入欄 受付日 年 月 日 ()

2015年度 中央大学ボランティアセンター報告書

発行 2016年6月30日

発行者 中央大学ボランティアセンター
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1
Tel: 042-674-3487 Fax: 042-674-3469
E-mail: chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp
<http://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/>

印刷 明誠企画株式会社



発行日 2016年6月30日

発行者 中央大学ボランティアセンター